
逃走中 × 無双 × 現代人 ~ 走る英雄たち ~

鶴久保ゆうすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃走中×無双×現代人

～走る英雄たち～

【Nコード】

N2732Q

【作者名】

鶴久保ゆうすけ

【あらすじ】

あの無双OROCHI魔王再臨のキャラクターと現代人が逃走中！舞台は金持ちや住民たちが暮らす大都会・クリスタルタウン。そして、この街を我が物にしようとするくらむ人物の陰謀に逃走者がまきこまれていく。時空を越えた奇跡の逃走劇をお楽しみください！

ゝ走る英雄たちゝ（前書き）

タイトル間違つて原作名とおなじになりました。すいません。正しくは逃走者とエリア紹介です

ゝ走る英雄たちゝ

この小説は無双OROCHI魔王再臨にでてくるキャラクターとオリジナルキャラクターが逃走中をやるというものです。

それではキャラクター紹介です！

現代軍

希羅きろ

好奇心旺盛で活発な金髪の少年。足は速く、ミッションには行くつもりらしい。

陸我りくが

気弱だが仲間思いの優しい少年。足はまあ速いが、ミッションにはあまり行かないらしい。

龍義りゅうぎ

元ヤンキーで喧嘩っ早いが以外な一面を持つ少年。足は現代軍のなかで一番速い、ミッションには行くつもりらしい。

流海るかい

希羅たちとはあまり仲はよくないが星地とは兄弟のように仲がいい。足は速く、ミッションには行くつもりらしい。

陸理りくり

希羅の彼女で口うるさい所がある。足は遅いが、ミッションには行くつもりらしい。

明理あかり

陸理の妹で積極的な所がある。足は女性陣のなかで一番速い。ミッションには行くつもりらしい。

真実 まみ

星地と流海の幼なじみ。足は普通で、ミッションにはあまり行かないらしい。

星地 せいち

流海と仲がよく、真実に想いをよせている。足は速いがミッションには行きたいが方向音痴が悩ましい。

戦国軍 さなだゆきむら

真田幸村 まえたけいじ

おたのぶなが ふつまこたろう

前田慶次織田信長風魔小太郎 みやもとむさし

宮本武蔵 みなもとこのよしつね

源義経 あけちみつひで

明智光秀 いしかわこえもん

石川五衛門 うえすぎけんしん

上杉謙信 たいらのきよもり

平清盛 まえだとしい

前田利家 ちようそかへもとちか

長宗我部親近 おいち

お市 おくに

阿国

くのいち

ガラシャ

佐々木小二郎 ささきじろう

柴田勝家 しばたかつい

雑賀孫市 さいかまごいち

武田信玄 たけだしんげん

伊達政宗濃姫 だてまさむね のうひめ

服部半蔵 はっとりはんぞう

森蘭丸 もりらんまる

とよとみひでよし
豊臣秀吉
いまがわよしもと
今川義元
ほんただだかつ
本多忠勝
いなひめ
稲姫
とくがわいえやす
徳川家康
いしだみつなり
石田三成
あさいながまさ
浅井長政
しまさこん
島左近
しまつよしひろ
島津義弘
立花ざんちよ
なへえかねつぐ
直江兼続
ねね

三國軍

ちよううん
りゆうび
かんう
ちようひ
しよかつりよう
ばちよう
こうちゆう
きようい
ぎえん
ほうとう
げつえい
かんぺい
せいさい
かこうえん
てんい
きよちよ

そうそう
かこうえん
ちようりよう
しばい
じょこう
ちようこう
しんき
そうじん
そうひ
ほうとく
しゅうゆ
りくそん
たいしじ
そんしょうこう
そんけん(父)
そんけん
りよもう
かねい
こうがい
そんさく
だいきよう
しょうきよう
しゅうたい
りようとう
ちようせん
りよふ
とうたく
えんしょう
ちようかく
もうかく

しゅくゆう

さじ

長くなりましたが全部で97人です。このゲームを知らないひとでも楽しんでいただけたらなと思います。

エリア

東京ドーム6個分

たくさんのお金持ちや住人がすむ大都会・クリスタルタウン
それでは次回はオープニングゲームです！

楽しみに！！

ゝ走る英雄たちゝ（後書き）

受験勉強と小説を両方がんばります。

第1話 オープニングゲーム&助っ人登場（前書き）

いよいよオープニングゲームスタートと助っ人参上です！

第1話 オープニングゲーム&助っ人登場

大都会・クリスタルタウンに集められた92人の逃走者たち。

彼らの目の前には3つのハンターボックスがおかれ、その距離は20メートルほどだ。

希羅「うわっ・・・なんだ よ、あいつら」

ハンターを警戒する金髪の男。

そのとき近くにあったスピーカーから低い声が流れる。

明理「何なのよ、これ」

龍義「オレが知るかよ」

「これよりゲームをはじめ。だがその前にそちらに助っ人を送る。」

全員「助っ人？」

そのとき逃走者たちの後ろから足音が聞こえた。

「???」「我々もこのゲームに参加させてもらっぞ」
陸我「誰？」

その人物たちとは・・・

無双OROCHI魔王再臨に新キャラクターとして登場する

太公望

伏犠

じよか

孫悟空

卑弥呼

だった。

かんう「これで97人になっ

たという訳か」

そしてまたスピーカーから声が聞こえた。

「君達の目の前にある3体のハンターは鎖で繋がれており、97本のうち1本がハンターを解放するハズレの鎖。それを引くとハンターが放出されゲームがスタートする」

その放送の後にスタッフが箱の様なものをすぐそばにあった机に置いた。

スタッフ「くじ引きで鎖を引く順番を決めましょうかね」

全員「はあ？」

そう言われると1人ずつくじを引いた。

100人近く人数が多いので時間がかかった。

陸我「僕から引くの？」

最初に鎖を引くのは小心者の陸我だ。

流海「何色にするんだ？」

陸我「えっと・・・緑だね」

希羅「なんでー？」

少し迷ってから答える。

陸我「好きな色なんだ」

星地「そつ・・・そうかい」

しっかりと鎖をにぎる。

陸我「引くよ！」

逃走者は逃げる準備をする。

クリアーか・・・

ハンター放出か・・・

ジャラ

シーン

ハンターは放出されなかった。

陸我「みんな、あと頑張つてね」

そう言いとその場から走る。

クリアーした逃走者は離れた場所からスタートできる。

そして次に鎖を引くものは

秀吉「おっ、わしかあ」

孫市「頼んだぜ！」

ねね「お前さま、頑張るんだよ」

秀吉「おうさ！」

友と妻から声援を受けると秀吉はハンターボックスに向かった。

秀吉「なんじゃ、こいつら 怖いのお」

ねね「お前さま、何色にするんだい？」

秀吉「しゃあ！金色にするぞ」

元親「金と同じ字だからな」

秀吉「ギクツ・・・」

しばらくの沈黙。

秀吉「じ、じゃあ引くで」
鎖をにぎる。

クリアーか・・・

ハンター放出か・・・

ジャラ

シーン

ハンターは放出されなかった。

秀吉「ふう、あとはまかせたでえー」

その場から走る。

次に鎖を引くのは・・・

龍義「オレか・・・」

希羅「がんばれー」

ハンターボックスに向かい鎖のまえに立つ。

龍義「ハズレの鎖は95分の1か・・・」

明理「何色にするの？」

希羅「あのさ、元ヤンって運悪かったりするの？」

陸理「さあ、ケンカは強いんじゃないの？」

明理「じゃあ、ハンターが迫ったときボコれば・・・」

希羅「確保どころか、強制失格だな」

龍義「てめえら何言つんだよ！」

元ヤンの話はともかく鎖を選びはじめた。

龍義「黄色にするぜ！」

鎖をにぎる。

クリアーか・・・

ハンター放出か・・・

ジャラ

ガタン！

全員「わぁー！ー！」

龍義「ちくしょう！」

一斉に走る逃走者たち。

ハンターを閉じ込めていたボックスがあいてハンターが解放された。

ハズレの鎖を引いた龍義だったが自慢の脚力で他の逃走者を追い越した。

陸理「きゃあー！ー！」

ハンターが陸理に向かって走る。

ポンツ 陸理確保 残り96人

陸理「何よ、あのスピード・・・」

ハンターはすぐさま別の逃走者を搜索する。

・ 制限時間ハンターから逃げ切りつたら賞金がゲットできるそれが・

r a n k f o u r m o n e y

逃走中

舞台はたくさん的高層ビルがたつ大都会。

このひろいエリアで逃走者はハンターから逃げる！

ハンターに捕まれば賞金はゼロ。

さらにこのゲームはリタイアつまり自しゅができ、その時点までの賞金が獲得できる。

果たして生きのこるには誰だ。

次回 本格的にゲームが

スタート！

第1話 オープニングゲーム&助っ人登場（後書き）

始まった170分の逃走ゲーム！勝ちのこるのは誰なのか・・・

第2話 ミッションその1（前書き）

逃走中は次いつ放送かなあ

第2話 ミッションその1

陸理が捕まり、残りの逃走者は96人となった。

逃走者が逃げるエリアは、宝石の名前の建物が並ぶ宝石エリアや、お金持ちが住む高級住宅街やパーティー会場エリアなど様々なエリアがある。

そしてサファイアパークエリアでは・・・

伏犠「ふう、仙人はあまり走らないからのお」

見た目はアゴヒゲを生やした普通の男性だが、喋り方がお年よりの様な感じた。

ところで伏犠の言う仙人とは、様々な術を使う人の事を言い、仙界という世界に住んでいるのだ。

じよか「全くだな。ところで坊や、これからどこへ行くつもりだ？」

じよかが太公望に問う。

太公望「まずは見通しが良い場所に移動して、それから・・・」

そのとき伏犠が叫んだ。

伏犠「ハンターじゃ！逃げるぞ、おい！」

太公望「何！？」

ハンターが仙人に向かって走る。

伏犠「ここは建物に・・・」

建物に隠れるため、伏犠は走って建物が多いエメラルドタワーへ向かう。

一方、太公望とじよかは、建物の曲がり角を利用してうまくハンターをまいた。

じよか「はあっ・・・伏犠と離れてしまった。」

太公望「仕方ない、ここからは別行動だ。」

そう言う太公望はサファイアパークに続く道を走った。

彼の美しく白い髪が風になびく。それでもまだ青年だ。

じよか「さてと、また合流できるように、どこかで電話するか」

そういうと彼女は建物の影に隠れた。

ここはパーティー会場。

クリスタルタウンに住んでいる金持ちの人々が話をしたり、高い宝石などを自慢している。

「このワイン、いい香りですわ」

「あらっ、まあ」

そのときだった。

???「皆さん、ようこそ」

そこに男がステージに現れた。

「クリスタル様ですわ」

金持ちたちが騒ぎ出した。

男はマイクを持ち、会場の人々をながめる。

「うむっ・・・」

男は考えるそぶりをした。

この男の名はクリスタル。

クリスタルタウンを建設した権力の持ち主。

クリスタルタウンのクリスタルはこの男の名前だ。

そしてクリスタルの後ろにはハンターボックスが・・・

クリスタル「さて、これを見つけたのだが・・・」

ハンターボックスに注目する会場のものたち。

クリスタル「何なのか気になるな」

「えっ・・・」

ざわめく会場の人々。

そういうとクリスタルは、ハンターボックスにかけてある鍵を外そうとする。

このドラマが逃走者の行方を左右する。

ピリリリリリリー
メールだ。

そんなさく「おっ、ミッションじゃねえか」

しゅうゆ「むっ、なんだ？」

りくそん「パーティー会場にハンターボックス6個設置した。」

そんしょうこう「残り145分になると、ボックスからハンターが解放される。」

かんねい「なお、逃走者が持っているクリスタルコイン1枚につき1体ハンターを封印できる。」

りょうとう「やるかやらないかは逃走者の自由だ。って、ハンター増えるのか？」

そんけん「ここからはパーティー会場は遠い、さてとどうするかだな」

MISSION

ハンターを封印せよ

パーティー会場内に6個のハンターボックスが置かれ残り145分になるとクリスタルがハンターを解放してしまい、その数は増えてしまう。

しかし、逃走者が持っているクリスタルコイン1枚でハンター1体を封印できる。

しかしこのクリスタルコインは自しゅするときに必要なのでクリスタルコインを使った逃走者は、自しゅできなくなる。

お市「このコインでハンターを1体封印できるんですね」

長政「市、それがしも手伝うぞ」

この夫婦はハンターを封印するためパーティー会場へ向かう。

流海「星地どうする、パーティー会場向かうか？」

星地「えーっ、めんどくさいなあ、ちょっと遠いよ。」

そういいながらも、流海と星地はパーティー会場へ向かう。

龍義「ここはエメラルドタワーだから、そこまで遠くねえな」

陸我「ハンター増えるのは困るよね」

希羅「よっしゃあ、パーティー会場に行くぞ」

希羅と陸我と龍義もパーティー会場へ走るようだ。

しかし・・・そこにハンター・・・

ハンターが希羅たちに向かって走る。

龍義「おい、ハンターだ！」

希羅「嘘だろ！？」

陸我「逃げようっ！」

一斉に走る希羅たち。

龍義は建物の中に逃げ込む。

希羅と陸我は建物の曲がり角を利用して運よくハンターをまいた。

希羅「やべえ、パーティー会場が遠くなっちゃった。」

陸我「希羅、どうするの？」

少し話し合いをすると希羅と陸我が建物の中へはいる。

どうやらミッションへは向かはないようだ。

はたしてミッションをクリアすることができるのか

次回をお楽しみに！

第2話 ミッションその1（後書き）

ハンターって何者なんだろうな・・・

第3話 ミッションその2

く秘書の企みく（前書き）

ハンターを封印できるのか・・・

彼らの勇気ある逃走劇をご覧下さい！

真実「あのさ、もうちょい私たちの会話とかさ、そういう場面を書いてほしいんだけど・・・」

ゆーすけ「さてと勉強」

明理「おいっ」

第3話 ミッションその2

秘書の企み

エリアには3体のハンターが放しゅつされ逃走者の搜索を行っている。

明理「えっと、パーティー会場はここね！」

地図を見ながらパーティー会場の場所を確認する勇敢な妹。

姉のために頑張るようだ。

幸村「どうします？兼続殿」

兼続「ここはダイヤモンド商店あたりだな」

三成「仕方ない、まかせよう」

パチンコアメジスト付近

左近「やれやれ、やっかいなミッションだねえ」

慶次「あと6分か・・・しかたねえ、誰かが封印するだろう」

せいさい「どうするの？」

かんぺい「えっ・・・そうだって・・・ここパーティー会場じゃ

ないか」

偶然にもパーティー会場あたりにいた、せいさいとかんぺい。

せいさい「さあ行きましょう」

かんぺい「あつ、そうだね」

せいさい「コインはこれね」

かんぺい「わっ、きれいな色だ」

お市「あなたがたも、ハンターを封印するのですか？」

そこにお市と長政が到着。

龍義「はあ・・・ここか」

そこに龍義が到着。

流海「ちくしょう、星地とはぐれちゃった」

そこに流海が到着。

逃走者たちはパーティー会場へ入った。

お市「あれですね」

人をよけてハンターボックスへ進む。

クリスタル「何だ、お前らは」

お市「私たちはハンターを封印するんです」

流海「そいつらを封印しねえと、オレたちが困るんだよ」

クリスタル「ハンターとはこいつらの事か？」

長政「それがしたちや、仲間たちにも、迷惑をかけてしまうのだ」

クリスタル「うむっ・・・そうなのか」

逃走者はクリスタルを説得したあと、ひとりずつ、コインをハンターボックスにある穴にはめ込んだ。

龍義「よっしゃあ！」

逃走者たちはハンター6体をすべて封印した。

クリスタル「このハンターとやらは、そんなに悪いやつなのか？」

お市「まあ、そうですね」

長政「それがしたちを、確保するのだ」

クリスタル「大変そうだな頑張ってくれ」

少だけ会話をクリスタルとかわしたら、逃走者たちはパーティー会場を後にした。

その頃この姉妹は・・・

だいきょう「ハンター素早かったですね」

しょうきょう「お姉ちゃん私がハンター捕まえるからねえ！」

その前に確保される。

だが仲良し姉妹の近くに、ハンターが・・・

しょうきょう「わぁー高い建物だあ」

だいきょう「まあ、そんな事を言ってる場合じゃ、って、きゃあ！」

しょうきょう「どったの？わあっ！」

ハンターが姉妹に向かって走る。

だいきょう「あそこに建物がつ・・・」

そんなさく「お前ら、何してんだ、うおっ！」

そこに、だいきょうの夫のそんなさくが合流。

しょうきょう「そんなさく様お姉ちゃん、逃げてーっ！」

だいきょう「しょうきょう何言ってるのぉ！」

そんなさく「仕方ねえ、逃げるぞ、だいきょう！」

しょうきょう「ハンターなんかに、負けないんだからねっ！」

そう言つと、しょうきょうは素早い動きでハンターをかわす。

そんなさく「そうか、オレたちが逃げる時間を稼いでるってわけだな」
だいきょう「しろうきょう……」

ハンターは、しろうきょうの動きを読み確保しようとする。

しろうきょう「はぁ……ちょっときついかも」

ハンターはまだ息をきらしていない。

しろうきょう「きゃっ!」
地面に尻餅をついてしまった。

ハンターは、そのすきを逃さない。

ポンッ しろうきょう確保残り95人

しろうきょう「お姉ちゃんそんなさく様、頑張つて」

ピリリリリリ

だいきょう「あつメール、って確保情報!？」

そんなく「エメラルドタワー付近にて、しょうきょう確保、残り9人つてあっちゃあ」

だいきょう「しょうきょう・・・あれなんか別のメールがありますね」

そんなく「え〜っと、ミッションの結果だ、何なに　かんぺい・せいさい・龍義・流海・お市・長政の活躍によりハンターボックスを封印することができた。　おっ、すげーじゃねえか」

しゅうゆ「ほう、やるではないか、しかし　しょうきょうが捕まっていた」

しょうきょうの夫・しゅうゆが建物の影に隠れてそうつぶやいた。

クリスタルは悩んでいた。

ラピスラズリ「どうされました?」

クリスタル「いや　先程の者たちが気になってな　しかもまだ仲間がたくさんうろちよろとしているらしいのだ」

秘書のラピスラズリは問う。

ラピスラズリ「先程の者たちとは・・・」

クリスタル「いや　先程の者たちとはだな、パーティー会場にあったハンターという奴らを封印した者たちだ」

ラピスラズリ「ハンター・・・？」

クリスタル「そいつらを困らせる奴らで確保するそうだ」

ラピスラズリ「追いかけてここでもしているのでしょうか」

クリスタル「何、全くだ」

ラピスラズリ「そうだ、　オレに考えがあるんですけど」

クリスタル「どういう事だ？」

ラピスラズリ「ちょっと待ってくださいね、電話しますんで」

ラピスラズリは携帯電話で連絡をした。

ラピスラズリ「あっ、うんええ、はいそうです」

だれかに連絡をしたあと、携帯電話をポケットになおした。

クリスタル「だれに電話をしたのだ？」

ラピスラズリ「乗り物関係の仕事をしている人ですよ」

クリスタル「そいつに何を言ったのだ・・・ってん？」

ブルルルルル

ラピスラズリ「さすがだな到着がはやいな」

クリスタル「なっ・・・これは・・・」

ラピスラズリ「凄いでしょ」

クリスタル「どういうことだ、おい！」

問うても答えない。

ラピスラズリ「さあ、どこまで逃げれるかな」

さらなる恐怖が逃走者を 窮地に追い込む。

ピリリリリリ
メールだ。

りゅうび「わっ、何だ！」

かんう「うむっ、ミッションか・・・」

きょうい「これより上空からの監視を行う。」

げつえい「ヘリは逃走者を見つけると・・・」

ばちょう「地上のハンターにその居場所を教える。 なお、ダイ
ヤモンド商店にある3つのレバーを三人同時に下ろせばヘリを撤退
させることができる。」

ほうとく「ヘリは5分に1台増え続ける、いそぎたまえってこれはやばいねえ」

こうちゅう「誰かと協力をしなきゃならんのか、ヘリはこわいのお」

MISSION

ハンターヘリを

追い払え

ハンターを乗せたヘリが 逃走者の監視を行い、見つけた逃走者の位置を地上のハンターに伝える。

ヘリを追い返すにはダイヤモンド商店にあるレバーを3人同時にさげるしかない。

はたしてミッションに挑むのはどの逃走者なのか

今回は勇気ある逃走者たちがミッションに挑む！

第3話 ミッションその2

く秘書の企みく（後書き）

クラスでも逃走中の話をきいたりする。

第4話 難題ミッション（前書き）

この小説で登場するおもなお店や建物

パーティー会場・エメラルドタワー・ダイヤモンド商店・サファイアパーク・パチンコアメジストなど

第4話 難題ミッション

ハンターを乗せたヘリが、逃走者の監視を始めた事により逃げにくい状況になった。

稲姫「父上、どうなさいますか？」

忠勝「ここからは、かなり距離があるな」

この親子はミッションへは向かわないようだ。

くのいち「あゝ、幸村様あどこ」

幸村に仕える女忍者

くのいち

くのいち「しかもヘリはさ私たちのこと監視してるしなあ」

建物の影に隠れてヘリを 警戒する。

しかし後ろに・・・
ハンター・・・

くのいち「にしても、このビル高い・・・」

ハンターがくのいちに向かって走る。

くのいち「迷ったなあ・・・どのへんだろう・・・ わぁーっ！」

振り向いた瞬間にハンターに気づいた、くのいち。

まっすぐな道を逃げる。

足はかなり速いが、ハンターは、まだくのいちを追いかける。

くのいち「忍びのわたしを追いかけるなんて・・・」

逃げる先には・・・

幸村「むっ、あれは」

話し合いをしてた幸村たちだ。

くのいち「幸村様、やっとみつけたあゝ」

幸村「くのいち、ってお前なんでハンターに追われてるのだ!？」

三成「幸村、お前の忍びではないか!」

兼続「つべこべ言わずに、逃げるぞ!」

幸村・三成・兼続が一斉に逃げるが、その様子をへりに乗ってるハンターがとらえた。

位置を地上のハンターに　伝える。

情報を受けたハンターは、確保へと向かう。

一方、くのいちは建物のまがり角を利用してうまく、ハンターをまいた。

くのいち「幸村様、大丈夫かなあ」

幸村「くのいち、うまくまいたろうか」

兼続「忍びなのだから、うまく逃げたんじゃないか」

三成「ハンターとへりか、少しきついな・・・おい、あれは・・・」

前方を見つめる。

その先は・・・

兼続「ハンターだ！」

幸村「しかも2人ですよ」

三成「まさかへりに見つかったのか・・・」

兼続は建物のなかに逃げる。

だがハンターも建物の中まで兼続を追う。

兼続「何っ！ハンターめ」

ズコッ

兼続「うおっ！」

転んでしまった義の戦士。

ハンターは歩いて兼続の前に立つ。

ポンツ 直江兼続 確保 残り94人

兼続「うぬ・・・不覚だ 愛と義にちかってなんたる・・・」

ピリリリリリリ

三成「何、確保情報だと」

幸村「兼続殿が・・・」

謙信「兼続、捕まったか」
信玄「ハンターとやらは、やっかいやお」

ぎんちよ「ミッションはまかせるか」

義弘「広いな、迷ったようだな」

1人が捕まれば、それだけ 逃走者が動揺してしまう。

龍義「ちくしょう、レバーは・・・」

星地「ハンターから逃げるのも大変なのに・・・」

真実「ダイヤモンド商店はあれっ、おかしいな・・・」

ミッションに向かう逃走者たちだがへりに監視されているため探すのが難しい。

りくそん「むっ、あれは」

ダイヤモンド商店のレバーをみつけた、りくそん。

りくそん「まだ、もう少し待とう」

ガラシャ「ダイヤモンド商店はここなのじゃー!」

りくそん「えっ・・・あなたは」

そこには1人の少女がいた。

ガラシャ「わらわ、信長殿に仕える武将の明智光秀の娘じゃ」

りくそん「たしか、ガラシャ殿ですよね」

ガラシャ「うむっあと1人そろえばのお、レバーが下げられるのに」

りくそん「そうですね・・・ってあれ？」

誰かを見つけた、それは

ガラシャ「ハンターじゃ！」

りくそん「逃げましょう、せっかく集まりましたけど」

そう言うと彼は、素早い動きで別の道へ進む。

ガラシャ「ほおっ、すごい速さなのじゃ」

いそいでまがり角を使い、ハンターをまこうとするが・・・

ガラシャ「このハンター、うまくまけないのじゃ！」

ハンターがみんなまけるとは限らない。

りくそん「ハンターあそこまで速いとは・・・」

監視をしていたヘリが、りくそんをとらえた。

一方、ガラシャは建物の裏にいた。

ガラシャ「ふう〜」

うまくまいたようだ。

しかしレバーから遠くなくなってしまった。

ガラシャ「よしっ、ダイヤモンド商店に向かうのじゃ」

ヘリとハンターを警戒しながら再びダイヤモンド商店へと向かう。

ガラシャ「こんな所に道が・・・」

その道を通る。

りくそん「ダイヤモンド商店だ」

レバーを発見した、りくそん。

しかし、ヘリの通報によりハンターが、りくそんの確保へと向かう。

りくそん「まだレバーは、さげられないな」

しかし、りくそんの背後にハンター・・・

りくそん「しゅっゆ殿に電話するか・・・ってっわぁー!」

ハンターに気づくのが少しおそかった、りくそん。

まけじと逃げるが、ハンターも、りくそんを追う。

真つすくな道へと逃げる。

ハンターとの直球勝負だ。

しかし逃げる先に別のハンター。

うまくハンターをかわそうとする、りくそん。

だが反射しんけいが優れているハンターにはあまりきかない。

ポンツ　りくそん確保

残り93人

りくそん「ぐっ・・・」

ハンターとの好勝負をしたりくそん。

このミッションで2人が捕まり、ヘリは逃走者を監視している。

ミッションをクリアできるのか。

次回 ミッションの結果とラピスラズリとクリスタルのであいと
真意が明らかに

第4話 難題ミッション（後書き）

賞金は1秒200円ずつ増え、たぶん100万越えると思います。

後は会話の部分がつながったりして読みにくい所があったり、間違っているところもありました。

すいません。

第5話 ラピスラズリの過去

～一番への道のり～（前書き）

ちょっと長いです。ラピスラズリの過去が明らかになります。

第5話 ラピスラズリの過去

～一番への道のり～

足の速いりくそんが捕まりミッションをクリアーできない逃走者たち。

ピリリリリリリ

たいしじ「ダイヤモンド商店にて、りくそん確保・・・そんな!？」

しゅうゆ「まずいな、この状況は・・・ほかに方法を探すか」

かんねい「げえっ、まじかよ」

そのころレバーの辺りを歩いてた希羅。

そこでせまい道を通った、ガラシャと合流。

希羅「おっ、ガラシャ・・・さんだっけ、レバーをさ下げようと思つて・・・」

ガラシャ「わらは、そんな年上じゃないのじゃ」

希羅「ごめん、じゃあさあガラシャちゃん、ほかにさミッションするやつしってる？」

ガラシャ「いや、知らないのじゃ、だれかに電話してみるかのう」

希羅「じゃ、オレも電話してみるから」

希羅とガラシャはそれぞれ連絡をする。

ヘリが増えるまで1分。

逃走者はミッションをクリアーできるのか。

ガラシャ「もしもし、孫かつ？」

孫市「あつ、そうだ、どうしたんだい？」

ガラシャ「なんじゃ、ミッションには向かわないのか」

孫市「うーん、そうだねえリスクが高いからな」

ガラシャ「じゃが、孫よ、このままだとへリが増えてしまつのじゃぞ！」

孫市「悪いね、またあとでな」

ガラシャ「ちよつ、孫！」

そこで電話からプーツと音になった。

希羅「なんだって？」

ガラシャ「ミッションへは向かわないようじゃ・・・」

希羅「くそつ、あと1人そろえば・・・あつ、もしもし陸我が？」

陸我「うん、どうしたの？」

希羅「ミッションどうするんだ？」

陸我「レバー下げるやつだね、自信あまりないけど向かってるよ」

希羅「今さ、どのあたりだ」

陸我「えっと、サファイアパークのどこ」

希羅「おっ、だったら近いじゃねえか」

陸我「うん、頑張るよ」

そして陸我と話した後、ヘリが増えた。

これでヘリは合計2台になった。

そんなさく「おい、ヘリ増えてんじゃねえかよ！」

だいきょう「建物へ隠れましょう」

ちようつん「まずいなあ」

もう1台増えたヘリがある逃走者をとらえた。

陸我「あゝっ、もうきついな」

ひたすらに走る、陸我だ。

へりに乗ってるハンターは別のハンターに位置を伝える。

情報を受けたハンターは、陸我の確保へと向かう。

陸我「パチンコアメジストだ、じゃあレバーは・・・うあっ！」

ハンターが陸我に向かって走る。

陸我「そんな、くそー！」

そう言っていると、陸我はパチンコアメジスト店内に入った。

だがハンターも続いて追う。

店内は音がうるさく、ハンターの足音に気づきにくい。

陸我「ハンターに見つかったら逃げるのは、難しいよね」

そつと周りを警戒しながら店内を後にした陸我。

だが行く先に別のハンターが、陸我に向かって勢いよく走る。

陸我「ひっ・・・いやだーあ」

後ろを向いて逃げようとすると、パチンコアメジストを後にしたハンターが陸我に向かい走る。

陸我「うそっ！？さっきのハンター！」

ハンターたちは、陸我を、挟み打ちにした。

陸我「うわーっ！」

ポンッ 陸我 確保残り92人

ピリリリリリ

希羅「うおっ！何だえつと・・・陸我確保！？嘘だろ・・・」

ガラシャ「捕まってしまったのお・・・」

がっかりする希羅とガラシャ・・・

そこへ・・・

秀吉「どうしたんじゃ？」

偶然近くを通り掛かった、秀吉。

ガラシャ「秀吉殿！って、これでレバーをさげられるのじゃ！」

希羅「よっしゃあ、行くぜ！」

ガラシャ「ほらっ、秀吉殿なにボサッとしてるのじゃ」

秀吉「えっ、あっ、そうじゃな、ミッションだったな」

3人はレバーを掴んで、セーのという合図で一斉にレバーを下げる。

近くにあった画面に、ミッションクリアの文字が写ったり。

するとへりは撤退した。

ピリリリリリ

小太郎「ガラシャ・希羅・豊臣秀吉の活躍により、レバーを下げ、へりを追い払うことができた。」

武蔵「おっ、すごいな」

小次郎「やあつ、武蔵」

武蔵の戦った相手・小次郎が武蔵のもとへ駆け寄る。

武蔵「おっ、小次郎！何だよ」

小次郎「もうっ！僕と君の仲じゃないか」

武蔵「あんな、オレは集中してんだよーっ！」

小次郎「そんなにさあ、金がほしいのかい？」

そう言われると答えが返せない。

だが、そんな彼らの近くにハンター・・・

武蔵「どこかに隠れたほうが・・・わあっ！」

小次郎「どうしたの、武蔵・・・うわっ！」

ハンターが2人の姿をとらえ、向かい走る。

武蔵「やべえ、逃げるぞ」

小次郎「ここに逃げるのさあ！」

しかし、逃げる先に別のハンター。

武蔵「おっと」

せまい路道を見つけ、そこに逃げ込む武蔵。

小次郎「そんなー、武蔵・・・あゝ！」

ポンッ 佐々木小次郎 確保残り91人

牢獄DEトーク

陸理「何でここで、私たちのトークよ！」

陸我「トークなんだから、しゃべろうよ」

りくそん「そうですね・・・あっ・・・」

しょうきょう「あれーっ、捕まったのかなあ？」

兼続「どうした、あまり、元気ないな」

小次郎「もうー、武蔵い」

しかしそのころ、クリスタルは・・・

クリスタル「おのれ、逃走者たちのやつ・・・」

ラピスラズリ「へりは追い払われてしまいましたね」

クリスタル「このままでは・・・なんとかならんのか私の計画が・・・」

ラピスラズリ「それではあのハンターとやらの協力してもらいまし

よう
「

クリスタル「あいつらを、追いつけるやつが……」

ラピスラズリ「はい、それでは」

ここは謎の部屋。

1人の人物がいた。

その人物はパソコンでなにかをしている。

画面をスライドして、手でタッチをすると、たくさんのハンターが画面に写った。

すると・・・

クリスタル「うわっ!？」

ラピスラズリ「これだけハンター集まったから、逃走者も逃げるのは難しいでしょう」

クリスタル「しかし、どうしてこいつらをここに・・・」

ラピスラズリ「何って、ハンター召喚してもらったんですよ」

クリスタル「誰が召喚したんだ!？」

ラピスラズリ「まあ、召喚してもらったんだし、それと・・・」

クリスタル「な、何だ」

ラピスラズリ「この街の一番はこのオレだ」

指をパチンとならすと、ラピスラズリの部下らしき、男たちがクリスタルを後ろからとりおさえた。

クリスタル「なっ、どういうことだ！」

ラピスラズリ「オレがあんたの秘書になったのは、この街の一番になるためだよ」

クリスタル「何が目的だ・・・」

ラピスラズリ「この街の一番になるために、その為にあんたを利用したんだよ」

クリスタル「ふざけるな！さっきから何をいつてるんだ」

ラピスラズリ「まずは金持ちから、金をいただいて、それから銀行から金庫を盗んであとは・・・」

クリスタル「まで！私とその計画をやるはずだった」

ラピスラズリ「うるせえな！」

クリスタルを殴るラピスラズリ。

クリスタル「うぐっ・・・」

ラピスラズリ「なんでだろうな・・・」

クリスタル「何がだ・・・」

ラピスラズリ「あんたを見てると思いだしたよ、あの時のこと」

さかのぼること、数年前―

幼い頃から父からの暴力を受けていたラピスラズリは、母と暮らす事を決め、その後離婚した。

だがそれから母と暮らしていたラピスラズリだが、母が次第に育児を放棄してしまう。

それからというものの、母がだんだんいらつきはじめ、ラピスラズリ

に暴力を振るうようになった。

その後、母が男と一緒に家をでて行ってしまった。

悲しみにくれ、ある日のこと公園で泣いていると、1人の男が声をかけてきた。

それがクリスタルだった。

ラピスラズリは暴力を受けていたこと、母から相手にされなかったこと、また、母が男を作ってでて行ってしまったこと、すべてを話した。

クリスタル「それは辛かったな・・・」

ラピスラズリ「はい・・・」

クリスタル「どうだろうか、君に提案があるのだが」

ラピスラズリ「なんですか・・・」

クリスタル「私と住まないか」

ラピスラズリ「はっ・・・？何言ってるですか」

クリスタル「いや、君がよければの事だが・・・」

しばらくの沈黙。

ラピスラズリ「迷惑じゃないんですか・・・？」

クリスタル「そんなことないさ、君がよければの話だから」

初めて優しくされた事で、感動したラピスラズリは声をあげて泣いた。

こうしてラピスラズリは、クリスタルと一緒にくらす事になった。

ある日、クリスタルはラピスラズリにある話を持ち掛けた。

ラピスラズリ「建設・・・ですか？」

クリスタル「ここに、街を建てようとおもってな」

ラピスラズリ「でも大変じゃないんですか」

クリスタル「私の夢なんだ」

ラピスラズリ「それじゃ、オレにできる事があるなら・・・」

クリスタル「しかし・・・」

ラピスラズリ「でも、あなたにお世話になったり、いろいろと・・・」

クリスタル「建設するのにかなりの費用と時間がかかるんだぞ」

ラピスラズリ「でもオレは、あなたの力になりたいんです」

クリスタルはラピスラズリをじっとみつめた。

クリスタル「そうか・・・優しいな君は」

ラピスラズリ「いえ・・・」

クリスタル「そういえば、君の名前まだ、きいてなかったな」

ラピスラズリ「えっと・・・あのっ・・・ラピスラズリです」

クリスタル「そうか、綺麗な名前だな」

ラピスラズリ「あなたの名前は？」

クリスタル「私はクリスタル、実は少し前に妻から逃げられてな」

ラピスラズリ「そうなんですか・・・」

クリスタル「まあ、これからよろしくな」

ラピスラズリ「あつ、はい、あなたを一番にしてみせます」

それから月日は流れてー

クリスタルタウンの建設が間近にせまったとき。

ラピスラズリは仕事を手伝おうとしたが、クリスタルから大変だからいいと言われた。

そしてクリスタルタウンの建設が完成した時、いくつもの高いビルが建った。

それは、どれもクリスタルの会社だった。

クリスタルはやがて街のトップまで登り、一番になった。

ラピスラズリはクリスタルから大変、感謝されてクリスタルの秘書になった。

お互い成長するラピスラズリとクリスタル。

しかし、ラピスラズリは、次第にクリスタルにある想いを抱きはじめる。

それは・・・

対抗心だった。

1番になっておきらくなクリスタルを利用しようと考えたのだ。

しかしラピスラズリは戸惑った。

なぜなら、まるで息子のようにラピスラズリを可愛がってくれたクリスタルを、裏切る事になるからだ。

しかしクリスタルが有名になるほど、ラピスラズリの一番への欲望はだんだん、つのっていった。

そして税金を払う人が少ない事に不満げなクリスタルにラピスラズリはある計画をはなした。

ラピスラズリ「銀行や金持ちどもから金を盗るんですよ」

クリスタル「さすがにそれはかわいそうだろ・・・」

ラピスラズリ「あなたの力をみせつけるんですよ、税金を払わない奴らに」

クリスタル「それは思ったのだが、税金があまりにも高いのではないか・・・」

ラピスラズリ「そんな事ありません、あいつらは払わないだけです」

クリスタル「たしかなのか、それは」

ラピスラズリ「はい、そうですよ、税金が高い、払うのはどうかと思っなど言っていました」

クリスタル「なんだとっ・・・だれのおかげで、この街に住めると思ってるんだ」

ラピスラズリ「まったくですね、どうします？」

クリスタル「私をバカにする奴らに思い知らせてやる」

それが、今回の計画だった。

ラピスラズリ「あんたも、おぼえてるはずだ」

クリスタル「ぐっ・・・」

ラピスラズリ「ふんっ、よしっ、ハンターたち逃走者たちを攻め立てるぞ！」

はたしてこの危機を乗り越えられるのか・・・

次回 逃走者に迫るハンター―解放の恐怖！？

第5話 ラピスラズリの過去

くー一番への道のりく（後書き）

- ・ 逃走中のDVDは卒業式の後に発売かあ・・・3月16日、遠い・・・

第6話 ハンターの脅威（前書き）

ハンターVS逃走者の戦いをお楽しみに！

第6話 ハンターの脅威

逃走者たちに迫るハンター解放の危機。

次なるラピスラズリの企みとは・・・

ピリリリリリリ

龍義「うおっ！何だ、ミッションか・・・？いや、通達？」

真実「これからエリアに10分間ハンターを解放する」

希羅「その数は50体！おい、うそだろ！？」

阿国「ハンターから逃げきるには、リタイアするか、建物の中に隠れるしかない」

光秀「合計53体のハンターから逃げたまえ・・・ってなんですか、これは」

信長「この魔王にいどむか」

濃姫「あなた、そこに建物があるから隠れましょう」

蘭丸「では私が、後ろから護衛します」

利家「なんだと、ふざけんじゃねえよ！」

通達 10分間ハンターから

逃げろ

125分から115分の間に50体のハンターが解放される。

逃走者はその10分間、53体のハンターから逃げなければならぬ。

115分になると、もとの3体に戻る。

義弘「ふざけてるな・・・」

ぎんちよ「なんだ、怖いのか・・・？」

慶次「隠れないとやばいかもねえ・・・ってあれは」

3人が見つめる先には

慶次「ハンターだ！しかも数多いしよ」

ぎんちよ「たしか10分間、この数らしいな」

義弘「お前らは先に逃げろ」

ぎんちよ「何を言ってる、そんなこと・・・」

義弘「わしができる限り、ハンターをまく、だから早く逃げろ」

慶次「へえっ・・・あんた格好いいねえ・・・」

ぎんちよと慶次は建物の中に逃げ込む。

ハンターたちが義弘に迫る。

義弘「島津の意地、見せてやるわーーーーー!!」

義弘の迫力にハンターたちがひるむ。

だが数名のハンターが義弘に迫る。

義弘「ふん、こわっばが!」

だがハンターたちは義弘に迫る。

義弘「ぐっ……おのれ」

ポンツ 島津義弘 確保

残り90人

げつえい「こつめい様、こわいですね」

しゃかつりょう「ここはあまり、見つかりにくいと思いますけどね」

この夫婦は建物の中の物置のあたりに隠れている。

そうひ「数が多すぎる、隠れたほうがいいかもな」

しんき「我が君、はやく隠れましょう」

この夫婦も建物の中に隠れるようだ。

しかし、そんな彼らの近くにハンターたちが・・・

そうひ「むっ・・・あれは」

しんき「どうしたんですの・・・きゃっ！」

大勢のハンターが2分に向かって走る。

しんき「我が君、はやく逃げないと・・・」

そうひ「先に逃げろ、私がハンターをまく」

ハンターたちを前に、しんきをかばうように前へでる、そうひ。

そこへ、そうひの父・そうそうが合流。

そうひ「父よ、しんきを頼む」

しんき「我が君・・・」

そうそう「お前も立派になったな、建物へ逃げるぞ」

しんきの手をひき、建物の中へ逃げ込む、そうそう。

そうひ「ふんっ」

素早い動きでハンターをよける、そうひ。

そうじん「むっ、あれは、そうひ殿」

偶然通り掛かった、そうじん。

別のハンターが、そうじんに向かって走る。

そうじん「なんて速さだ、ぐわっ！」

そうひ「あれは、そうじん・・・だな」

ハンターと戦いながらも、そうじんの姿を確認した、そうひ。

そうひ「もう6分たったな、ぐうっ！」

前から別のハンター！。

後ろから50体のハンター！。

そうじん「そうひ・・・どっ・・・」

ポンッ そうじん確保 残り89人

もはや圧倒的に逃げるのは、無理な状況。

ポンッ　そうひ確保　残り　88人

ピリリリリリリ

しんき「メールですわ、えっと・・・我が君!？」

そうひが確保されたことにショックを受ける、しんき。

しかし、しんきと、そうそうが隠れる建物にハンターが搜索のため10体はいる。

そうそう「あと1分で、もとの数になるな」

しんき「ですわね、ってきやあ!」

ハンターたちが、そうそうとしんきの前に立つ。

そうそう「逃げろ！」

しんき「きゃっ！」

そうそうに背中をおされた、しんき。

しんきの後ろには、狭い通路があった。

そうそう「何をしてるんだ、逃げろ！」

しんきは、立ちあがり通路へと走った。

叫んだあとにハンターたちが、そうそうを囲んだ。

ポンツ　そうそう確保　残り87人

そして10分が経過した。

50体のハンターは列を作り、エリアからでていった。

逃走開始から45分が経ち、10人が捕まった。

ハンターの恐怖に打ち勝ち、賞金をゲットできる者はだれだ!?

次回　ハンター減少のチャンスゲーム

第6話 ハンターの脅威（後書き）

風邪を引いた・・・インフルエンザではなかったけど。みなさんも
ご注意を！

第7話 ハンターゲーム（前書き）

ハンターゲーム・・・その内容とは!?

第7話 ハンターゲーム

これまでに確保された逃走者は・・・

陸理・しょうきょう・直江兼続・りくそん・陸我・佐々木小次郎・
島津義弘・そうじん・そうひ・そうそうの10人。

ピリリリリリリ

しゅくゆう「ん？なんだい」

もうかく「おっ！通達だぜ、母ちゃん」

建物に隠れてるこの夫婦は、メールを確認してる。

義経「一時、ゲームを中しをして、ハンターの数を減らすチャンスを与える」

ばちょう「残り100分までに逃走者はパーティー会場へ集合せよ」

清盛「できなかった者は、強制しつかくなので、いそぎたまえ」

きよちよ「ここからは遠いだよ」

てんい「何言ってやがる！走るぞ」

しんき「我が君のためにも、頑張らなくては・・・」

一斉に動きだす逃走者たち。

義元「パーティー会場とは、ここかのぉ」

偶然にもパーティー会場の近くに立ってる事に気づいた義元。

義元「けまりでもするか」

けまりをはじめた義元。

義元「けまりは楽しいの、のっ、あれは・・・」

遠くにハンターを見つけた義元。

義元「捕まってしまうの！」

パーティー会場へ逃げ込む、義元。

しかしハンターは気づいてはいないようだ。

義元がさっき見つけたハンターは、別の逃走者のもとへ走った。

その逃走者は・・・

星地「うわっ！」

ハンターに気づき、逃げる星地。

建物の角を利用してうまくハンターをまいた。

星地はエメラルドタワーの影に隠れるが、別のハンターに見つかり、再び逃げる。

流海「えっ・・・あれは」

ハンターに追われる星地をみつけた流海。

星地「もう、かんべんしてよ」

走る速度が遅くなり、ハンターが星地に触れようとする。

星地「あれっ、流海だ」

フラフラになりながら地面に、たおれかかる。

流海「おいっ！星地」

ポンッ 星地確保 残り86人

ハンターは星地を支え地面に、ゆっくりとねかせた。

流海「けっこうハンター、やさしいんだな」

ハンターはすぐさま別の逃走者を搜索する。

流海「オレ、星地を見てたのに・・・」

そつつばやくと、星地のもとへ駆け寄る。

星地「御免っ・・・流海」

起き上がると流海に抱き着く。

星地「情けないよね・・・うつく、だって・・・」

流海「オレだって、ハンターの気をそらすことをできたかもしれないねえのに・・・」

星地「そんな事したら流海が捕まっちゃうよ・・・」

星地は泣いた。

流海は星地を強く抱いた。

人々がざわつく。

星地「うぐっ！？ちよつと流海い」

しばらくの沈黙。

だがすこし、星地は照れている。

流海「オレさ、星地のぶんまで頑張る、ハンターに勝って賞金ゲットする」

星地「あっうん・・・応援することしかできないけど」

照れ臭そうに笑う星地。

しかしまだ涙がこぼれている。

流海「お前さ、男なのがもったいねえな」

肩にかかっている星地の髪をそつとさわる流海。

星地「もう！流海のバカ」

そう言った星地だが、流海の袖を握っている。

流海「おもしれえな、星地じゃ、オレ頑張るから」

優しい微笑む流海に、星地はこたえる。

星地「うん、頑張つてね」

返事をしたあと星地は牢獄へとむかった。

一方、ラピスラズリは部下を集めて何やら話し合いをしていた。

クリスタル「もう一度考え直してくれ、なあっ？」

なだめてもただ、沈黙が続くだけだった。

逃走者はみな、パーティー会場へと集まった。

中へ入るとスクリーンには文字が写っていた。

ハンターゲーム

そしてスピーカーから声がきこえた。

「これよりハンターゲームを始める。エリアにいるハンターは3体。君たちが活躍すれば最低1体に減らすことができる」

そんなさく「よっしゃあ！頑張ろうぜ、親父」

そんなけん（父）「うむっ」

「ルールを説明する。君たちの前には86枚のカードがある。そこから代表者10人が順番に選びそこに書かれている文字がハンターの数をきめることになる」

希羅「代表者ってどうやってきめるんだ？」

「君たちできめたまえよ」

龍義「なんだよそれは！」

何だかんだで代表者と順番を話し合った。

そんなさく「頑張るぜっ！」

ガードを慎重に選ぶ。

そんなしょうこう「兄様！一番なんだから、カッコイイとこ見せてよ

ね
」

そんけん「兄上、ハンター数を減らしてくださいね」

そんけん（父）「さく、期待してるからな」

そんさく「だあー！うるせえな、集中させてくれよ」

だいきょう「ゆっくりでいいんですよ、そんさく様」

数分後・・・

そんさく「よし、これだ」

選んだカードの裏に書かれていたのは・・・

「ハンター1体増加」

しゅうゆ「何をしているのだ!」

そんけん（父）「増やしてどうするんだ」

だいきょう「そんさく様・・・」

ブーイングの嵐だ。

そんさく「うるせーほら次のやつ!」

ガラシャ「うーむ、迷うのお」

光秀「慎重に選ぶですよ」

忠勝「娘想いですなあ」

ガラシャ「よし、これなのじゃ」

ガラシャが選んだカードの裏には・・・

「ハンター1体増加」

孫市「うおいー！」

ガラシャ「申し訳ないのじゃ・・・」

つぎは稲姫

稲姫「ハンターを減らしますよ」

数多いカードを見つめる稲姫。

稲姫「えっとこれにします」

カードの裏には・・・

「ハンター2体増加」

忠勝「稲よ・・・」

稲姫「すみません父上！」

次は義元・・・

「ハンター1体減少」

そして次は希羅

「ヘリ1機増加」

全員「このやろっ！」

次は龍義「ハンター1体増加」

希羅「てんめえー！」

龍義「うるせえっ！ヘリ増やしたくせに」

明理「もう、何さわいでんのよ」

次は孫悟空「ハンター1体減少」

太公望「なかなか減らぬな」

次は秀吉「エリア拡大」

ねね「さすがだね、お前さま」

次はりゅうび「エリア拡大」

かんう「おみごとですな」

次は流海「エリア拡大」

ちょうっん「おっ、すごいなあ」

「ハンターゲームの結果を発表する。ヘリ1機、エリア3倍拡大、ハンター6体だ」

お市「ハンター増えましたね」

長政「だがエリアが拡大して逃げやすくなっただな」

ちょうかく「我の力、ハンターに思い知らせてやるわ」

逃走者は少しの間、休むことにした。

そのころラピススズリは・・・

ラピスラズリ「まさか、逃げるところを拡大するとはな・・・」

クリスタル「考えたよなあ」

ラピスラズリ「おいっ！」

部下に何かを話すラピスラズリ。

部屋をでていく部下。

するとしばらくして、部下がもどってきた。

部下の手には沢山の紙がやまづみにされていた。

ラピスラズリはその1枚をクリスタルにみせる。

その紙には・・・

86人の逃走者の顔写真と、名前が載っていた。

クリスタル「なんだ、これはっ・・・」

ラピスラズリは窓をみた。

部下が住民たちに紙をくばっていた。

クリスタル「ラピスラズリがこのようなやつに・・・そう育ったのはわたしのせいだ」

ラピスラズリ「逃走者よ、このオレに勝てるかなあ」

不気味なラピスラズリの笑いがひびいた。

次回 逃走者VSハンターとラピスラズリのいんぼう

第7話 ハンターゲーム（後書き）

感想書いてください！

第8話 ミッションそして陰謀（前書き）

龍義「のこり115分からはじまるんだろ」

希羅「陸理と陸我のぶんまでがんばんねえとな」

明理「ところで受験勉強さちゃんとやってんの？」

陸理「ねえ！」

ゆーすけ「小説をお楽しみくださいーい」

陸我「あつ、話そらしたよ」

第8話 ミッションそして陰謀

ハンターの恐怖と戦いながらにげる逃走者たち。

そしてその裏で渦巻く陰謀。

そんなさく「よっしゃあ！賞金ゲットするぜ」

しゅーゆ「はりきってるな、そんなさく」

だいきょう「ハンターに負けたくないですもんね」

りゅうび「負けられぬな！」

ぎえん「我・・・逃ゲルツ・・・」

ちょうつん「くれぐれも殿ハンターにはご用じんを！」

かこうえん「殿のぶんまで頑張んねえと！とん兄」

かこうとん「まあ、捕まるわけにはいかんな」

きよちよ「ハンター速えから、かくれるだよ」

逃走者は横一例に並んだ。

龍義「あれっ、ハンターは」

秀吉「おい、あれ何じゃ？」

店の窓ガラスにハンターボックスが写っていた。

希羅「店の中にハンターが」

店との距離は17メートル。

するとハンターボックスからけむりがでて、ハンターが解放された。

ハンターはガラスの前に立ちなんとガラスを突きやぶり、地面に着地した。

慌てる逃走者たち。

ハンターは逃走者たちに向かい、走る。

龍義「おい、まじかよ！」

一斉に走りだす逃走者たち。

もうかく「おい、うそだろ」

逃げるのが、少しおそかった逃走者もいた。

しゅくゆう「あんた、何やってるんだい！」

先に逃げていた妻・しゅくゆうがさげんだ。

ポンツ　もつかく確保残り　85人

もつかくが捕まった情報を知り、しゅくゆうが呆れる。

ちようかく「なんと・・・」

ポンツ　ちようかく確保　残り84人

そんしょうこう「やばい、どっかに隠れようっ」

しかしハンターに見つかってしまった。

そんなしょうごう「ちょっと何よ・・・」

走るそんなしょうごう。

それを追うハンター。

エリアをにげる逃走者たち。

ハンターは増えてしまったが、エリアが広くなり逃げやすくなった。

稲姫「あれは、しょうごう！しかもハンターに追われてるわ・・・」

そんなしょうごうを見つけた稲姫。

足の速さは、そんなしょうこつも負けてない。

そんなさく「うおっ！しょうこつじゃねえか」

そんなしょうこつ「兄様！逃げて」

そんなけん「しかもハンターに追われてるではないか」

そんなしょうこつ「兄様、けん兄様、わたしがハンターまくから！」

そんなしょうこつは建物の中に逃げ込む。

だがハンターはそんなしょうこつを追う。

そんなさく「しょうこつの奴むちゃしやがって・・・」

そんけん「ですが兄上、ここから逃げた方が」

そんさく「ちくしょう！ハンターの野郎・・・オレらそんな家の大切な妹を捕まえるなんてさせるかよ！」

そんさくはそんしょうこうが逃げ込んだ建物へと走る。

そんさく「えっ！何言ってるんですか」

いそいでそんさくを追いかける、そんけん。

アクアマリン事務所 付近

ちようせん「どこかに隠れた方が・・・」

りよふの妻・ちようせんが提案した。

りよふ「何を言ってるんだ、ちようせん・・・オレはリタイアする」

とうたく「なんじゃと！」

りよふの義理の父でもあるとうたくが叫んだ。

近くにあった電話ボックスにりよふは向かった。

ちようせん「そうですか」

ちようせんが歩いてりよふのもとに駆け寄った。

ピリリリリリ

えんしょう「むっ、ミッションか」

義経「君たち逃走者の載ったはり紙が住民たちに配られた」

忠勝「この紙は逃走者リストといって住民たちにみつかりと騒がれる位置をハンターに知られる」

ぎんちよ「エメラルドタワーにあるクリスタルマークがかかれてある札を手に入れたら騒がれずにすむ」

たいしじ「エメラルドタワーへ向かはねばな」

政宗「また面倒なことを！」

MISSION クリスタルマーク

をてにいれる

逃走者リストに載っている84名は住民にみつかり、大声で騒がれてしまう。

そのうえハンターに聞こえ位置までもが知られる。

エメラルドタワーの前に置いてあるクリスタルマークを肩にはれば騒がれずにすむ。

希羅「まずはクリスタルマークをさがさねえとな」

手で顔を隠しながら逃走者はエメラルドタワーへと向かう。

龍義「ちくしょう・・・騒がれるのは困るな」

少しだけ手を下ろした時だった。

住民「きゃーッ！不審者よ」

顔を見られ住民たちが騒いだ。

龍義「はあっ!？」

希羅「やべえ、いったん逃げろぞ」

龍義と希羅は、ふれあいひろばへ逃げ込む。

龍義「ハンターだ・・・」

隠れる少し前に住民の声をきいたハンターがふれあいひろばの近くまで走っていたのだった。

逃走者は全員ミッションをクリアーできるのか・・・

次回 次々と捕まる逃走者たちに更なるラピスラズリのたくらみが明らかに

第8話 ミッションそして陰謀（後書き）

次からは三国志のキャラクターをできるだけ漢字になおします。

詳しくはまたつぎの小説にて・・・

第9話 逃走者と企み

くクリスタルマークく（前書き）

三國無双のキャラを漢字になおしますので！

趙雲 ちようじん
諸葛亮月英 しょかつりよげつえい
姜維 きようい
劉備 りゅうび
関羽 かんう
張飛 ちようひ
星彩 せいさい
関平 かんぺい
魏延 ぎえん
黄忠 こうちゅう
馬超 ばちよう
ほう統 ほうちう
夏候惇 かこうとん
典韋 てんい
夏候淵 かこうえん
許猪 きちよ
張遼 ちようりょう
司馬懿 しはい
徐晃 じようかう
甄姫 しんき

ほう徳ほうとく
周瑜しゅうゆ
太忠慈たいしじ
孫尚香そんしょう孫堅父そんけん
孫策そんさく
呂蒙りよもう
甘寧かんねい
孫権そんけん
黄蓋こうがい
大喬だいきょう
周泰しゅうたい
凌統りょうとう
小喬しょうきょう
張ちやうこうつ（ちやうこつ）
陸遜りくそん
曹仁そうじん
曹丕そうひ
曹操そうそう
貂蟬ちようせん
呂布りよふ
董卓とうたく
袁紹えんしょう
張角ちやうかく
孟獲もうかく
祝融しゅくゆう
左慈さじ

以上です。ながくなりましたけど！

あと小説な更新遅くなりました。すいません！

第9話 逃走者と企み

くクリスタルマークく

クリスタルマークを手に入れるためにエメラルドタワーへと向かう
逃走者たち。

ガラシャ「まずはエメラルドタワーへ向かうのじゃ」

くのいち「ハンターとへりに気をつけないとね」

お市「住民にもですね」

建物の影に隠れながら移動するガラシャたち。

しかし近くにハンター・・・

ハンターがガラシャたちに向かって走る。

くのいち「迷ったなあってハンター!？」

お市「ここはわかれてハンターをまきましよう!」

お市は真っすぐ走った。

ガラシャは右へ行く。

くのいちは建物の中へ逃げ込んだ。

ハンターが視界にとらえたのは・・・

お市「はっ・・・」

長政の妻・お市だ。

お市が逃げる先には・・・

秀吉「うほっ、お市様じゃ」

ねね「もう、お前さま！」

孫市「しかも追われてるなあんたの奥さん、大変だねえ」

長政「市っ・・・」

孫市は長政の肩に手をのせた。

長政「市い！」

長政は武器の持つ側をお市に向けた。

孫市「おい何する気だよ」

長政「市を助けるのだっ！」

ねね「無理はだめだよ！」

長政「つかまるのだ、市」

お市は武器の持つ側をつかむ。

お市「長政様——！」

長政はお市を武器ごと引き寄せる。

お市「長政様、はやく逃げましょう」

長政たちはエメラルドタワーへと向かった。

信長「ほう・・・長政か」

長政の兄・信長とその妻、濃姫と護衛の蘭丸と合流。

お市「お兄様たち・・・」

濃姫「はやく逃げないとつかまるわよ」

お市の姉でもある濃姫。

織田家と長政とお市は身内でありながらも対立などがあつたことから仲が微妙らしい。

蘭丸「とにかく逃げぼうが」

長政たちはエメラルドタワーへと向かった。

しかしハンターも長政たちを追う。

ねね「ほらっ！エメラルドタワーだよ」

すると、ねねは勢いよく走りクリスタルマークを長政たちのぶんま
で手に入れた。

秀吉「ねね！？」

お市「さすが忍びですね」

ねね「ほらお前さま！はいお市様」

ハンターから逃げながらも秀吉・孫市・お市・信長・濃姫・長政・蘭丸にクリスタルマークをわたす。

ねね・秀吉・お市・孫市・信長・濃姫・蘭丸・長政、ミッションクリアー

これでクリアーしていない逃走者は76人。

一方、ラピスラズリたち。

クリスタル「ラピスラズリよ、なぜ秘書になってまで私を利用したのだっ！」

ラピスラズリ「だからさあオレが一番に・・・」

その時ラピスラズリの部下がラピスラズリのもとへ駆け寄る。

ラピスラズリ「どうしたよ」

部下「ラピスラズリ様！奴らクリスタルマークというものをもって
まして・・・」

ラピスラズリ「クリスタルマークだと、何だそれは！」

その時部下が何かを言おうとしたときだった。

クリスタル「ふはははははっ！」

高わらいをしたクリスタル。

ラピスラズリ「なっ・・・」

クリスタルをにらんだラピスラズリ。

クリスタル「クリスタルマークはな、住民たちがもっているこの街に住んでいる証でな、それをはると騒がれないのだよ」

ラピスラズリ「何だと！」

クリスタル「逃走者が全員てにいれたら、少しは逃げやすくなるだろう」

ラピスラズリは舌打ちをした。

クリスタル「ラピスラズリ・・・」

ラピスラズリをクリスタルは悲しげにみつめた。

そして逃走者たちはエメラルドタワーへと向かっていた。

希羅「おっクリスタルマークだ」

龍義「よっしゃあ！」

エメラルドタワーに着いた逃走者たち。

ガラシャ「お市殿は大丈夫かのう・・・」

くのいち「クリスタルマークゲット！」

稲姫「騒がれずにすみませうね」

次々とクリスタルマークをゲットする逃走者たち。

流海「やべえ、あれハンターだよな!？」

その言葉に逃走者はいそいで逃げた。

希羅・龍義・流海・ガラシャ・くのいちミッションクリアー

稲姫「しまった、クリスタルマーク取り損なった」

ハンターが追ってきたためクリスタルマークをてにいれそこなった

稲姫。

稲姫「父上の分までとるつもりだったのに……ってきゃあー！」

ハンターが稲姫に向かって走った。

くのいち「そんな！稲さん」

ポンッ 稲姫確保 残り83人

クリスタルマークを手に入れた逃走者たちはそれぞれ肩にはる。

忠勝「稲よ……」

稲姫の父親・忠勝が呟いた。

家康「忠勝よ、クリスタルマークをてにいれる方が先ぞ」

忠勝「そうですね、むっ」

稲姫を確保したハンターが忠勝たちのもとへ走りだす。

忠勝「殿、逃げてくだされっ！」

家康をおし、ハンターの前にたつ。

忠勝「殿のもとへは行かせん！」

ハンターは忠勝のもとに真っすぐ走る。

家康「すまぬ、忠勝」

忠勝に背を向け走った家康。

家康「忠勝と稲のためにつかまるわけには・・・うぐっ！」

前から別のハンターが家康に向かって走る。

忠勝「殿!？」

駆け寄る前にハンターが家康にふれようとしていた。

ポンッ 徳川家康確保 残り82人

忠勝「ぐっ・・・」

ハンターをよける忠勝。

忠勝「なんて速さだ・・・」

ポンツ　本多忠勝確保

残り81人

忠勝「ハンター何者なのだっ・・・」

この2人が確保されたことは逃走者たちに知らされた。

三成「あの本多忠勝が捕まった・・・？」

左近「戦国最強といわれた忠勝さんが・・・」

慶次「ちくしょう、どんどん捕まってやがるぜ・・・」

逃走者を搜索していたへりがある集団をとらえた。

月英「あれはへりじゃないですか？」

諸葛亮「そうですね、ここから逃げましょう」

姜維「あつ、待ってください！」

へりに気づき、逃げる。

すぐさま地上のハンターに諸葛亮たちの位置を伝える。

月英「きゃあ！ハンターが・・・」

諸葛亮「姜維！月英と共に逃げなさい」

姜維「そんな、ってこっちからもハンター!？」

諸葛亮「せまいですが道があちらにあります、逃げないと捕まりますよ」

戸惑う姜維に諸葛亮が言った。

諸葛亮「あなたは私の立派な弟子です、あなたを信じます!逃げなさい」

姜維「・・・っ、そうですか、月英様っ逃げましょう」

月英「そんな・・・」

姜維は月英と手をつなぎ、逃げた。

諸葛亮はハンターをまこうと走りだした。

軍師といえど足は速い。

一方、姜維と月英。

月英「あれっ、ここは・・・」

姜維と月英はある場所にたどり着いた。

姜維「もしかしてエメラルドタワーじゃないですか」

月英「よしっ！あれがクリスタルマークですね」

趙雲「あつ、月英殿と姜維」

そこへ趙雲が合流。

それから逃走者がクリスタルマークの前に集まった。

姜維・月英・趙雲

ミッションクリアー

太公望「やっと着いたぞ」

伏犠「とりあえずゲットじゃな」

女渦「まっただな」

劉備「これで騒がれずにすむな」

関羽「そうですね」

張飛「逃げやすくなったな」

次々とクリスタルマークをてに入れる逃走者たち。

太公望・伏犠・女渦・劉備・関羽・張飛
ミッシェンクリアー

そのころラピスラズリたち。

部下に何かを話している。

クリスタルはその様子を見ていた。

ラピスラズリ「逃走者全員がクリスタルマークをてにいれたらこいつらを送り込む」

ラピスラズリの後ろに男たちが召喚された。

ラピスラズリ「逃走者たちよ、オレに勝てると思うなよ」

クリスタル「逃走者たちはお前などに負けやしない」

ラピスラズリ「なんだよ強がつてさあ」

ニヤリと笑っラピスラズリ。

クリスタルは寒気を感じた。

次回 クリスタルマークをてにいれる逃走者たち。
たちによってさらに追い込まれる！？

だが謎の男

第9話 逃走者と企み

くクリスタルマークく（後書き）

逃走中の次の放送は3月6日だそうです！

第10話 駆け巡る逃走者たち（前書き）

これから小説にでてくる建物など

アクアマリン事務所・ふれあいひろば・いこいのこうえん・占いの
水晶・まちなかおんせん・スーパートパーズ・ルビーの美術館・ラ
ピスラズリ作戦本部地内・コンビニ・イエローストーン・レッドス
トーンマンション・ブルーストーンアパート

ですっ

更新おそくなりました。

第10話 駆け巡る逃走者たち

逃走者たちはエメラルドタワーへと向かっている。

左近「ここですな、エメラルドタワー」

三成「そうらしいな」

慶次「よう！あんたらもクリスタルマークゲットするんだろ」

慶次が三成と左近のもとへ合流。

3人はクリスタルマークのもとへ駆け寄りそれをてにした。

石田三成・島左近・前田慶次、ミッションクリアー

ここまでミッションをクリアした者は・・・

希羅・龍義・流海・ガラシャ・くのいち・秀吉・孫市・お市・信長・濃姫・蘭丸・長政・姜維・月英・趙雲・太公望・伏犠・女渦・劉備・関羽・張飛・前田慶次・石田三成・島左近の24人。

孫堅「策たちはまだミッションクリアしてないのか!？」

甘寧「殿、ここからエメラルドタワーに行けますぜ!」

凌統「そんな大声でしたらハンターに気づかれるだろ!」

呂蒙「これっ、さわぐな」

周泰「孫権様が・・・」

太史慈「とにかくいそぎましょう！」

6人はエメラルドタワーへと向かった。

そのころ、電話ボックスに向かう呂布たち。

だがリタイアせずにエメラルドタワーへと向かう。

貂蝉「考え直したんですね」

呂布「リタイアはせん、ここから逃げるようなもんだからな」

董卓「なんじゃ・・・むっあれは」

ハンターを見つけた董卓。

呂布「貂蟬、こつちだ！」

貂蟬「きゃっ！」

呂布は貂蟬を抱えて走る。

董卓「っておい！お前ら・・・ぐわあー」

ハンターは董卓に気づき走った。

いそいで逃げる董卓だが逃げた先に別のハンター！。

董卓「なぬう」

ポンツ 董卓確保 残り80人

董卓「うぐ？っ」

ゲーム残り時間80分。

祝融「見つからないねえ」

捕まった孟獲の妻・祝融がふれあいひろばにいた。

星彩「あれっ・・・あなたは・・・」

そこに張飛の娘・星彩が合流。

祝融「おや、星彩はクリスタルマークゲットしたのかい？」

星彩「いいえ、一緒に行きましょう」

祝融「頼もしいねえ」

2人が後ろを向いたときだった。

星彩「ハンター！？」

ハンターが祝融と星彩のもとへ走りだした。

星彩は左へ、祝融は建物へ逃げ込む。

関平「あれは・・・星彩！」

ハンターに追われている星彩を見つけた関平。

関平「ハンター、星彩を捕まえる気か！」

関平はハンターに向かって叫んだ。

関平「ハンター！待てえ！！」

ハンターは関平の声に気づき振り向く。

星彩「関平、何してるのよ！」

ハンターは関平に向かって走る。

関平「星彩は拙者が守る！」

星彩「関平っ……」

戸惑いながらも星彩は建物に逃げ込んだ。

関平「星彩……」

ポンツ 関平確保 残り79人

スーパートパーズ付近。

孫尚香「兄様つたら……あそこで捕まっていたらどうすんのよ!」

孫策「だってオレ達にとってはお前は大切な妹だし」

孫権「まあ、うまくハンターはまいたが」

この3兄妹はエメラルドに向かっていた。

貂蟬「あつ、これは・・・」

呂布「クリスタルマークのようだな」

エメラルドタワーに到着してクリスタルマークの前に集まった呂布

と貂蟬。

そしてクリスタルマークを呂布と貂蟬はゲットした。

呂布・貂蟬 ミッションクリアー

クリスタルマークを手に入れた彼らのもとにハンター・・・

貂蟬「きゃっ！ハンター」

ハンターが呂布たちのもとに走る。

呂布「貂蟬！」

呂布は貂蟬の手を掴む前にハンターが貂蟬にふれた。

ポンッ 貂蟬確保 残り78人

呂布「おのれ……うおおおおっ！」

ハンターに向かって呂布が走る。

さすがにヤバイと思ったのか、ハンターはその場から逃げる。

呂布「ハンターっ！」

呂布はハンターに思いっきりタックルをした。

ハンターはそのまま壁に叩きつけられ地面にたおれた。

呂布「ふんっ」

その時スタッフが呂布のもとに駆け付けた。

スタッフ「り、呂布さん……」

呂布「何だ」

スタッフ「強制失格です」

呂布「・・・・・・・・えっ？」

スタッフが携帯電話で連絡をした。

スタッフ「すいませーん、ハンター1名追加で」

呂布 強制失格 残り77人

牢獄DEトーク

陸理「あゝ、貂蟬さん捕まった」

牢獄の者たち「えー」

星地「ちよつと待つて、えつと・・・ハンターを撃破したため呂布が強制失格！」

兼続「うむっ・・・」

そのころ逃走者たちはエメラルドタワーに続々と駆け付けた。

孫堅・周泰・甘寧・呂蒙・太忠慈・凌統ミッションクリアー

孫策「ふう、やっと着いたぜ」

孫策・孫尚香・孫権ミッションクリアー

そしてうまくハンターをまいた諸葛亮がクリスタルマークのもとへ駆け付けた。

諸葛亮ミッションクリアー

その後、馬超らがエメラルドタワーへと駆け付けた。

馬超・魏延・ほう統・星彩・黄忠ミッションクリアー

星彩「関平の分まで頑張らないと・・・」

ほう統「星彩はいい人のために張りきってるようだねえ」

馬超「しっかりしてるんだな」

また別の逃走者が駆け付けた。

謙信「宿敵、くれぐれも捕まらないようにな」

信玄「ふっ、わかつとるわい」

光秀「やっと着きましたか」

上杉謙信・武田信玄・明智光秀ミッションクリアー

そのころミッションをクリアーしていない者たち。

住民「キヤーッ！」

政宗「うわっ、大声で何じゃ、馬鹿め！」

司馬懿「馬鹿め！貴様こそ大声ではないか」

張遼「お二人とも、うるさいですぞ！」

徐晃「これでは騒がしくてみつかるかもしれないでござるな」

張こう「馬鹿という言葉より美しい表現を・・・」

その時ハンターが視界に、政宗たちをとらえた。

張こう「むっ・・・あれはハンターでは？」

司馬懿「くっ・・・仕方ない、逃げるぞ！」

政宗「たしかこっちに行けばエメラルドタワーに着くはずじゃあっ
！」

そう言うと政宗が指した方向へと司馬懿たちが逃げる。

動きが素早かったので運よくハンターをまいた。

しばらく走っているとエメラルドタワーに着いた。

そしてクリスタルマークをゲットする。

伊達政宗・司馬懿・張遼・徐晃・張こうミッションクリアー

これでミッションクリアーしていない者は・・・

明理・真美・風魔小太郎・源義経・平清盛・真田幸村・宮本武蔵・
石川五右衛門・阿国・前田利家・柴田勝家・今川義元・立花ぎん千
代・服部半蔵・夏侯惇・夏侯淵・典韋・許猪・甄姬・周瑜・孫悟空・
大喬・袁紹・祝融・左慈・卑弥呼・黄蓋・ほう徳の28人。

スーパートパース付近。

武蔵「おっ！幸村」

幸村「これは武蔵殿・・・エメラルドタワーへ向かわれるのですか

？」

武蔵「ああ、だけど距離がなあ・・・」

地図を見ながら武蔵が言った。

武蔵「とりあえず、行くか」

幸村と武蔵はエメラルドタワーへと走った。

阿国「あら、幸村はんと武蔵はん！エメラルドタワーへ行くどすか？」

そこに阿国が合流。

阿国「よかつたら後ろから護衛しまひよか？」

武蔵「おう、頼りになるぜ」

幸村「迷惑かけます」

阿国「ほな、行きますえ」

この3人はエメラルドタワーへと向かった。

孫悟空「あゝ、かつたりいぜえ」

今まで建物の中に隠れ続けていた孫悟空。

孫悟空「スタッフに雲、つかっちゃいけねって言われてるしよ」

普段のあるきが雲に乗っているため使用は禁じられている。

孫悟空「エメラルドタワーに・・・えっ・・・」

気づいたら孫悟空の前に、ハンターがいた。

孫悟空「うあっ!」

いそいで逃げようとするがハンターが孫悟空にふれた。

ポンツ 孫悟空確保 残り 76人

孫悟空「清盛のおっさん、捕まっちゃった」

しょんぼりとする孫悟空だった。

そのころ武蔵たちはハンターの背後をつき、エメラルドタワーへと

到着した。

武蔵「おっ、あつたぜ！」

宮本武蔵・真田幸村・阿国ミッションクリアー

周瑜「なんとか着いたな」

そこへ周瑜たちが到着した。

周瑜・黄蓋・大喬ミッションクリアー

これでミッションクリアーしていない者は

明理・真美・風魔小太郎・源義経・平清盛・石川五衛門・前田利家・
柴田勝家・今川義元・立花ざん千代・服部半蔵・夏候惇・夏候淵・
典葦・許猪・甄姫・袁紹・祝融・左慈・卑弥呼・ほう徳の21人。

はたして全員ミッションクリアなるか

次回 クリスタルマークを
ちVS謎の男たち

てにいった逃走者た

第10話 駆け巡る逃走者たち（後書き）

「俺たちのラブストーリー」の小説を削除しました。

周りの友人の影響で興味がわいてきて、迷ったのですが書きました。BLで裏だったので、なんだかこの小説を書くたびにはずかしくなり個人的趣味として書いてましたが、このような場では同性愛のよなものは控えるようにします。

気分をわるくした方申し訳ありませんでした。

逃走中とキングオブチェアーの小説をお楽しみください。

コラボしてほしい番組があったら感想のところに書いてください。

第11話 英雄たちの戦い（前書き）

更新がんばります！

第11話 英雄たちの戦い

ルビーの美術館付近地。

典韋「ちくしょう！速く走れねえのか」

許猪「少しだけ休みたいだよお」

甄姫「ここでつかまると、我が君に申し訳ありませんわ」

この逃走者らはエメラルドタワーへ向かっている。

夏候淵「よう！お前らも、エメラルドタワーに行くんだろ」

そこへ夏候惇と夏候淵が合流。

卑弥呼「あれっ、何してるん？」

さらに卑弥呼も合流。

許猪「エメラルドタワーへ行くだよ」

典葦「お前も行くんだろ？」

卑弥呼「そやで今まで建物にな、ずっと隠れてたから寂しかったんだよ」

合流した仲間と共にエメラルドタワーへ向かう。

夏候惇「おい！あれは・・・」

その時、夏候惇が前を指した。

甄姫「ハンターですわね」

6人が一斉に建物の影に隠れた。

卑弥呼「こわいわぁ」

典葦「しっ！少しだまってる」

ハンターは典葦たちに気づかずそのまま素通りした。

典葦「ふう・・・あぶなかったぜ」

しかし、上空のへりが典葦たちをとらえた。

許猪「おい！あれへりだよオイラたち見つかったかもしんねえだ」

夏侯淵「うわっ！マジかよここから逃げようぜ」

だが近くにいた3体のハンターが走ってきた。

甄姫「きゃあー！」

典葦「うそだろ！近くにいたなんて」

卑弥呼「ここでつかまんのいやー」

許猪「ハンター速やすぎだぞ」

夏侯惇「ぐっ！なんて奴らだ」

夏侯淵「やべえ！なんだよあの速さはっ」

ハンターがまず視界に捉えたのは・・・

卑弥呼「いやあー」

ワーワーと叫ぶ卑弥呼だ。

ポンツ 卑弥呼確保 残り 75人

卑弥呼「あゝん・・・悔しいわあ」

次に視界に捉えたのは・・・

許猪「ふう・・・はあっ・・・」

一生けんめい大きな体でにげまわる許猪だ。

許猪「うぐっ、こうなったら・・・」

そう言いつと膝を抱えてボールのように坂を転がった。

典葦「すげえぜ！許猪っ、あんな逃げ方すんなんてよ」

しかしハンターが猛スピードで許猪に向かって走った。

許猪「なんだあ！あいつ、オイラを追いかけてるだよお」

しかし許猪はものすごい速さで転がっているのに対してハンターはそれに追い付くように走ってくる。

典葦「うわぁ！許猪・・・」

ハンターは素早い動きで、典葦の前にまわり込む。

ポンッ 典葦確保 残り74人

典葦「殿・・・すまねえ！くそっ」

拳で地面をなぐった。

甄姫「もうっ！しつこいですわね」

ハンターに追われてる甄姫が言った。

建物の角をまがった時に別のハンターと鉢合わせ。

甄姫「いやっ!？」

ポンッ 甄姫確保 残り73人

そして許猪を追っていたハンターが追い付いた。

許猪「うわぁ！」

そして許猪の前にでて肩をしっかりとつかんだ。

ポンッ 許猪確保 残り72人

許猪「あいつすげえだ！足は速えーし、力も強えーし曹操様に相談して仲間にいれてみたいだぁ」

ハンターを見ながら許猪は言った。

許猪「でも何かちょっと怖そうだ・・・」

そのころ夏候惇と夏候淵はエメラルドタワーに向かって走っていた。

夏候淵「ちくしょう・・・あいつら捕まっ たみてえだな」

夏候惇「むっ、淵！あれはエメラルドタワーではないか」

夏候惇が前を指した。

夏候淵「よっしゃあ！これでミッションクリアー……ってうおっ
！」

夏候惇たちの前からハンターが走ってきた。

いそいで逃げるが後ろから別のハンター。

夏候惇「淵！こいつらは、オレがまくから逃げろ」

そう言つと夏候惇はハンターに向かって走った。

夏候淵「惇兄・・・！かつこよすぎんだよ」

戸惑いながらも夏候淵はいったん、建物の中に逃げ込んだ。

夏候惇「ハンター！」

ハンターは2人掛かりで夏候惇を確保しようとする。

夏候惇「まず淵の逃げ込んだ建物より遠く逃げねばな」

ハンターを誘導するため、夏候惇は走りだした。

夏候淵「悪いな、惇兄……」

しばらくして夏候淵は建物からでてきた。

義経「おお！お前は三国の者だろう」

そこへ義経が合流。

夏候淵「そうだが……あんたは戦国の者だろう、クリスタルマー

ク持って逃げようぜ」

義経と夏候淵はクリスタルマークをそれぞれゲットした。

源義経・夏候淵 ミッションクリアー

これでミッションクリアーしていない者は・・・

明理・真美・風魔小太郎・平清盛・石川五右衛門・前田利家・柴田
勝家・今川義元・立花ぎん千代・服部半蔵・夏候惇・袁紹・祝融・
左慈・ほう徳。

そして運よくハンターをかいくぐり、エメラルドタワーへ逃走者たちに着いた。

義元「のっ、ここまでくるのに大変だったの」

袁紹「全くこの名族のわたしが、あのハンターというやつらに追われることになるとは・・・」

祝融「何言ってんだい！ほら逃げるよ」

左慈「これで少し余裕がでてきたな」

小太郎「さて、これからどうするかだな」

ぎん千代「クリスタルマークはてに入れたから、まずは逃げるか」

今川義元・袁紹・祝融・左慈・風魔小太郎・立花ぎん千代 ミッシ
ョンクリアー

利家「おーい、何やってんだよ」

勝家「もう少しゆっくり歩かんか」

利家のおじ・勝家が言った

慶次「おっ、おふたりさんこっから真っすぐ行ったらエメラルドタ
ワーだぜ！」

通り掛かった慶次が言った。

利家「おっ！慶次」

同じ姓で慶次のおじである利家は慶次と会話を交わした。

利家「叔父貴！いそぐぜ」

勝家「待たぬか、利家！」

慶次「捕まんねえようにな」

そしてその後、利家たちより先に明理と真美がエメラルドタワーへ
たどり着いた

明理・真美 ミッションクリアー

真美「やっぱり私たちの会話少くない？」

明理「あとで作者に文句言いましょう」

真美と明理がエメラルドタワーをあとにした後から利家たちが着い

た。

前田利家・柴田勝家 ミッションクリアー

夏侯惇「ふうっ・・・しつこいやつだったな」

ハンターに追われ、うまくまきエメラルドタワーへと着いた。

夏侯惇 ミッションクリア

一方、

スーパートパーズ付近。

ほう徳「うむっ、エメラルドタワーへは遠いな」

そこへ、ほう徳の親友・馬超が合流。

馬超「おうつ、ほう徳殿！エメラルドタワーへ行くのだろう」

ほう徳「そうなのだが距離がなあ」

馬超「ならばオレが護衛しよう！」

ほう徳「しかし、ハンターが・・・」

馬超「なんの、そのときはオレがまくから！さあ、行こう」

ほう徳「そうか、馬超殿」

そして2人はエメラルドタワーへと向かった。

住民「いやぁー！」

五右衛門「なんでえ！でけえ声だしやがって」

清盛「騒がれては、ハンターに見つかるな」

住民の前を堂々と歩く。

しかし住民の声を聞いて、ハンターが2人のもとへ走る。

清盛「むっ・・・あれは」

五右衛門「げえっ！ハンターじゃねえか」

清盛と五右衛門は同じ方向へ逃げる。

ハンターは逃げる五右衛門たちを追った。

住民たちはハンターを見てさわいでいた。

半蔵「あれは・・・」

家康に仕える忍者・半蔵が清盛と五右衛門を見た。

半蔵は引き返して、別の道を行きエメラルドタワーへ向かった。

そしてハンターは視界にある逃走者をとらえた。

五右衛門「うへえ〜！」

ポンッ 石川五右衛門確保 残り71人

そして運よくハンターから逃げた清盛はエメラルドタワーへと着いた。

平清盛 ミッションクリアー

馬超「はあっ・・・なんとか着いたな」

ほう徳と馬超がエメラルドタワーへと着いた。

半蔵「これか・・・」

そこに半蔵がクリスタルマークの前にいた。

ほう徳「ちと・・・これで騒がれぬな」

服部半蔵・ほう徳

ミッションクリアー

これですべての逃走者が、クリスタルマークをてにいった。

ラピスラズリ作戦本部地内

部下「ラピスラズリ様、逃走者たちはクリスタルマーク手に入れま

した」

ラピスラズリ「よしお前ら行ってこい」

男ら「はっ！」

男たちは部屋をでていった

クリスタル「あいつらは、何者なんだ！ラピスラズリ」

ラピスラズリ「何って・・・通信部隊だよ」

クリスタル「そっ・・・それは何だ！」

ラピスラズリをにらむ、クリスタル。

ラピスラズリ「逃走者を見つけるとその場所をハンターに教えるんだよ」

クリスタル「くっ……そんな卑怯な」

ラピスラズリ「へっ、何言ってたんだ！計画で金や宝石が手に入るんだぜ」

クリスタル「だから計画はしないと云ったはずだ！」

ラピスラズリ「お前がたてた計画なのにかあっ？」

クリスタル「ぐうつ・・・」

怯むクリスタル。

ニヤリと笑うラピスラズリとエリアに送り込まれた通信部隊といわれる男たち。

逃走者たちはどう動くのか

次回 通信部隊により次々

とつかまる逃走者たち

第11話 英雄たちの戦い（後書き）

4月10日の逃走中の放送気になりますっ！

第12話 通報部隊VS逃走者 たち（前書き）

逃走中の放送を見て通報部隊登場させちゃいました！

第12話 通報部隊VS逃走者 たち

ピリリリリリリ

メールだ。

三成「何だ・・・通達？」

左近「クリスタルタウンの建設者・クリスタルの秘書ラピスラズリ

によって通報部隊がエリアに放たれた」

秀吉「彼らは逃走者を見つけると、その場所をハンターに報告する」

ねね「気をつけたまえ……って何だい？これ」

月英「こうなったら、ミッションがでるまで隠れましょう」

姜維「ですね……ハンターに見つかったら大変ですからね」

諸葛亮「なるほど、様子を見るといふ事ですね」

通達 通報部隊に注意せよ

65分から45分までの20分間通報部隊がエリアに放たれる。

彼らは逃走者を見つけるとハンターにその場所を報告する。

そしてその通報部隊は・・・

ローリースケートを履いてエリアを駆けまわる。

その名はORC通報部隊。

お市「長政様・・・大丈夫でしょうか・・・」

しかし通報部隊がお市の姿をとらえた。

そしてハンターにきこえるように笛を吹いた。

お市「きゃっ！何・・・」

笛の音に驚き、いそいでその場から逃げるお市。

しかし男たちも笛を吹きながら、お市を追う。

そしてハンターも笛の音がする方向へむかった。

お市「もうつ・・・見つかるなんて」

ハンター3体が笛の鳴った方向へ走る。

お市「きゃっ!?!」

ハンターに見つかったお市

お市「こんな所で捕まるわけには・・・」

しかしハンターたちは前と後ろと横からお市を囲んだ

お市「いやあ!」

ポンッ お市確保 残り70人

部隊は逃走者を搜索するためエリアを移動した。

ピリリリリリリー

長政「何だ・・・確保情報だと？えっと・・・市が!？」

孫市「しかも通報されて捕まったみてえだな」

ねね「うーん、お前さま大丈夫かなあ」

建物の影に隠れている3人

そこへ通報部隊の1人が長政たちを見つけた。

エリアじゅうに笛の音がひびく。

ねね「わっ！やばい、逃げるよ」

ねねが走りだし、その後続く長政と孫市。

しかしハンターが笛の音を聞きその方向へ走る。

孫市「うわっ、やべえ！引き返すんだ！！」

長政たちが逃げる方向からハンターが走ってきた。

いそいで別の道へ逃げる長政たち。

ねね「ちよっ！こっちからもきたよ！」

後ろから別のハンター。

孫市「ふざけんじゃねえ！つかまってたまるかよ」

そう言つと孫市は細い道へと逃げ込む。

ねね「ちよっ！孫ちゃ・・・きゃあ！」

孫市を呼びかける、ねねのもとにハンターが走ってきた。

ポンッ ねね確保 残り69人

長政「うぐっ！そんな・・・うわぁー！」

孫市が逃げ込んだ道へ走ろうとした長政にハンターが触れた。

ポンッ

浅井長政確保

残り68人

これまでに確保された逃走者は・・・

陸理・小喬・直江兼続・陸遜・陸我・佐々木小次郎・島津義弘・曹
仁・曹丕・曹操・星地・孟獲・張角・稻姫・徳川家康・本多忠勝・
董卓・関平・貂蝉・孫悟空・卑弥呼・典韋・甄姫・許猪・石川五右
衛門・お市・ねね・長政の28人。

そして強制失格の呂布。

合計29人がゲームから失格となった。

孫市「ふう・・・危なかったぜ、あいつらは捕まったしな・・・」

ねねと長政が確保された事を知らせるメールを見ながら孫市が言った。

ガラシャ「むっ！？孫！何してるのじゃ？」

光秀の娘・ガラシャが孫市のもとへきた。

孫市「お嬢ちゃん！どうしたんだい？」

ガラシャ「孫こそ、どうしたのじゃ？」

孫市「あの通報するやつらに見つかってここまで逃げてきたんだよ」

ガラシャ「通報・・・？　そういえば・・・あのわからんものを履いた者たちによって、ねね殿と長政殿が捕まったってメールが・・・」

孫市「そうだぜ！　オレさ、おねねさんと長政と一緒にいたから」

ガラシャ「ということは・・・孫！　ねね殿と長政殿を置いて逃げたという訳か！」

孫市「ちげえーよ！たまたま道があつたから、そこに逃げて・・・」

ガラシャ「変わりないのじゃ！そこまで金がほしいのか？孫は」

孫市「だから！オレは1人でも多く逃げれるように・・・そりゃ捕まるやつはいるだろう」

ガラシャ「いい訳なのじゃ！もうっ！孫なんか・・・ふんっ！」

孫市のもとから走るガラシャ。

ガラシャ「わらわは逃げても仲間を見捨てたりしないのじゃ！」

そう言って建物のなかへ入った。

孫市「何だよ・・・別に見捨てた訳じゃねえし！」

ぶつぶつと言う孫市だが部隊に見つかった。

辺りにひびく笛の音。

孫市「ちくしょ・・・こんな時に」

走りだし、ふれあいひろばにでた孫市。

孫市「うわっ、やべっ！」

笛の音を聞いたハンターが孫市のもとへ走る。

孫市「けっ！つかまるかよ」

そう言つて後ろを振り返り孫市は走る。

しかし逃げる方向には・・・

秀吉「むっ……あれは孫市……ってハンターつれてきとるー！
？」

三成「逃げましょう！」

左近「ここで捕まる訳にはいきませんからねえ」

秀吉・三成・左近がいた。

しかし足が速い孫市は3人を追い越した。

秀吉「ひょえ〜！」

孫市を追っていたハンターが秀吉をとらえた。

ポンッ 豊臣秀吉確保 残り67人

左近「くそっ・・・殿とはぐれちゃった」

ハンターが追ってきたため三成とはぐれた左近。

左近「あの変な通報するやつが、やつかいだな」

エメラルドタワーの影に隠れる左近。

しかしそこに・・・

ハンター・・・

左近「残り55分か・・・ここまで逃げたんだ、つかまる訳・・・
うわっ！」

背後からハンターが走ってくることに気づき、逃げる左近。

いそいでエメラルドタワーへと逃げ込む。

しかしエメラルドタワー内を搜索していたハンターと鉢合わせ。

左近「うおっ!?!」

ポ
ン
ッ

島左近確保

残り

6
6
人

左近「殿……すいません」

そのころ孫市と共にアクアマリン事務所付近まで逃げてきた三成。

三成「どうするんですか？あなたがハンターを引きつれてきたから
秀吉様と左近が捕まってしまうましたよ」

左近が確保されたメールを見ながら三成が言った。

孫市「オレのせいだって言うのかよ・・・」

三成「そうとは言ってませんけど？」

冷たく孫市にそう言つと別の場所へ三成は移動した。

孫市「ったく・・・どいつもこいつも」

壁にもたれ掛かって孫市は呟いた。

ガラシャ「そういえば濃殿は信長殿と一緒にだったのでは？」

濃姫「そうだったけど、はぐれちゃったのよ」

蘭丸「合流しなければ・・・」

ハンターを警戒するガラシャたち。

そこへ・・・ハンター・・・

ガラシャ「父上は大丈夫かのっ・・・ってうわぁ！」

ハンターがガラシャたちに向かって走る。

濃姫「ふうん・・・けっこう速いのね」

そう言って濃姫は建物の中に逃げ込んだ。

蘭丸「えっ！？濃姫様！うわぁ」

すばやい濃姫の動きに蘭丸とガラシヤは驚いた。

ポンッ
森蘭丸確保
残り
65人

ガラシャ「いやっ！父上……！」

ポンッ

ガラシャ確保

残り64人

ハンターは再び逃走者を搜索した。

光秀「そんな・・・ガラシャ」

ガラシャが確保されたメールを見て光秀が言った。

幸村「あっ・・・光秀殿」

そこに幸村が合流。

光秀「幸村殿・・・あの・・・通報する部隊見ましたか？」

幸村「ええ・・・何回か」

光秀「そうですか・・・ガラシャ・・・」

幸村「光秀殿！ガラシャ殿のためにここで諦めてはダメです」

光秀「幸村殿・・・そうですね、ガラシャのためにも・・・わっ！」

そのとき部隊がまがり角から現れた。

幸村「光秀殿！逃げないと」

笛の音がひびくエリア。

ハンターが笛の鳴る方へ走る。

光秀「別々に逃げますね！」

幸村「はいっ！」

光秀は左へ、幸村は建物へ逃げる。

光秀「信長様、濃姫様、蘭丸・・・そしてガラシャ、私は・・・ぐっ！」

前からハンターが走ってきた事に気づいた光秀。

光秀「つかまる訳には・・・なっ！」

後ろから別のハンター！。

光秀「うわぁ！」

ポンッ

明智光秀確保

残り63人

光秀を確保したハンターがある逃走者をとらえた。

明理「ちよつとあれ、ハンターじゃない？」

真美「逃げるわよ！つかまったら台なしだわ」

同じ方向へ逃げる明理と真美。

明理「いやっ！」

真美「きゃっ！」

逃げる方向へハンター！。

真美「明理っ！」

真美より引きかえすのが遅かった明理。

ポンッ 明理確保 残り62人

明理「お姉ちゃん……御免なさい……」

真美「うそでしょ！？そんな、いやっ！きゃあああああ！」

明理を確保したハンターと光秀を確保したハンターに挟みうちにされた真美。

ポンッ 真美確保 残り61人

真美「くやしい・・・」

そのころラピスラズリたち

ラピスラズリ「ふはははははは！ざまあねえな逃走者たちよ！」

高わらいするラピスラズリ

クリスタル「このままではいかん・・・そうだ！」

後ろに縛られた手で何かをするクリスタル。

ラズリラズリ「すげえだろ？もう10人捕まってるだぜ」

クリスタル「そっ・・・そうだな」

軽く返事をするクリスタル後ろポケットから携帯電話をだした。

ラピスラズリに気づかないように後ろを見ながらメールを打つクリスタル。

クリスタル「これで・・・」

誰かにメールを送ったクリスタル。

クリスタル「これで少しは・・・逃げやすくなったはずだ・・・」

そう呟くと後ろポケットに携帯電話をなおした。

そのころとある部屋。

——
~~~~~  
——

クリスタルのメールがとどきそれを見るある人物。

はたしてこの人物は・・・

次回 英雄たちの激走！

第12話 通報部隊VS逃走者 たち（後書き）

逃走中のDVD10巻以降の発売いつだろうな

### 第13話 通報部隊と3つのペンダント（前書き）

話がある程度進んだら月村サトシと望月ミレイを登場させたいなあ  
と思いました！ちゃんとOROCHIと関係があるように書くので  
！ダメですかね？うーん・・・

### 第13話 通報部隊と3つのペンダント

ふれあいひろば付近。

劉備「やっかいだ・・・あと何分だ？」

関羽「あと50分・・・あと5分で部隊はエリアからでていきます

ぞ  
」

趙雲「殿……ここなら見つからないと思いますから」

建物の影に隠れる3人。

そこに部隊が近づく。

趙雲「殿．．．壁に背を付けてください、関羽殿も」

そう言われて劉備と関羽は壁に背中をくっつけた。

劉備「どうしたのだ．．．趙雲．．．！」

部隊が側にいるのに気づき声をおさえる劉備。

位置からして部隊からは趙雲たちの姿は見えにくい。

趙雲「劉備殿・・・あの部隊が通りすぎたあと・・・場所を移動しましょう」

関羽「兄者・・・いかがいたす」

劉備「うむっ・・・そうだな・・・はっ！」

趙雲「どうされました、劉備殿？」

劉備「くっ・・・くしゃみが」

関羽「我慢して下さいね」

劉備「ダメだ……はっ……ふっ……はぁっ！くっしょん！！」

そのとき部隊が後ろを振り向いた。

劉備「あっ……」

そしてひびく笛の音。

この3人が全速力で走ったことは言ってもない。

そのころラピスラズリたち

ラピスラズリ「意外にしぶといな・・・このあとはどんなミッシェンだしてやるのか」

ニヤリと笑うラピスラズリ

クリスタル「なぜ・・・お前はそんなになっちゃったのだ」

ラピスラズリ「あん？うるせーよ」

そう言ってクリスタルを蹴りとばした。

クリスタル「うぐっ……はあっ……」

部下「そつえばラピスラズリ様、あの方から指示はないんですか？」

クリスタル「あっ……あの方？」

ラピスラズリ「まあ・・・オレがあんたを利用したのもあの方からの命令なんだよな」

そう言うとラピスラズリはクリスタルを見下した。

ラピスラズリ「オレがこの街の1番になったら・・・あんたは召し使いにしてやるよ」

ゲラゲラと笑うラピスラズリ。

クリスタルはそれをうすれゆく意識のなかできいていた。

希羅「ちくしょう……何だよ、あいつら」

建物の影に隠れる希羅。

希羅「あなどれねえな・・・通報部隊」辺りを警戒する希羅。

龍義「おっ！希羅・・・」

そこに龍義が合流。

希羅「龍義・・・明理と真美もあの部隊のせいで捕まった・・・く  
そっ！」

龍義「耐えるんだ・・・あと3分であの部隊はエリアから・・・う  
わっ！」

前からハンターが走ってきた。

希羅「オレはこっちに逃げる！」

龍義「分かった！オレはこっちだ！」

右に龍義、左に希羅が逃げる。

ハンターが視界にとらえたのは・・・

希羅「くそっ！」そのまま希羅は、ふれあいひろばへとでた。

足は流海と同じくらい速くハンターに追い付かれないように走る。

希羅「うわっ！なんだよ、もう！！」

前から別のハンター。

いそいで横の道へと逃げる

希羅「はぁ・・・ぐっ・・・わっ！まじかよ・・・」

建物の隅に隠れた希羅だが部隊に見つかった。

そして辺りに笛の音がひびく。

希羅「ちっ！なあめんじゃねえー！」

叫びながら希羅は追ってきたハンターに向かって走る

希羅「だありやつ！！」

そしてハンターの間をすりぬける。

希羅「うおっ!？」

しかし転んで地面にたおれてしまった。

そしてハンターが希羅にふれようとする。

希羅「くっ・・・」

捕まると思ったそのときだった。

希羅「うわっ！何だ！？」

腰に付けていたバックから光りが溢れた。

ハンターたちがこの光りに怯む。

希羅「に、逃げるなら今か・・・っ」

そして建物のなかに逃げ込む希羅。

ハンター再び搜索をする。

希羅「何だったんだ・・・あの光は・・・」

そう言ってバックの中を探る希羅。

希羅「これっ・・・!？」

バックの中には黄色にかがやくペンダントが入っていた。

龍義「大丈夫かな・・・希羅・・・」

アクアマリン事務付近に隠れる龍義。

龍義「あと1分・・・そうすれば逃げやすくなる・・・」

じつと身をひそめる龍義だがハンターが前から走ってきた。

龍義「けっ！この距離ならっ・・・」

勢いよく走り、狭い路地に逃げ込む龍義。

そしてハンターをまいた。

龍義「どんなもんだ・・・ってうわあっ！！」

ハンターが2体、龍義に向かって走る。

龍義「こんな事って・・・えっ！？わあっ！」

後ろを向いた瞬間、先ほど龍義を追いかけてきたハンターが走ってきた。

龍義「ちくしょう・・・！」

諦めかけたその時だった。

龍義「うわっ！何っ・・・」

腰に付けていたバックから光が溢れだす。

その強い光にハンターが怯んでいた。

龍義「この隙に・・・」

そしてエメラルドタワーへと走る龍義。

走りながらバックを探る。

龍義「えっ・・・!？」

その中には青色にかがやくペンダントが入っていた。

流海「よしっ！あの部隊はこれで・・・」

残り45分になったため部隊がエリアからでて行った。

流海「星地のためにも・・・つかまる訳にはいかねえ・・・ってあ  
！」

歩いていたら横からハンターがでてきた。

流海「うわっ！ぐっ！あっ！」

ハンターが触れようとするたびにそれをよける流海。

流海「ちくしょ・・・」

走りだし、曲がり角を何度もまがる流海。

流海「はぁっ・・・しっけえ・・・うわっ！」

前から別のハンター。

流海「うそ……だろ……ごっ……めん……星地……オレ……」

そしてその場に膝を付いた

ハンターが流海にふれる寸前だった。

流海「うおっ！何だよ・・・」

腰に付けていたバックから光が溢れだす。

その光にハンターの動きがにぶる。

流海「チャンスだな・・・！」

そして流海はパチンコアメジストの店内に逃げ込んだ

流海は店の中でバックを探っていた。

そしてあるものを見つけた

流海「何に使うんだ？これは・・・」

そして中には赤色にかがやくペンダントが入っていた

この3人の逃走者が持っていたペンダントが重要な鍵となる。

次回

捕まる逃走者たち！

しかし救世主が現す！

第13話 通報部隊と3つのペンダント（後書き）

救世主登場！お楽しみに

## 第14話 アクアマリン登場（前書き）

雲長とは関羽あやなの字です！ちなみに長男が劉備で次男が関羽で三男が張飛です！

第14話 アクアマリン登場

趙雲「くしゃみ、もう大丈夫ですか？劉備殿」

劉備「すまぬ・・・」

関羽「気をつけて下され・・・うむっ！」

ハンターが趙雲たちを見つけて走ってきた。

劉備「逃げるぞ！」

関羽「お逃げ下され、趙雲殿、兄者を頼む」

劉備「何を言っているのだ！私は今までどれだけ迷惑をかけてきた事か」

趙雲「劉備殿・・・」

劉備は思いだしていた。

戦いの地でたくさんの仲間に使われたことを。

しかし強く趙雲に手を引かれ走りだす劉備。

劉備「すまぬ……すまぬ……」

走っている最中に謝る劉備の声を趙雲は黙って聞いていた。

関羽「兄者のもとへは行かせん!!」

しかしハンターは関羽に触れる。

ポンッ 関羽確保 残り60人

張飛「あっ・・・雲長兄者!!」

関羽が確保された所を見た張飛。

張飛「ちくしょう・・・！兄者と趙雲を逃がしてまで・・・男らし

すぎるぜ・・・」

ハンターは張飛を見つけてそして走る。

張飛「おらぁ！つかまえてみるやぁ！」

関羽のように勇ましい叫びをする張飛。

ポンツ 張飛確保 残り59人

星彩「父上・・・」

父・張飛の確保を見た星彩

ハンターは星彩に気づいてそして走った。

星彩「・・・・・・・・っ！」

張飛「星彩！逃げろ！！」

捕まって座り込んでいる、張飛が言った。

星彩「私も・・・」

ハンターが星彩の前まで走ってきた。

星彩「仲間を守る・・・」

ポンツ 星彩確保 残り58人

星彩「みんな・・・頑張つて・・・」

そう一言いつて地面に膝を付いた。

甘寧「ハンターに見つかってもついてくんなよ!！」

凌統「それはこっちのセリフだっつーの!！」

呂蒙「静かにせんか!ハンターに見つかるぞ」

共に、行動をするこの3人はサファイアパークにいた。

凌統「今回の逃げきりは殿のためだ・・・捕まる訳にはいかねえ・・・」

甘寧「そう簡単にいくかな？そう言ってるやつが捕まんだよ」

呂蒙「全く相変わらずこの2人は仲が悪い・・・」

呆れる呂蒙だが近くにハンター・・・

孫堅のために逃げる凌統たちがハンターが近くにいることに気づかない。

凌統「ったく……いちいちうるせー……ってっわっ！」

甘寧「何だよ！大声だして……あっ！」

呂蒙「だから静かにしろと言ったのだ！」

走りだす3人。

しかしハンターが視界に呂蒙をとらえた。

甘寧「おっさん!？」

呂蒙「逃げる！殿のためにつ．．．」

ポンッ 呂蒙確保 残り57人

凌統「甘寧！こっちに逃げるぞ」

甘寧」でもっ……くそっ！」

そう言つて2人はサファイアパークのなかにはいった

一方、ラピスラズリたち。

クリスタル「くっ……メールを送ってだいぶ経つ……もう少しのしんぼうだ」

地面にねっころがっているクリスタルがぼそつと言った。

そのときだった。

ブルルルルル・・・

ラピスラズリ「おい！へりをだせとは頼んでねえぞ」

部下「ラピスラズリ様！ミッションでつかったへりじゃありません」！

あわてふためく部下やラピスラズリを見てクリスタルが笑った。

ラピスラズリ「何笑ってんだよ！」

クリスタル「私が助けを求めたことに気づかないとはな・・・」

今度はクリスタルがラピスラズリを見下した。

ラピスラズリ「外にでるぞくそっ！」

部下をつれてクリスタルを残し部屋をでていくラピスラズリ。

クリスタル「ラピスラズリっ！」

クリスタルがラピスラズリを呼ぶがラピスラズリは見向きもしない。

ラピスラズリ「くそっ・・・どっいう事だ！」

へりから梯子が投げだされそれをつたって1人の男が下りてきた。

ラピスラズリ「お前誰だ！じゃますんじゃねえっ！」

その男に向かってラピスラズリは叫んだ。

アクアマリン「オレはクリスタルの友人・アクアマリンだ」

その男は青色の髪を後ろにひとつに結んでおり、Ｔシャツにジーンズとラフな格好をしていた。

ラピスラズリ「何だ？クリスタルの友人？歳のはなれたガキじゃねえか」

アクアマリン「口が悪いねえ、オレだって二十は越えてるんだけどなあ」

ラピスラズリ「それで？何しにきたわけ？」

アクアマリン「クリスタルからのメールで全部分かったからな、お前がクリスタルを利用したこと」

ラピスラズリ「あーっ・・・お前か、クリスタルが助けを求めたっ  
ていう」

アクアマリン「この街をお前の好きにはさせない」

ラピスラズリ「口ではいくらでも言える！オレには部下もいるし、どうするってんだよ？」

アクアマリン「クリスタルからのメールで知ったんだけど逃走中が行われているらしいな」

ラピスラズリ「そうだけど？まったくこの計画のときに・・・」

アクアマリン「逃走者と協力してお前を倒す」

ラピスラズリ「はあ？何言ってるんだ」

アクアマリン「オレもちゃんと、それだけの力はあるんでね！じゃ、そういう事で」

そう言うとアクアマリンは梯子を上がりヘリのなかに入っていた。

ラピスラズリ「どういふ事だよ！おい！！」

しかしヘリはそのままどこかへ行ってしまった。

ラピスラズリ「まったく……でもオレには、まだあの方の命令がある……」

不気味に笑うラピスラズリは部屋にもどって行った。

次回 逃走者の助けをするアクアマリンとそれを邪魔するラピスラズリ。2つの思いが交錯するとき、新たなミッションが始動する！

## 第14話 アクアマリン登場（後書き）

完結までにまだ時間が掛かりそう・・・

## 第15話 ミッションと想い（前書き）

今気づいた！逃走者を監視していたはずのヘリがいつの間にか登場しなくなってた！どうにか理由をかんがえなければ・・・とにかく小説をお楽しみに・・・

## 第15話 ミッションと想い

黄忠「まったく・・・走るのは・・・こんなにも」

逃走者の中でも最高齢の黄忠。

黄忠「わしも誰かと合流したほうがいいかのう・・・」

建物の陰から様子を見る黄忠。

いつもの迫力のある気合いとはべつに真剣だ。

しかし近くに・・・

ハンター・・・

黄忠「馬超殿に電話してみるかのっ・・・ぬおっ！」

横からハンターが走ってくる事に気づいた黄忠。

黄忠「ぬっ！待たんか！わあっ！」

ポンッ 黄忠確保 残り56人

くのいち「幸村様〜！どこかに隠れたほづがいいんじゃない？」

幸村と行動をするくのいち

三成「お前ら、何してるのだ？」

そこに三成が合流。

幸村「三成殿！じつはミッションがでるまで隠れようと思って・・・」

くのいち「今、その場所を探してんだよね！」

三成「そうだったのか・・・そうだ、オレが見つけた場所がある、そこに案内しよう」

そう言つと三成は幸村とくのいちを連れてある場所へと向かった。

そのころへりで移動しているアクアマリン。

そしてへりはパーティー会場付近に到着した。

アクアマリン「さてと・・・よいしょっ・・・」

へりからあるものを運んできたアクアマリン。

アクアマリン「逃走者がきてくれれば・・・」

そう言つとアクアマリンは機械を地面に置いた。

そこにはゲーム減縮装置とかがかかっていた。

アクアマリン「クリスタルの頼みで用意したけど・・・あれっ?」

その機械には何かをはめ込む穴が3つあった。

アクアマリン「何だこの穴・・・いや、まずは逃走者を疲れさせないようにならないとなあ」

装置の横に座りアクアマリンは逃走者を待った。

三成「ここだ」

幸村「確かにここなら見つかりにくいですね」

くのいち「にゃはーん！さすがミッチー！！」

三成「誰がミッチーだ！さっさと隠れ・・・うわっ！」

前からハンターが走ってくる事に気づいた三成。

幸村「三成殿！逃げないと・・・くのいちも！」

くのいち「私は大丈夫！幸村様、足には自信があるから」

そう言うと、くのいちを飛び越え地面に着地した。

くのいち「ほら！こつちだよん」

ハンターはくのいちを追いかけ、その隙に幸村と三成は走りだした。

幸村「くのいち・・・自ら罠になるとは」

三成「奴の頑張りを無駄にしてはいけない・・・ひとまずこの中に入るぞ」

幸村と三成は建物の中に入った。

そのときだった。

三成「うわっ！幸村引き返せ！」

幸村「えっ？わっ！はいつ！！」

建物の中にいたハンターと鉢合わせした三成と幸村。

幸村「三成殿！？」

三成「逃げる！幸村っ！！」

幸村をかばう様にハンターの前に立つ三成。

幸村「三成殿・・・！すつすいません！！」

後ろを向いて建物からでる幸村。

三成「捕まるなよ・・・幸村」

ポンッ

石田三成確保

残り55人

くのいち「もうっ……しつこいなあ……きゃっ！」

前からハンターが走ってきた。

くのいち「いやっ！何で？タイミング悪すぎっ！」

ポンツ　くのいち確保　残り54人

くのいち「幸村様・・・ごめんなさい・・・」

アクアマリン「逃走者たちよ・・・頼む・・・」

逃走者を待つアクアマリン

ラピスラズリ「この街はオレのものだ・・・」

欲望を働かせるラピスラズリ。

そしてー

新たなミッションが始動したー

ピリリリリリリリー

メールだ。

勝家「何だ・・・？ミッション？」

ぎん千代「クリスタルが友人・アクアマリンに助けを求めた」

孫策「助けに応じたアクアマリンはパーティー会場付近にゲーム時間減縮装置を置いた」

濃姫「この装置に3つのペンダントをはめるとゲーム時間を30分減らせる」

政宗「なお、ペンダントを持っているのは希羅・龍義・流海の3人」

信玄「この3人のうち1人でも捕まるとミッションは成功できないので気をつけたまえ・・・か」

MISSION ゲーム時間を減縮

せよ！

パーティー会場にゲーム時間減縮装置が置かれた。

この装置に赤・青・黄のペンダントをはめるとゲーム時間が30分減縮される。

ただしペンダントを持っている3人のうち1人でも捕まればミッシェン失敗となる

流海「うそだろ・・・オレ赤色のペンダント持つてるよ・・・責任重大じゃねえか」

ミッションのメールを見ながら流海は言った。

流海「でも30分も減らせるなら・・・じゃあ！」

パチンコアメジストからでる流海。

流海「頑張るっきゃねえな」

そう言って流海はパーティー会場へと向かった。

孫策「なあ、尚香！うろうろしてたら見つかるだろ」

孫尚香「しーんぱいしすぎよ！何でついてくる訳？」

孫権「兄上も尚香も、そんなに声をだしたらハンターに・・・」

孫堅「おっ！お前たち」

そこに孫堅が合流。

孫策「親父！？」

孫尚香「父さま・・・」

孫権「父上っ！」

孫堅の子たちが声を上げて言った。

孫策「親父！ハンターいたか？」

孫堅「いや、こっちはいなかった」

見たす孫堅たちの近くにハンター・・・

孫策「とりあえず、あのペンダント持っている奴らに任せるしか・  
・うおっ！」

前からハンターが走ってきた。

孫堅「お前たちは逃げろ！」

孫策たちの前に立つ孫堅。

孫尚香「何言ってるのよ！父さま・・・きゃっ！・・！」

後ろからもハンターが走ってきた。

孫策「尚香！こっちだ、おい！」

横の道に逃げ込む孫策が孫尚香を呼びかける。

孫尚香「ダメよ！父さまが・・・きゃあ！」

そのとき何かが孫尚香を押した。

孫尚香「いった・・・何よもうっ・・・」

孫策「ほら、こっちだ・・・」

孫尚香「ちよっ・・・兄さま！えっ・・・」

孫尚香をおした人物・・・

孫尚香「権兄さま！」

そのとき孫策が孫尚香の手を引っぱった。

孫尚香「そんな！いやあ！権兄さま！父さまあー！！」

叫ぶ孫尚香を孫策はだまってどこかにつれて行った。

孫権「兄上……尚香……お気を付けて」

ポンツ 孫権確保 残り53人

孫堅「ふんっ……さすがはオレの子だ……権よ」

ポンツ 孫堅確保 残り52人

次々と捕まる逃走者たち。

はたして希羅・龍義・流海の3人はミッション成功なのか!?

次回 ペンダントを持ち走る英雄たち!

## 第15話 ミッションと想い（後書き）

果たしてミッションは成功するのか!?

第16話 英雄たちの確保（前書き）

逃げる逃走者たち！

その果てにあるものは！

第16話 英雄たちの確保

大喬「孫策様・・・」

孫策の妻・大喬が辺りを歩いていた。

大喬「ミッション大丈夫でしょうか・・・いやっ！」

孫権を確保したハンターが大喬に向かって走る。

大喬「いやっ！孫策様あ！！」

ポンッ　大喬確保　残り51人

袁紹「あれは・・・まずいな！」

大喬が確保された所を見た袁紹。

袁紹「しまった・・・うわっ！」

大喬を確保したハンターは袁紹を見つけた。

袁紹「名族の・・・私が・・・あゝっ！」

ポンッ 袁紹確保 残り50人

そのころパーティー会場へと着いた龍義。

アクアマリン「おっ！お疲れ！」

龍義「オレはアクアマリン！クリスタルの友人さ、この装置を用意したのはオレだ」

龍義「そうだったのか・・・あっ！これペンダント・・・」

そう言つと龍義はバックからペンダントをとりだし穴にはめ込んだ。

希羅「おっ！龍義」

そこに希羅が合流。

アクアマリン「おっ！」

希羅「だれ？」

龍義「クリスタルの友人だって」

希羅は手に持っているペンダントを穴にはめた。

アクアマリン「あっ！そうだ、君たち逃走者なんだろ」

希羅「そうだけど・・・」

アクアマリン「だったら今の状況を他の逃走者に知らせてほしいんだ」

アクアマリンはクリスタルから知った事を希羅と龍義に全部話した。

希羅「マジかよ！でもそのラピスラズリって奴が提案した計画なん  
だろ」

龍義「それをクリスタルが実行しようとしたが失敗、逆に利用され  
た・・・ラピスラズリが1番になるために・・・」

アクアマリン「細かい事までメールで知らせてくれたんだ、多分そ  
ろそろラピスラズリの部下がこの街の住民たちを脅して金や宝石を  
盗るところだ・・・な」

希羅「何だつて・・・!？」

アクアマリン「とりあえずオレが言ったことメールか何かで他の逃走者に知らせてくれよ」

希羅は時間をかけながらメールを打ち、他の逃走者たちに一斉送信した。

龍義「まずはこれでよしと・・・あとは流海がくるのを待つだけだな」

希羅「それじゃ、オレたちはこれで」

アクアマリン「ああ！また困ったことがあったら協力して」

希羅と龍義はその場をあとにした。

そしてそのころ、希羅と龍義を除く逃走者たちが希羅から送られてきたメールを見ていた。

孫策「マジかよ・・・やべえじゃねえか」

孫尚香「ひどい！そんな事してまで1番になりたいわけ・・・！？」

メールを見ながら言う孫策と孫尚香。

しかし近くにハンター・・・

孫尚香「もうっ！そのラピスラズリって奴に文句言ってるわ・・・  
きゃっ！」

孫策「尚香！？」

孫尚香「・・・・・・・・っ！何よ！ちよつと足が速いからってえ！」

孫尚香はハンターの横を通り抜けてハンターをかわす

孫策「何してんだよ！尚香っ！やめろって！！」

孫尚香「兄さま逃げて！私と・・・父さまと権兄さまの分まで・・・」

孫策「ふざけんなよ！うおっ！」

そのとき何かが孫策を引つ張った。

周瑜「君の妹が逃げろと言っているのだ！その思いを無駄にするな  
！」

孫策「何だよ！はなせって！尚香っ！しょーこっつっ！..」

孫尚香「気をつけてね・・・兄さま」

ポンツ

孫尚香確保

残り49人

周泰「孫権様が・・・」

孫権に仕える勇将・周泰が建物の陰で呟いた。

周泰「場所を変えるか・・・」

別の建物に移動しようと走ったときだった。

周泰「むっ・・・」

周囲を搜索しているハンターに見つかってしまった。

曲がり角をまがった周泰だがそこでハンターと鉢合わせ。

周泰「・・・・・・・・っ！」

ポンッ 周泰確保 残り48人

ぎん千代「義元殿、何をしている？」

義元「けまりの練習をしているの！」

ぎん千代「呑気なものだな・・・あっ！」

遠くにハンターを発見したぎん千代。

ぎん千代「こっちだ！逃げるぞ」

義元「のっ！どうしたの？」

建物の中に逃げ込む2人。

しかし建物内を搜索していたハンターに見つかった。

義元「の〜〜〜〜っ！」

ぎん千代「……………っ！義元殿！！」

ポンッ

今川義元確保

残り47人

建物をでよつとしたぎん千代だが別のハンターに見つかってしまった。

ぎん千代「くっ！こんな所で・・・」

ポンツ 立花ぎん千代確保残り46人

ぎん千代「すまぬ・・・島津よ・・・」

流海がペンダントを穴にはめ込んだらミッションクリア。

はたしてミッション成功させて一気に逃走者は逃げきりなるのか！？

次回　いつも2人で笑ったりケンカしたり・・・そんな仲間がいたからここまでこれたんだ・・・だけどその仲間がつかまったら・・・

・？ハンターにつかまったら失格という状況のなかで逃走者は何を  
思うのか・・・身内がつかまり追いつめられていく孫策・・・そん  
な彼に周瑜は言葉を投げ掛けた・・・

## 第16話 英雄たちの確保（後書き）

アクアマリンとラピスラズリついに直接対決！か？

物語はクリスタルもいるんで・・・どうなることやら

## 第17話 友のために（前書き）

前の話でアクアマリンの台詞が龍義の名前になってました！すいませーん。

## 第17話 友のために

謙信「ハンター、あなどれぬな・・・」

信玄「気をつけねばのう」

ぎん千代の確保メールを見ていた謙信と信玄。

信玄「幸村は頑張つて逃げてるのう」

謙信「兼続は捕まつたが・・・宿敵、お前には負けぬ」

信玄「ほっほっほっ、わしとてお主には負けられんのを」

謙信「負けるわけにはいかぬか・・・それでこそ宿敵だ」

言葉を交わし合う2人だが・・・

近くにハンター・・・

信玄「さてと、どこに行こうかね・・・うむっ!？」

ハンターが謙信と信玄に向かって走る。

謙信「宿敵!？」

信玄「どうやら・・・わしが負けかのっ・・・」

ポンッ 武田信玄確保 残り45人

謙信「もはや勝ち負けの問題では・・・ぬっ！」

逃げる方向に別のハンター

謙信「どうやら・・・お互い負けのようだな・・・」

ポンッ 上杉謙信確保 残り44人

孫策「周瑜！てめえ！！どっいうつもりだよ！尚香捕まったじゃねえかよ！！」

周瑜「何を言っている！君があそこで逃げなかったら君の妹も君も捕まっていたかも知れないんだぞ！！」

孫策「……………っ！でも……………だからって」

黙り込む孫策に周瑜が言った。

周瑜「君は何のために逃げている？」

孫策「それは・・・オレたちの国・・・呉を、豊かにするためと、あと、大喬のためだ」

周瑜「国と妻のために逃げているのだな？」

周瑜が孫策を見た。

周瑜の瞳は何もかも見透かしてるようだった。

孫策「周瑜は何のために逃げてるんだよ？」

周瑜「私も君と同じだ！国や妻という、かけがえのない存在のために逃げている」

しばらくの沈黙が続いた。

孫策「そうか・・・何かさっきはごめんな・・・どなったりして」

周瑜「気にするな、私もカツとなりすぎた」

お互いを見てそして笑い合った。

孫策の親友の周瑜はよき理解者であり、また義兄弟である。

その周瑜と語り合うことで孫策はとても胸がいっぱいになった。

周瑜「さてと・・・あと何分だ・・・うおっ！」

曲がり角からハンターが走ってきた。

孫策「周瑜！！」

周瑜「君は逃げろ！孫策っ・・・」

そこで言葉が途ぎれた。

孫策「いやだ！周瑜っ！！お前まで・・・しゅっゆーっ」

周瑜「私の分まで・・・逃げてくれ・・・」

ポンッ 周瑜確保 残り43人

孫策「ハアッ・・・しゅっゆ・・・」

気づいていたら孫策は走っていた。

ただひたすら走り続けていた。

太公望「まさか、ここまで逃げ延びたとはな・・・ふっ、人間とは面白いゲームをする」

自分が逃げ延びた事関心をする太公望。

太公望「女禍と伏犧はどうしているか・・・うむっ」

ハンターを発見した太公望

伏犧「おっ！何をしておるのじゃ、坊主」

太公望「しっ！静かにしろ」

しかしハンターに見つかってしまった。

伏犧「ぬおっ！速っ！？」

太公望「何をしてるのだ！うわっ！」

前から別のハンター。

ポンッ 伏犠確保 残り42人

伏犠「ハンター・・・速いわ・・・」

太公望「ふっ・・・わぁっ！」

ポンッ                      太公望確保    残り41人

太公望「この私がつかまるとは・・・」

そのころ流海はパーティー会場へと向かっていた。

流海「ちくしょう・・・」

ハンターがいるため思うように進めない。

一方、ラピスラズリたち。

部下「ラピスラズリ様！パーティー会場付近に怪しい装置を確認しました、しかもアクアマリンにいたのでおそらく、奴が用意したものと」

ラピスラズリ「装置？何をかんがえてやがる・・・よし、オレが行くからお前たちは住民を脅して・・・分かったな？」

部下「はっ！」

そう言うとき部下たちは部屋をでていった。

クリスタル「やつ、やめるんだ・・・ラピスラズリ・・・」

ラピスラズリ「うるせえ！もう後戻りできねえんだよ」

一言そういったら、クリスタルを残し部屋をでていった。

次回      ラピスラズリの野望に焦りだす逃走者たち！

しかし次々とつかまる仲間たちを前に逃走者たちは・・・

逃走者たちの様々な思いが交錯する！

## 第17話 友のために（後書き）

流海はミッション成功できるのか!？

第18話 庇い合う英雄たち（前書き）

ここはある指令室。

そこに一人の男が座っていた。

その男は画面をタッチしていた。

そして逃走者たちの様子を男はみていた。



第18話 庇い合う英雄たち

そしてー

住民「キヤー！何なの！？」

部下「オラッ！金よこせ！宝石もだ！」

住民「うわっ！はなせよ！！」

住民「何なのよ！いやっ！」

街中がラピスラズリの部下たちによって宝石や金が盗まれまじめた。

孫策「なっ・・・何だよ！これ」

逃走者も捕まった者もこの光景を見ていた。

希羅「やっぱり・・・ラピスラズリの部下たちか・・・」

ゲーム時間残り25分

アクアマリン「あれっ・・・？」

ラピスラズリ「ようっ・・・なんか企んでるみたいじゃねえか」

アクアマリン「それはあんただろ」

ラピスラズリ「その装置……まさかお前、逃走者に手助けすのか？」

アクアマリン「だったら、どうするってんだい？」

ラピスラズリ「お前……調子に乗るなよ」

ラピスラズリがパチンと指をならす。

アクアマリン「……………っ！」

ラピスラズリの後ろから部下が数人駆け付けた。

アクアマリン「へえ！まだそんなに部下がいたんだ・・・あんた、その人たちによっぽど慕われてるんだねえ」

ラピスラズリ「うるせえんだよ！おい！こいつを可愛がってやれ」

ピリリリリリリ

希羅「何だ？通達・・・」

龍義「ラピスラズリが装置に気づいた、なので残り20分までにミッションをクリアしないと装置はラピスラズリによって破壊されてしまうので、そうならないように気をつけたまえ」

流海「ちくしょう・・・オレがミッションクリアしなきゃいけないのに」

いそいでパーティー会場へと走る流海。

祝融「めんどろな事になつたねえ」

辺りを歩く祝融。

義経「あつ……お前は」

祝融「あんた？戦国の者だろう、よくここまで逃げ延びたねえ！頼もしいよ」

義経「なっ・・・！そんな・・・えっと」

女性に慣れてない義経は祝融の言葉に戸惑う。

しかし・・・ハンター・・・

義経「ハンターだ！」

祝融「逃げるよ！」

ハンターは義経と祝融を追った。

逃げた方向には・・・

徐晃・司馬懿・張遼がそこにいた。

司馬懿「馬鹿め！なぜハンターつれてくるのだ」

そしてハンターが視界にとらえた。

司馬懿「ぬあっ!？」

ポンツ 司馬懿確保 残り 40人

ハンターはすぐさま別の逃走者を追った。

徐晃「ハンター速いでござる!くっ・・・」

張遼「まずいな・・・」

ポンッ 徐晃確保 残り39人

徐晃「あのハンターに勝てる者はいろのだろうか・・・」

張遼「私では適わぬのか！」

ポンッ 張遼確保 残り38人

身軽な義経はすばやく道から別の方向へと逃げた。

祝融「やっぱり速い……もうっ……あんだ御免よ」

そう言つとその場に座り込んだ。

ポンツ 祝融確保 残り37人

甘寧「ちくしょう！なんか捕まるペースはやくねえか」

凌統「状況がこれだからな・・・あのラピスラズリって奴の部下のせいで街もさわぎになってるしな」

黄蓋「大殿の分まで・・・何としても逃げねば」

ひびく住民の悲鳴とラピスズリの部下の声。

ハンターの気配はこれで分かりづらくなってしまった

甘寧「やっべ！ハンター！？」

凌統「おいっ！甘寧！上っ！」

上を見るとヘリが上空を移動していた。

凌統「たしか・・・ハンターゲームの時に増えたへりじゃ・・・」

甘寧「作者がわすれてたんだろ！逃げるぞ」

甘寧たちの場所は地上のハンターへと伝えられた。

凌統「くそっ！ここまで逃げ延びたのに・・・ちっきしょー！  
」

近くにいた3体のハンターが確保へと向かう。

黄蓋「くそっ！もうきよった・・・お前たちは逃げろ」

凌統「何言ってるんすか！」

甘寧「何で・・・そんな・・・オレたちを庇うんだよ！なんで！！」

しかしハンターは黄蓋にふれた。

ポンッ 黄蓋確保 残り36人

甘寧「おらっ！さっさと行けよ」

凌統「はあ？お前まで何言って・・・」

甘寧「これ以上・・・つかまるのは御免なんだよ・・・」

凌統「ばかっ・・・何やって・・・待てよ！かんねーい！」

甘寧は迫ってくるハンターに向かって突きすすんだ。

甘寧「鈴の甘寧！まかり通るぜえ！！」

凌統「あんにやろう！何やってんだよ・・・」

ポンツ 甘寧確保 残り35人

凌統「甘寧・・・かんねい・・・」

甘寧の名前を呟きながら凌統は走りつづけた。

そして建物の中に逃げ込んだ。

小太郎「騒がしい・・・」

北条に仕える忍・風魔小太郎が呟く。

そこに半蔵が合流。

半蔵「何をしている・・・」

小太郎「それはこっちの台詞だ、ん？」

上空にいるへりを発見した小太郎。

小太郎「逃げぬのか？」

半蔵「忍はただ主を守るのみ……」

しかし小太郎と半蔵をハンターが見つけた。

小太郎はすばやくハンターをかわした。

半蔵「主はつかまった……ならば影も」

ポンツ

服部半蔵確保

残り34人

小太郎「金と主・・・やはり主をとったか」

しかし小太郎の前から別のハンターが走ってきた。

小太郎「ふっ、我にしてはよく逃げた方だな」

ポンッ

風魔小太郎確保

残り三人

阿国「何や、みなはん捕まるのはやいどすなあゝ」

ふれあいひろばを歩く阿国

女禍「よく堂々と歩いてるな、隠れた方がいいのではないか」

阿国「これは女禍様！あゝん、慶次様大丈夫やるか」

女禍「人の事より自分の心配をしたらどうだ？とりあえず建物の中に入るぞ」

女禍と阿国は建物の中に入った。

流海「はあっ・・・ちくしょっ・・・」

パーティー会場付近に着いた流海。

しかし――

そのとき――

残り20分になった――

ラピスラズリ「こんにゃろ！」

ラピスラズリは足を上げ、装置におもいきり叩き付けた。

装置はへんな音をたて、けむりが一筋あがった。

流海「えっ……うそ……だろ？」

ニヤニヤするラピスラズリと部下。

地面につづくまるアクアマリン。

流海「オレ・・・失敗したのか・・・」

地面に膝を付く流海。

その流海をハンターが発見した。

流海「何で・・・？オレ・・・頑張ったのに」

ハンターが流海に向かって走る。

ラピスラズリ「何が頑張っただ！ただ逃げてるだけじゃねえか」

流海「違えよ！うぁ・・・あああああっ！！」

大声で流海は泣いた。

ハンターが流海の前に立つ

ポンッ 流海確保 残り32人

流海「御免……みんな……星地っ」

ラピスラズリの逆転で追い込まれる逃走者たち。

次回 孫市の思い

## 第18話 庇い合う英雄たち（後書き）

画面を操作していた人物はだれなのか？逃走劇をご期待ください

第19話 仲間への想い（前書き）

男は指令室で逃走者を監視していた。

「???」おもしろくなってきたな・・・ん？」

男のもとに連絡が入った。

幹部「そっちの調子はどう？」

声の主は女で幹部からだった。

「???」「ええ、順調です」

幹部「そう、よかったわ！次のミッションどうなってるの？」

「???」「時間に関係のある欲望のある者が行くようなミッションです、だいぶ後にだしますが」

幹部「ふーん、わかったわ！ちゃんとして私のご主人様を楽しませて  
よね」

???「はっ、はい・・・」

幹部「あんたは月村サトシをモデルにして作られ、しかも作った人  
はご主人様なんだから感謝しなさいよ」

???「はい・・・」

幹部「私とご主人様とそれから観客も見てるんだからしっかりしなさいよね」

連絡はそこできた。

「……もつと……頑張らなきゃな」

男は再び逃走者を監視し始めた。

第19話 仲間への想い

アクアマリンはふらふらでクリスタルがいる場所に向かった。

クリスタル「アクアマリン？」

アクアマリンはボロボロだった。

アクアマリン「オレとしたことが・・・ラピスラズリの部下にボコ

ボコにされたよ」

そう言いながらアクアマリンはクリスタルの縄を解いていった。

クリスタル「くっ……外にでてくる」

アクアマリン「オレも行くよ」

クリスタルはアクアマリンを支えながら、よろよると部屋をでていった。

クリスタル「私は情けないな・・・」

アクアマリン「そんな事ないよ、何言っただかね」

クリスタルを見てアクアマリンがつぶやいた。

クリスタル「お前は頼りになるよ、私とちがつて」

アクアマリン「またそんな事・・・ほら」

クリスタルとアクアマリンは外にでた。

クリスタル「何ことだ・・・」

クリスタルとアクアマリンが見た光景。

男女関係なく住民につかみ掛かり宝石や金を盗るラピスラズリの部下。

立派な建物に傷がつき、窓ガラスがわれる音。

親とはぐれて泣く子供。

クリスタル「私の・・・せいだ・・・」

アクアマリン「ひどいねえ、あのラピスラズリって奴なに考えてるんだ」

クリスタル「私がラピスラズリの計画なんかにはのるから・・・」

アクアマリン「クリスタル・・・」

住民「やめて！子供には手をださないで！！」

部下「うるせえ！金もってんだろ！！！」

子供「うわぁん、お母さーんっ！」

女性は部下に押され地面に叩き付けられた。

住民「いやっやめ・・・」

子供は走って女性のもとに駆けよった。

しかしそんな騒ぎのなかでもハンターは逃走者を搜索する。

馬超「なんだ・・・この騒ぎは」

街全体での光景におどろく馬超。

しかし馬超の後ろからハンターが走ってきた。

その事に馬超はまだ気づいていない。

馬超「ハンター・・・どこだ」

ハンターは馬超の後ろに立った。

馬超「えっ？」

ポンッ 馬超確保 残り31人

馬超「オレは何してるのだ・・・」

ほう徳「馬超殿!？」

馬超が確保された所を見たほう徳。

ほう徳はそのまま建物に逃げ込んだ。

孫市「やべえ・・・何だよこれ」

クリスタルタウンの光景におどろく孫市。

孫市「捕まる訳にはいかねえよな」

しかしそんな思いとは別にハンター。

孫市「チッ！こんな時に」

ハンターに見つかった孫市

そして勢いよく走る。

孫市「オレは・・・オレのせいで捕まった奴らの分まで逃げなきゃいけないのに」

ラピスラズリの部下と住民の間を走って逃げる孫市。

しかし逃げる先に・・・

利家「げっ！孫市!？」

勝家「ハンター連れてきとるわ」

元親「逃げるぞ！凄絶に」

利家と勝家と元親がいた。

孫市「またか？オレ・・・また仲間をまき込むのか」

戸惑ってるはずなのに孫市は利家たちを追い越した。

ハンターが視界にとらえたのは・・・

勝家「ぐわあ！」

利家「叔父貴！？ちきしょっ！孫市い、待てよ！！」

ポンツ 柴田勝家確保 残り30人

利家「何でだよ！ここまで逃げ延びたのに・・・」

ポンツ 前田利家確保 残り29人  
元親はすばやく別の道に逃げ込  
んだが・・・

別のハンターと鉢合わせ。

元親「ぐっ！ここまで逃げ延びたが・・・」

ポンッ 長宗我部元親確保残り28人

孫市「はあっ・・・オレ」

建物の陰に身を潜める孫市

孫市「また仲間が・・・オレのせいで・・・ちきしょっ!」

辺りを見わたす孫市。

孫市「そっだ・・・」

遠くにハンターを見つけた孫市は一言呟いて走りだした。

孫市「オレがつかまれば・・・もう誰も捕まらずにすむんだよな・・・」

ハンターは孫市を見つけて走りだした。

孫市「これで・・・すまねえ、オレのせいで捕まった奴ら・・・オレが逃げ延びてもオレのせいで捕まった奴らは、はがゆいだろうな」

ハンターが目の前にきた時だった。

孫市「うおっ!?!」

横から引っぱられハンターから逃れた。

孫市「何だよ!えっ?」

義経「自分からハンターに向かって行く奴があるか!」

孫市は義経から手をひっぱられハンターをつまくまいた。

義経「ここまで逃げ延びたのだ！なぜ自らハンターに向かっていった？」

孫市「オレの・・・オレのせいで捕まった奴らがたくさんいるんだよ！オレのせいで・・・」

2人は建物の中に入った。

義経「だからといって自分からハンターに確保してもらおうとするのか？」

孫市「そうだよ！その方が捕まった奴らのためにもなる・・・オレが逃げ延びて金もらって、それで？つかまったやつのも考えてみるよ！ムカツクにきまつてるだろ！オレが・・・」

そのときだった。

ガツとにぶい音がした。

孫市は衝撃で壁に叩き付けられた。

義経「自分の事をさっきから聞いてれば責めてばかりではないか！それでも男か！捕まった奴の分までお前は逃げるべきなのではないのか？オレの言ってる事間違ってるか？」

孫市「・・・・・・・・っ！」

義経から殴られた頬をおさえながら孫市は言った。

孫市「それがオレのすべき事なのか？」

義経「オレの意見だがな」

孫市「オレは・・・」

そのときだった。

義経「ハンター！？」

孫市「けっ！マジかよ・・・」

建物内を搜索していたハンターが孫市と義経を見つけた。

義経「逃げろ！」

孫市「何言っただよ！お前まで・・・」

義経「オレが捕まっても、お前のせいじゃないからな」

義経はそう言つと囀になるかのようにハンターに突きすすんだ。

孫市「義経……すまねえ」

走りだすと孫市は建物からでた。

義経「頑張るのだぞ……孫市」

ポンッ

源義経確保

残り

27人

孫市「オレは・・・逃げるんだ・・・」

孫市はひたすら走り続けた

孫市「捕まった奴の分まで逃げるんだ」

その強き意思はどこに向かって行くのか。

次回 逃げきりを確信した  
スラズリがさらなる手

逃走者たちだがラピ  
段に！

第19話 仲間への想い（後書き）

7月5日の逃走中楽しみです！

## 第20話 ラピスラズリとゲームマスター（前書き）

「ラピスラズリ……このままじゃ逃走者が勝ってしまうな」

モニターの前にあの男がいた。

「ハンター召喚した時にラピスラズリは手筈通りにやってくれたしな」

この人物は本編にて登場！

## 第20話 ラピスラズリとゲームマスター

そのころラピスラズリたち

部下「ラピスラズリ様！パーティー会場のなかにタイマーを発見しました」

ラピスラズリ「タイマー？何だ、それは」

部下「くわしく調べたところ、逃走者が逃げる時間が表してあったと・・・」

ラピスラズリ「はっ？後何分だ？」

ラピスラズリは部下に聞いた。

部下「あと１７分だそうです」

ラピスラズリ「それだけの時間では全部住民から金や宝石を盗れな

い・・・オレが一番にもなれない・・・くっそ！逃走者に勝たせる  
ものか！！」

部下「どうしますか？ちなみに逃走者はあと27人だそうです」

そのとき部屋にあったパソコンに連絡が入った。

部下「ラピスラズリ様！ゲームマスターと名乗る人物から連絡が・・・」

ラピスラズリ「なにっ！あの方から・・・」

ラピスラズリはパソコンの方に駆けよった。

パソコンの画面には男が写っていた。

ゲームマスター「ラピスラズリよ、調子はどうだ？」

ラピスラズリ「ええ・・・その・・・」

ゲームマスター「まあ一応きいてみただけだ、ずっとモニターで見てたよ」

ラピスラズリ「すいません・・・このままじゃ逃走者たちが勝つてしまいます」

ゲームマスター「ふっ、そう簡単に勝たせはしないさ次のミッションの内容を送るよ」

ラピスラズリ「ありがとうございます！」

ゲームマスター「私の命令で君はクリスタルを利用したのだから、君に協力するよ」

ラピスラズリ「それは・・・」

ゲームマスター「君は私に話してくれたじゃないか、クリスタルを利用して一番になりたいと」

ラピスラズリ「確かにそうですが・・・」

ゲームマスター「私がクリスタルを利用して一番になったらどうだと提案して君はその提案にのっただろ！そのかわり私は君を一番に近づけさせるためミッションをだしてきただろう」

ゲームマスターに言われて怯むラピスラズリ。

ゲームマスター「私がハンターを召喚した時も君は手筈通りにやってくれた」

ラピスラズリ「はっ、はい・・・」

その後ゲームマスターと話しをしたラピスラズリはゲームマスターに言われた場所へと向かった。

一番になるために――

次回 逃走者たちを突き動かす新ミッション！

第20話 ラピスラズリとゲームマスター（後書き）

最近暑い・・・

第21話 ミッション発動！逃走者たちの屈辱（前書き）

どうすればいい？

何をしたらいい？

私に何かできる事はないのか？

住民を助けながらクリスタルはそう思っていた。

第21話 ミッション発動！逃走者たちの屈辱

孫策「はあっ・・・ここまで長かったな」

誰もが逃げきりを確信していた。

一方、ラピスラズリはヘリでパーティー会場へと向かっていた。

ラピスラズリ「逃走者め・・・見てろよ」

クリスタルタウンではラピスラズリの部下が住民から宝石や金を盗り続けていた

希羅「やめろよ！みんなに何するんだよ」

部下「うるせえ！ガキは引っ込んでろ」

希羅は部下に押されて地面にたおれた。

そしてラピスラズリがパーティー会場に着いた。

ラピスラズリ「ここか・・・」

パーティー会場に入ったラピスラズリはタイマーを見つけた。

ラピスラズリ「よし、こうだ・・・」

ピリリリリリー

メールだ。

孫策「何だ・・・？げっ！ミッションかよ・・・」

月英「ラピスラズリがパーティー会場にあるタイマーをいじり、時間が逆転をした」

諸葛亮「これよりゲーム時間が1秒ずつ増え賞金が2000円ずつ減

る」

左茲「パーティー会場にある逆さになっている砂時計を元に戻せばゲーム時間が正常になる」

慶次「このままではゲームが永遠におわらないので気をつけたまえ」

龍義「なあ、希羅！このミッション、王国のときの・・・」

希羅「オレも何となく、にてるって思ったけど・・・どうする？」

MISSION ゲーム時間をとれどせ！

ラピスラズリがタイマーを使いゲーム時間を逆転させた。

これから時間が1秒ずつ増えて賞金は200円ずつ減る

タイマーにつながっている砂時計を逆さから元の状態に戻せば時間が正常に動く

姜維「よし！ここでミッションを成功させて逃げる時間をへらさない」と

逃走者たちはミッションへと向って行く。

そのころラピスラズリはパソコンの前に立っていた。

ゲームマスターからの次の指示をまっていた。

部下「ラピスラズリ様！」

ラピスラズリ「何だ！オレはあの方からの連絡をまつてるんだ」

部下「クリスタルが・・・住民を助けています！あと青い髪の男も・・・」

ラピスラズリ「あのアクアマリンって奴だな・・・よし、お前は他の部下を連れて住民を脅して金を盗れ！オレは・・・クリスタルとアクアマリンにお仕置きをしてくる」

部下「はっ！」

ラピスラズリの部下は部屋をでていった。

ラピスラズリ「さてと、行くか・・・」

ラピスラズリは棚からあるものを取りだした。

ラピスラズリはニヤリと笑うと部屋をでていった。

ラピスラズリの手に握られていたもの・・・それは

ラピスラズリ「クリスタルの護衛用として注文したんだけど・・・  
まさかここで役に立つとはな」

拳銃だった。

牢獄DEトーク

陸理「こんな時にトークしている場合じゃないでしょ目の前で・・・  
クリスタルタウンの住民がおそわれているのに！」

部下が住民を脅している所は牢獄のちかくだ。

希羅「ちくしょ・・・どうすればいいんだよ！こんな事は・・・だ  
めなのに」

希羅が地面に膝を付いていった。

陸我「ん？あのおじさんは」

牢獄の間から手をだしてクリスタルを指した。

お市「あの方は・・・一番最初のミッションのときに会いました」

牢獄の者たちが口々に言った。

希羅「たしか・・・あの青い髪の奴がクリスタルの友人のアクアマリンだったよな・・・ミッシヨンのときにオレと龍義は会ったもんな」

牢獄の者たち「へえ」

小喬「じゃあ？あのおじさんがクリスタルって人なの」

希羅「だな、オレたちもクリスタルとアクアマリンを助けねえと・・・」

ラピスラズリ「そうはさせねえぜ、クソガキさんよ」

希羅の後ろにラピスラズリが立っていた。

そして持っていた拳銃を希羅に向けていた。

牢獄の者たちもその光景に驚きの声を上げる。

ラピスラズリ「おとなしくしてろよ？でないと・・・お前の仲間が  
ケガするぜ」

ラピスラズリは牢獄の前まできて、なかにいる逃走者に拳銃を向けた。

小喬「いやあ！怖いよ〜周瑜様あ！」

周瑜「小喬！私の後ろに隠れている」

陸理「きゃあ！やめてえ」

逃走者たちが悲鳴を上げる

星地「流海……」

流海の袖を握らる星地。

流海「星地……大丈夫だオレも怖いんだ……」

流海の肩がふるえていた。

ラピスラズリ「ふん！今からいいもの見せてやるよ」

ラピスラズリは拳銃をある方向にきり替えた。

希羅「なっ・・・」

クリスタルにラピスラズリは拳銃を向けていた。

希羅「やつ・・・やめろよ・・・お前の上司なんだろ・・・そこま  
でして何で一番になりたいんだよ！」

ラピスラズリ「うるせえ！この際だから教えてやるよ！オレは小せ  
えころ親から捨てられてクリスタルに拾われたんだ」

クリスタルにねらいを定めるラピスラズリ。

ラピスラズリ「オレを受け入れてくれて、そだててくれた！クリス  
タルがこの街を創っていくのを見てきた！けどなクリスタルが偉く  
なればなるほど・・・オレには対抗心がわいてきちまったんだよ！」

ラピスラズリは拳銃の引き金にてを掛ける。

ラピスラズリ「オレは約束したのにな・・・街ができたらクリスタルを一番にしてみせるって・・・でもだめだった、オレは一番になりたいっていう欲望に負けたんだ」

希羅「やめろ・・・クリスタルは親同然だろ・・・なあ」

ラピスラズリの話を牢獄の者が聞いてだまっていた。

ラピスラズリ「変なまねしたらお前や仲間を撃つかもしんねえからな？」

そしてー

引き金をひいた―

希羅「やめろ―おっ！  
」

そして銃声が響いた。

クリスタル「っ！？」

しかし撃たれたのはクリスタルではなかった。

希羅「えっ……」

クリスタルを庇うようにクリスタルの後ろに立っていた人物。

クリスタル「なっ……アクア……マリン？」

アクアマリン「オレがラピスラズリに……気づかなかつたら……  
クリスタルがケガしていた……よっ……ぐっ！ ああ……はあ  
っ……」

アクアマリンは地面に倒れ込んだ。

クリスタル「アクア……マリン……くっ、ああ！ うあああああ

あ  
「！！」

倒れ込んだアクアマリンの前にひざを付いてクリスタルは叫んだ。

希羅「そんな・・・何で・・・」

ラピスラズリ「けっ！外したか・・・だが次は、はずさねえぜ？」

クリスタル「貴様あ！！ラピスラズリィッ！」

この事態がさらなる物語を紡ぎだす！

次回 重傷を負ったアクアマリン、ラピスラズリをうらむクリスタル、逃走者たちはアクアマリンを救う事を手伝うのか・・・それと

もゲーム時間をもどすためにミッションへと向かうのか・・・

命の恩人・助け合い・涙・仲間・団結・信頼

この言葉の意味あなたはどの理解しますか？

第21話 ミッション発動！逃走者たちの屈辱（後書き）

なあ、クリスタル。

お前覚えているか？

オレとお前が親しくなった時の事。

オレが公園で座っていたらお前が話しかけてきてさ。

あの時のオレはかなりのワルだった。

でもそんなオレをお前は受け入れてくれた。

それからオレは変わったのかな？多分。

まともに学校行って授業したり、バイトしたり。

お前に色々迷惑かけたな。

またお前といっぱい話したい。

でも、ムリなのかな？

クリスタル、オレどうなるのかな？

助けて、クリスタル。

そして、この街を救ってくれ。

アクアマリン重傷の後の気持ち。

## 第22話 もう迷わない（前書き）

時間が増え、賞金が減るという過酷な状況。

ミッションを成功させる逃走者はあらわれるのか？

## 第22話 もう迷わない

アクアマリンが撃たれた事を知っているのは牢獄の者と希羅。

あとの逃走者はこの事を知らない。

クリスタル「アクアマリン・・・」

アクアマリンはちかくにあった病院へと運ばれていった。

しかしその病院はラピスラズリの部下から殴られたり蹴られたりしてケガを負った住民で満員だった。

クリスタル「こんなに人が多くては……くそっ！どうすれば」

アクアマリン「クリスタル……はあっ……住民と逃走者たちの所にもど、りなよ……ラピスラズリを、これ以上……ほっとく訳には……いか、ない……」

クリスタル「何を言ってるのだ！お前は・・・」

アクアマリン「お前にも・・・聞こえただろう・・・ラピスラズリが自分の過去を、逃走者たちに・・・大声で、語った・・・時の、事を・・・」

クリスタル「そうだが・・・」

アクアマリン「昔みたいになた・・・ラピスラズリがお前を・・・慕ってたころの様に」

アクアマリンは涙を流していた。

アクアマリン「ありが……とう、クリスタル……」

アクアマリンは病室に運ばれていった。

クリスタル「アクアマリン……！お前からこんな強い勇気をもらうとはな」

クリスタルは走りだした。

希羅「ちきしょう・・・」

牢獄の前で希羅がうなだれていた。

陸我「希羅！この状況を他の逃走者に知らせた方がいいんじゃないの？」

希羅以外の逃走者はアクアマリンが重傷を負ったことやそれがクリスタルの元秘書のラピスラズリの仕業だとは知らない。

希羅「そうだな・・・分かった」

希羅はメールを打ちはじめた。

しかし・・・

近くにハンター・・・

陸理「逃走中って何かただの・・・逃げるゲームじゃない感じね、  
ん？ちよ！あれっ！」

陸理がある方向を指した。

その方向からハンターが走ってきた。

陸我「希羅！逃げて！！」

希羅「うわっ！マジかよ・・・せっかくメール打ってたのに」

希羅は走りだし、路地裏へと逃げ込んだ。

そして曲がり角をまがっていった。

希羅「はあっ……あっぶねえー」

うまくなかったようだ・  
・  
・

希羅はメールの続きを打ち他の逃走者たちに一斉送信した。

リリリリリ

孫策「何だ？ミッシヨンの結果か・・・？いや？メールだ」

龍義「希羅からだ！」

月英「クリスタルの友人のアクアマリンが撃たれて病院に運ばれた！しかも撃った奴はラピスラズリだ」

諸葛亮「ラピスラズリは昔親に捨てられてクリスタルがかわりに育

てたんだ！それなのにその恩をわすれてクリスタルを利用してアクアマリンを撃ちやがった・・・ほう、それは大変ですね」

姜維「だからラピスラズリをこれ以上ほっとく訳にはいかない！オレもミッションに向かつてるから、だれかミッションと一緒に向かってくれ・・・か」

逃走者たちは希羅から送られたメールを見て様々な思いを巡らせた。

濃姫「面倒ね・・・あなたどうする？」

メールを見た濃姫が信長に言った。

信長「うむっ・・・時間が増えるのであれば逃げきるのは難しい・・・か」

しかしこの夫婦の近くにハンター・・・

濃姫「あなた！ハンターよ」

信長「濃よ・・・先に逃げろ」

そう言つと信長は濃姫を押した。

濃姫「きゃっ！あなた・・・」

戸惑いながらも濃姫は近くにあつた建物へと隠れる。

信長「この魔王を捕まえる・・・か」

ポンッ

織田信長確保

残り26人

希羅「ちくしょう・・・」

ミッションに行に向かってる希羅。

他の逃走者たちもミッションへと向かっていた。

龍義「やっぱり逃走中ってすげえ・・・物語がこまけえな」

希羅からの長文メールを見ていた龍義。

龍義「行くしかねえだろ！このままじゃゲームがおわらねえしな」

ミッションへ向かう龍義。

増えた時間 6分15秒

ゲーム残り時間 2 分 3 5 秒

政宗「うむっ・・・ミッションか」

建物の陰に隠れる政宗。

政宗「よしっ・・・行ってみるか」

初めてのミッションだ。

阿国「なんや、えらいミッションやなあ」

サファイアパークの中でメールを見ていた阿国。

阿国「ミッションは危険やわ・・・もう少し様子を見まひよか」

どうやらミッションへは向かわないようだ。

孫市「くそっ！なんちゅーミッションだよ・・・でも行かねえとな」

パーティー会場へと向かう孫市。

幸村「お館様や三成殿と兼続殿のためにも・・・ミッションを成功させなければ」

正義感の強い幸村はミッションへと向かう。

濃姫「ここまできて捕まりたくないわ・・・ミッションは任せましょう」

清盛「ここはまかせよう」

劉備「ミッションに向かいたいが・・・ここからじゃ遠いな」

人にまかせる逃走者もいた

趙雲「よし行こう！このままじゃだめだからな」

諸葛亮「月英・・・私はミッションに行きますがどうします？」

月英「孔明様を1人で行かせる訳にはいきません！私も共に参ります」

そして逃走者がミッションへ向かうなかで物語は動いていた。

次回 ミッションの結果とクリスタルがラピスラズに提案した事とは・・・

第22話 もう迷わない（後書き）

逃走中の放送から一ヶ月経とうとしています。

はやいなあ・・・

## 第23話 クリスタルの提案（前書き）

クリスタルとラピスラズリの会話とミッションに奮闘する逃走者たちをご覧ください！

## 第23話 クリスタルの提案

クリスタル「大丈夫か？こっちだ」

住民の肩を支えながらクリスタルは安全な場所へ住民を移す。

ラピスラズリ「何してんだ？邪魔すんなよ」

クリスタル「こんな事・・・もうやめるんだ」

ラピスラズリ「あんたがオレの計画にのったのはさ、じ・じ・つな  
んだしな？」

クリスタル「ち、違う！私は・・・そんな！」

ラピスラズリ「まあ、お前が計画に乗ろうが乗るまいがオレはあ  
んたを利用してただけだな！」

ラピスラズリの笑い声がクリスタルタウンに響く。

クリスタル「ラピスラズリよ．．．ひとつ賭けをしないか？」

ラピスラズリ「はっ？」

クリスタル「賭けだ！」

ラピスラズリはクリスタルを見ながら言った。

クリスタル「私とお前の命を賭けて勝負だ！」

この言葉にラピスラズリや牢獄の者たちが驚く。

陸我「だめだよ！クリスタルさん」

兼続「そんな事はしてはならぬ！」

しかしクリスタルは話を続けた。

クリスタル「どうだ？ラピスラズリ」

ラピスラズリは考え込む。

そしてニヤリと笑いクリスタルを見た。

ラピスラズリ「面白そうだし、その勝負つけるよ」

クリスタル「そうか・・・」

ラピスラズリ「もし、オレが勝つたらどうするよ？」

クリスタル「っ！それは・・・お前の召し使いになってこの計画に協力する！でも、お前が負けたらこの計画をやめてクリスタルタウンからでて行くんだ！」

ラピスラズリ「けっ！マジで言ってるのかよ」

クリスタル「ああ！男に、二言はないさ」

ラピスラズリ「あっ、そうでさ、どこで勝負すんの？」

クリスタル「パーティー会場だ」

ラピスラズリ「パーティー会場・・・！？」

クリスタル「どうだ？」

ラピスラズリ「わ、分かったよ・・・」

そしてクリスタルとラピスラズリはパーティー会場へと向かった。

政宗「はあっ・・・パーティー会場は」

ミッションへと向かう政宗

幸村「あつ、政宗殿！」

そこへ幸村が合流。

政宗「幸村か！パーティー会場はどのあたりじゃ？」

幸村「ここから真つすぐ行けばパーティー会場です！護衛します」

政宗と共にパーティー会場へと向かう幸村。

しかし・・・

近くにハンター・・・

幸村「ほら、あそこです！政宗殿」

前を指す幸村。

政宗「ほう、けっこう立派な建物じゃな・・・わっ！」

その時横からハンターが走ってきた。

幸村「政宗殿！このままパーティー会場まで走ってください！」

政宗「えっ・・・ちょ！わぁっ」

しかし幸村に押されて政宗は前にでた。

政宗「くっ……幸村！捕まるでないぞ」

パーティー会場へ走る政宗だが……

別のハンターに見つかってしまった。

政宗「くそ！捕まってたまるか」

そのまま真つすぐパーティー会場へ走り続ける政宗。

それを追うハンター。

幸村「政宗殿・・・頼みました」

ポンッ

真田幸村確保

残り25人

そしてパーティー会場へと着いた政宗。

政宗「しかし・・・しつこいな！ハンター」

パーティー会場の中に入りタイマーの元へ走る政宗。

しかしハンターは政宗を追った。

増えた時間 15分24秒

ゲーム残り時間29分51秒

政宗「うおりゃああー!」

タイマーのもとにジャンプして着地をする政宗。

そしてタイマーに繋がっている砂時計を元の状態にひっくり返す。

政宗「はあっ・・・成功か?」

腕に付けているゲーム時間が表示されている画面を見た。

ゲーム時間が残り29分55秒から動いていた。

そしてハンターは政宗の元へ駆け付けた。

ポンッ

伊達政宗確保

残り24人

政宗「頑張って逃げるのだぞ・・・みな・・・」

政宗は床に膝を付いたのだった。

次回 ついにクリスタルがラピスラズリと勝負をはじめる！



## 第23話 クリスタルの提案（後書き）

物語もそろそろ完結？いやまだかな・・・

第24話 いざ勝負！（前書き）

指令室にいたゲームマスター。

ゲームマスター「面白くなってきたな・・・ん？」

幹部からの連絡が入った。

幹部「ごきげんよう！ゲームマスターさん・・・」

ゲームマスター「あっ、はい・・・」

幹部「私のご主人様も楽しんでるわ、この調子で頑張っ  
てねえ」

ゲームマスター「はい！」

幹部「それじゃあね」

幹部の連絡はそこでとぎれた。

ゲームマスター「ふう・・・」

ゲームマスターはあるものをポケットから出した。

ゲームマスター「何してるんだろっな・・・」

ペンダントの中にある写真を見ながら言った。

そこには美しい女性が写っていた。

ゲームマスター「仕事しなきゃ・・・」

ペンダントをしまい画面に向き直った。

## 第24話 いざ勝負！

ピリリリリリリ

孫策「何だ？ ミッションの結果・・・」

劉備「伊達政宗の活躍によりゲーム時間がもとに戻った」

そしてもう一通のメールが届いた。

凌統「伊達政宗確保！？うそだろ・・・ミッション成功させた人なのに」

趙雲「ミッションを成功させて捕まるとは、格好いいことしてくれるな」

そのころパーティー会場に着いたラピスラズリとクリスタル。

パーティー会場の中へ入り辺りを見る。

クリスタル「ラピスラズリあのタイマーは何だ？」

ラピスラズリ「ああ・・・逃走者の逃げてる時間だ」

クリスタル「そうか・・・」

ラピスラズリはクリスタルに剣を渡した。

クリスタル「なっ！どうしたのだ、この剣は？」

ラピスラズリ「武器庫から持ってきたんだよ」

ラピスラズリはクリスタルに剣を向ける。

クリスタルが構えた。

ラピスラズリ「さあ・・・勝負だ」

クリスタル「ああ！」

そしてパーティー会場でクリスタルとラピスラズリの戦いはじまった。

ほう統「ミッションクリアしたのはいいけど、あと30分以上はあるねえ」

魏延「我・・・コノママ逃ゲル」

建物の陰に隠れているほう統と魏延。

しかし・・・

ハンター・・・

ほう統「あれは・・・まずいねえ、ハンターだよ」

そうほう統に促されて魏延も別の方向へと走る。

魏延「グッ!？」

しかし別のハンターに見つかってしまった。

ほう統「かなり速いねえ・・・あつしも限界かもね?」

2体のハンターに追われる魏延とほう統。

魏延「我、コツチニ逃ゲル」

そう言つて曲がり角をまがる魏延。

ほう統「あつしもこつちに逃げるかね」

そしてほう統は建物の中にはいった。

一方、パーティー会場では

激しくぶつかる金属音。

クリスタル「くっ！なかなかやるではないか」

ラピスラズリ「余裕をぶっこいてるひまはねえぜ？」

クリスタルは街を守るため

ラピスラズリは一番になるため

それぞれ思いはどのような物語をつむのか

次回

クリスタルとラピスラズリの勝負は意外な方向へ!?

第24話 いざ勝負！（後書き）

ゲームマスター「はぁ・・・大丈夫かラピスラズリ」

ラピスラズリとクリスタルの勝負を見ながらゲームマスターが言った。

ゲームマスター「でもこれは・・・これで」

ゲームマスターは画面を操作しはじめた。

ハンターを1体ずつ見ていく。

ゲームマスター「あとは・・・」

ゲームマスターはある人物を調べはじめた。

月村サトシについてー

ゲームマスター「幹部にはねずに調べれば・・・」

しかしゲームマスターの知らぬ所で物語は動いていた

## 第25話　とんでん返し（前書き）

ここは幹部の指令室。

ここからゲームマスターに連絡をしている。

幹部「はあゝ暇だなあ」

画面を見ながら幹部が呟いた。

幹部「ゲームマスターさんはまだ気づいてないようね」

くすりと幹部が笑った。

幹部「見てなさいよ・・・ゲームマスターの座から追いだしてやるんだから」

幹部はそう言つとどこかへと向かった。

## 第25話　どんでん返し

クリスタル「はああ！」

ラピスラズリ「うらああっ！」

響く声とキーンとなる高音

クリスタル「いい加減諦めたらどうだ？」

ラピスラズリ「誰が！お前を倒すまでだ」

キン！ガキン！

一方、逃走者たちは・・・

ほう統「なんとかまいたねえ」

建物内にいるほう統は物置部屋へとはいった。

ほう統「ここなら隠れてられるねえ」

しかし・・・ハンター・・・

ほう統「おっと・・・？」

隠れている部屋にハンターがはいってきた。

ほう統「困ったねえ・・・捕まりたくはないんだがね」

しかしハンターに見つかってしまった。

ほう統「わっ！こりゃたまげた」

ハンターの速さに驚くほう統。

ポンツ　ほう統確保

残り23人

そのころハンターをうまくまいた魏延はふれあいひろばにいた。

魏延「我・・・コノママ逃ゲキル」

地図を見ながら呟く魏延。

だが・・・

魏延「ウガッ!？」

ほう統を確保したハンターに見つかってしまった。

魏延「ヤバイ・・・グアッ!」

ポンッ  
魏延確保  
残り22人

そのころパーティー会場・・・

クリスタル「この青二才が！」

ラピスラズリ「うるせえ！くそじじい」

パーティー会場で戦うクリスタルとラピスラズリ。

ラピスラズリ「うおりゃあ！」

クリスタル「ぐっ！？しまっ・・・」

クリスタルの剣がラピスラズリによって弾きとばされた。

ラピスラズリ「どうしたよ？年のせいか！このっ！！」

ラピスラズリがクリスタルに剣を向けた時だった。

ラピスラズリ「・・・・・・・・っ！」

クリスタル「なっ、何だ？」

ラピスラズリとクリスタルに光があてられた。

男「ラピスラズリよ！お前はこの街を部下をつかって自分のものにしようとしたらしいな！確保する！」

ラピスラズリ「おい！お前らなんだよ」

男「警察だ！機動隊もいるおとなしくしてろ」

クリスタル「でも、なぜここに・・・」

男「住民からの通報があつた！」

ラピスラズリ「くそっ・・・クリスタル！勝負はおあずけだ」

そう言つて警察に何かを投げつけた。

クリスタル「ラピスラズリ！ゲホッ・・・何だこれ！けむり玉か・・・」

・  
」

けむりがパーティー会場にひろがった。

男「おい！ラピスラズリは」

ラピスラズリは外にでて逃げた。

男「くそっ！逃がしたか、追えっ！捕まえるんだ！」

警察と機動隊はパーティー会場をでていった。

クリスタル「ラピスラズリお前は・・・」

クリスタルはパーティー会場のなかでつぶやいた。

ラピスラズリ「はぁっ・・・なんで邪魔がはいるんだよ」

ラピスラズリは部屋へと戻った。

ラピスラズリはパソコンの方を向きある人物に連絡をした。

ラピスラズリ「はっ、ゲームマスター様・・・聞こえますか？」

ゲームマスター「ん？ラピスラズリか」

ラピスラズリ「はいっ！け・・・警察や機動隊が」

ゲームマスター「ああ、モニターで見てたさ」

ラピスラズリ「どうすれば・・・オレは一番になれるんですか？」

ゲームマスター「ラピスラズリよ、この状況は厳しいけど私はいま忙しいから」

ラピスラズリ「えっ？そんな・・・あのっ」

ゲームマスター「また後で連絡するから」

ラピスラズリ「待って下さい！せめて何か提案を・・・」

連絡はそこで途ざれた。

ラピスラズリはその場に膝を付いた。

ラピスラズリ「なんか・・・オレみじめだな・・・」

この部屋にくるまでの見てきた光景。

部下が警察や機動隊に押され捕まえていた。

なかにはラピスラズリに気づき助けを求める部下もいた。

部下よりも機動隊の方が数が多い事に気づいた。

勝てる計算など思い付かなかった。

ラピスラズリ「いや・・・まだだ」

ラピスラズリは立ち上がった。

ラピスラズリ「オレは諦めねえ」

そう言っているとラピスラズリは身を隠すようにコートを着て部屋をでて行った。

次回

逃走者のたすけとなるミッション！

## 第25話　どんでん返し（後書き）

ゲームマスター　月村サトシ

逃走中を創り、ハンターという高性能のマシンを作った人物。

ゲームマスター「私は月村サトシをモデルにしてつくられた・・・  
幹部がそう言ってたな」

ゲームマスターは月村サトシに関与するデータを集めはじめた。

幹部「なーにしてんのかなあ？」

ゲームマスター「って!？」

ビクツとしたゲームマスターは変な声をだした。

幹部「何で月村サトシの事調べてんの？」

ゲームマスター「それは・・・」

幹部「部屋の隅を見てください」

幹部に言われてゲームマスターは部屋の隅にありつた。

ゲームマスター「なっ、何だ！これは」

幹部「気づかなかったのね？意外」

そこにはいくつものカメラが置いてあった。

幹部「外れないようにしっかり固定してあるから、あんたの行動は全部おみとおしよ」

ゲームマスターは幹部の笑い声をただただ聞いていたのだった。



## 第26話 ミッションアイテム（前書き）

自分のおかれている状況を知ったゲームマスター。

ゲームマスター「なんでカメラなんか設置するんだ！」

幹部「ちょっと誰に口きいてんの、ご主人様に言っわよ？生意気な態度をとったって」

ゲームマスター「でも監視じゃないか！こんな・・・」

幹部「ああ、もう！うるさい！！」

幹部が叫んだ。

幹部「あんたは言う通りにゲームを盛り上げればいいの！観客だつて楽しんでるじゃないの」

また幹部が笑った。

幹部「くれぐれも変なまねしないように、じゃ！またね」

ゲームマスターは立ちつくしていた。

ゲームマスター「くっそ・・・」

拳をつくり地面をなぐる。

その光景も幹部に見られていた。

## 第26話 ミッションアイテム

ピリリリリリリ

メールだ。

孫策「何だ？ミッション・・・げっ！」

劉備「何々・・・住民からの通報により警察と大勢の機動隊がラピスラズリを捕らえようとしている」

趙雲「機動隊がラピススズリの部下を押さえている内に3人のラピススズリの部下がエリアにちらばり逃げている」

阿国「ラピススズリの部下を捕まえ警察のところまで連れていけば便利なアイテムがもらえる」

太忠茲「ただしもらえるのは3人まで」

濃姫「早い者勝ちだ・・・なお、このミッションは残り15分まで」

MISSION アイテムを手に入れる！

ラピスラズリの部下3人がエリアで逃げている。

ラピスラズリの部下を捕まえて警察の所までつれていけば逃走者に  
役立つ便利なアイテムがもらえる。

孫市「じゃあ！逃げ延びるためにてに入れるか！」

エリア内に逃げているラピスラズリの部下を探しに行く孫市。

夏侯惇「ふっ……アイテムなどなくても自力で逃げてやるわ」

夏侯淵「でもよ、行く価値はあると思っぜ？ 惇兄」

ミッションの話をしている夏侯惇と夏侯淵。

しかし・・・近くにハンター・・・

夏侯淵「オレは行くぜ！惇兄、捕まんなよ」

夏侯惇「淵もな・・・うおっ！」

ハンターに見つかった2人

夏侯淵「ちくしょ！せつかくミッション行こうとおもったのによー  
」！」

ハンターが視界にとらえたのは・・・

夏侯淵「うおー！？」

ポンツ      夏侯淵確保      残り      21人

夏侯淵「ちくしょっ！つ！惇兄！逃げてくれっ！」

その場に座り込む夏侯淵。

夏侯惇「くそっ！」

曲がり角をまがって夏侯惇は走り続けた。

次回 ミッションに向かう逃走者たち！

## 第26話 ミッションアイテム（後書き）

ゲームマスター 月村サトシをモデルにして作られた。

この逃走中を盛り上げ観客をたのしませた。

だが私は監視されていた。

幹部とそこにご主人様と呼ばれる人物がいる。

私はその人たちに見張られている。

ゲームマスター「ミッションは・・・向かっているやつはいるな・・・」

ゲームの状況を確認するゲームマスター。

幹部「ねえ！」

ビクッ

ゲームマスター「はっ、はい・・・」

幹部「気になってたんだけどさぁ・・・あなたがもっているペンダントって何なの？」

ゲームマスター「あっ・・・」

たしかにペンダントをとりだした時にすでに監視されていた。

監視されていて見られたんだ。

幹部「ねえ！何なの？」

ゲームマスター「私の・・・その・・・」

幹部「じれたいわね！」

ゲームマスター「お守りです・・・」

幹部「はっ？へっ、そうなんだ・・・」

ゲームマスター「では引き続きミッションをみてますので・・・」

幹部「分かつわ、あんたは私にさからえない・・・からね？」

そう言って連絡は途ぎれた

ゲームマスターはマイクの所に行き観客たちに向かって状況の解説をした。

## 第27話 向かう勇氣（前書き）

久々の更新！

## 第27話 向かう勇氣

夏侯惇「ラピスラズリの部下って奴を探すか」

ハンターをまいて夏侯惇はラピスラズリの部下を探しはじめた。

張こう「ラピスラズリの部下はどこなのでしょう」

ここまであまり登場していない張こう。

張こう「ここは活躍して私の美しさを知らしめましょうか！」

美意識は人一倍ある。

しかし・・・ハンター・・・

そのことに張こうは気づいていない。

そして曲がり角をまがった時に・・・

張こう「あら？」

ポンツ 張こう確保 残り 20人

張こう「私は・・・ここまで逃げ延びたというのに・・・」

ハンターは張こうを確保したあと別の逃走者を見つけた。

阿国「いやあ〜！」

女禍「くっ……！逃げるぞ」

ふたてにわかれた阿国と女禍。

ハンターが視界にとらえたのは……

女禍「くそっ！なぜ私を追うのだ！？」

逃走者だからだ。

女禍「ああ！」

ポンッ 女禍確保 残り19人

女禍「仙人は全員捕まったか・・・」

一方、ラピスラズリを探している逃走者たちは・・・

孫市「ん？あれは・・・」

いかにも怪しい男を見つけた孫市。

孫市「てんめえ・・・ラピスラズリの部下か！？」

部下「ひいっ！わあ」

孫市「あつ待て！やっぱりかあー！！」

孫市はラピスラズリの部下を追った。

孫市「オレから逃げられると思うなよ！」

部下に追いついた孫市はまわし蹴りをかました。

部下「ぐわあ!？」

まわし蹴りをくらった部下

気絶した。

孫市「よし、行くか」

部下を肩に抱えて孫市は歩きはじめた。

夏侯惇「どこだ・・・ラピスラズリの部下は」

ラピスラズリの部下を探す夏侯惇。

部下「うぁっ!?!」

曲がり角をまがった時に夏侯惇がラピスラズリの部下を見つけた。

夏侯惇「お前っ!ラピスラズリの部下か?」

部下「そうだけどうぁーっ!」

正直に言って逃げようとするが・・・

グイッ

夏侯惇「そんじゃ、行くぞ」

部下「ひいゝわぁっ！」

夏侯惇は部下を引きずりあるいて行った。

阿国「まだ誰もミッション成功してまへんな」

エリアを歩きながら移動する阿国。

そこにハンター・・・

阿国「住民ケガしてますなあゝ大丈夫やるか？」

ハンターは阿国を見つけて走りだす。

阿国「ミッションした方がよろしいやるか？きやつ！」

ハンターに気づいた阿国。

阿国「捕まんのいやー！慶次様〜！」

ポンツ 阿国確保 残り18人

一方、ラピスラズリ。

ラピスラズリ「はあっ・・・ちくしょ」

警察や機動隊の背後をつきラピスラズリはある場所へとたどり着いた。

ラピスラズリ「ちっ・・・諦めるかよ、まずは逃走者から・・・はあっ」

とある建物に入ったラピスラズリ。

ラピスラズリ「へっ・・・ここだ」

部屋のドアをあけて中に入った。

そして本棚をあさる。

ラピスラズリ「えっと・・・あっ、これが・・・」

ラピスラズリは一冊の本をとりだした。

その本は力を手に入れるための魔法の本だった。

ラピスラズリ「もうこれに頼るしかねえ・・・」

その本を持ってラピスラズリは部屋をでて行った。

次回 ミッション成功者あらわる！



## 第27話 向かう勇氣（後書き）

ラピスラズリ「まだ・・・オレは負けねえ・・・」

何度もそう呟きながら走りつづける。

一番という欲望を持った者が――

第28話 ラピスラズリの部下を探す逃走者たち（前書き）

???「ゲームマスターの様子はどうか？」

幹部「はっ、ミッションをだして逃走者たちを監視しております」

???「そうか、やつは気づいたのか？」

幹部「はい？」

「???」自分が監視されていることに「

幹部「はい、監視のことはゲームマスターも気づいています」

「???」では引き続きゲームマスターのこと・・・たのんだぞ」

幹部「承知、ご主人様」

第28話 ラピスラズリの部下を探す逃走者たち

孫市「えっと・・・あの人たちかな？」

警察と機動隊の人たちを見つけた孫市。

秀吉「おっ！孫市じゃあ」

三成「そのようですね」

稲姫「たくましい所もあるんですね」

牢獄の者たちが口々に言った。

男「ん？何だ、お前は」

孫市「ほら！こいつだろっラピスラズリの部下ってのは」

気絶した部下を地面にドサツと投げた。

男「おおっ！すまん、お礼にこれをやろう」

警察の男はある物を孫市にわたした。

孫市「何だ？これ」

男「住民から聞いたのだがお前たちは逃走中というゲームでハンターに追われているのだろう、それでこれは網鉄砲というのだ」

孫市「そんで、どう使うんだ？」

男「下の紐を引っ張るのだそうしたら網が前にでてくる、これをハンターという奴に向かってはなつんだ」

孫市「なるほどな」

男「くれぐれも焦らんで無駄にしないようにな」

孫市「分かった、ありがとよ」

雑賀孫市 網鉄砲獲得

夏侯惇「ん？ここか」

そして夏侯惇が着いた。

男「おお！お前も協力してくれたのか」

夏侯惇「ああ、こいつだろ」

ラピスラズリの部下を警察の男の前に置いた。

そして警察の男は夏侯惇に網鉄砲の使い方教えた。

夏侯惇「これは便利な物をてにいったな」

夏侯惇 網鉄砲獲得

男「あと1人捕まればいいのだが・・・」

これでラピスラズリの部下はあと1人。

ゲーム時間残り18分。

誰がラピスラズリの部下を見つけるのか！

次回 ミッションと逃走者たちの連続的な確保！

第28話 ラピスラズリの部下を探す逃走者たち（後書き）

逃走中は参加するのと同じや違うらしい

## 第29話 主の想いそして（前書き）

月村「何？私をモデルにして造られた奴がいる？」

望月「はい、外部からの情報です」

ここは別の世界にあるクロノス社という場所。

助手の望月ミレイは前の男にそう言った。

望月ミレイの前にいる人物こそが月村サトシ。

この世界のゲームマスター

月村「そいつはどこにいるんだ？」

望月「そこまではまだ・・・」

月村「そうか・・・」

月村サトシは望月ミレイに言った。

月村「そいつの事について情報を調べる」

望月「では私も手伝います」

月村「すまないな、手をわずらわせる事を」

望月「いえ・・・」

月村サトシが画面の方を向いてる時に望月ミレイが怪しく笑った。

## 第29話 主の想いそして

そのころエリアを移動する孫策たち。

凌統「便利なアイテムか・・・」

太忠茲「行く価値はあるのでは？」

孫策「そうだな・・・よし！行くか」

ミッションに向かう3人。

しかし行く先にハンター。

凌統「うわっ！ハンター」

太忠茲「こんな時に・・・分かれて逃げよう！」

孫策「分かった！2人とも捕まんなよ」

しかし・・・

孫策「うおっ！しまった、へりがいたんだ」

右にまがった孫策が上を見て言った。

凌統と太忠茲は左にまがった。

孫策はへりに見つかり凌統と太忠茲は逃げ続ける。

凌統「げっ！？」

太忠茲「うわっ！」

へりの通報で動いた3体のハンターに凌統と太忠茲が見つかった。

孫策「マジかよ！？逃げろ！太忠茲！凌統！っ！」

ハンターが視界にとらえたのは・・・

太忠茲「うおっ！？」

凌統「太忠茲さん！？」

ポンッ 太忠茲確保 17人

凌統「くそっ・・・どうすりゃいいんだよー！」

ポンッ 凌統確保 残り16人

孫策「うそだろ・・・また仲間が」

とぼとぼと歩いていく孫策の前にある人物が現れた。

孫策「あれっ・・・お前？」

部下「ひいっ！」

ラピスラズリの部下だ。

孫策「まてっ！お前・・・もしかして」

走るラピスラズリの部下に孫策は追った。

孫策「待てって言うてんだろー！」

後ろからラピスラズリの部下にドロップキックをくらわす。

部下「ぐはぁー！？」

地面にドサッと倒れて気絶した。

孫策「もしかしてこいつがラピスラズリの部下か？」

ラピスラズリの部下を孫策はひきずった。

趙雲「劉備殿・・・どうしますか」

劉備「へたにうごくと思つかる・・・このまま隠れておこつ」

建物の中に隠れている趙雲と劉備。

しかし建物内に搜索しているハンターが劉備たちに接近。

劉備「趙雲どうした？」

趙雲「しっ……足音がきこえます」

劉備「ハンターか？」

趙雲「おそろく……」

足音をききながら、うまくやり過ぎそうとする趙雲と劉備。

しかし・・・

趙雲「うわっ！」

劉備「くっ！」

2人が隠れている部屋にハンターがはいつてきた。

趙雲「くっそ・・・逃げ場がない！」

劉備「諦めるな！趙雲、私がおとりになるからその隙に・・・」

そう言っていると劉備はすばやく横に動きハンターを引き付けた。

部屋のいり口へ続くわずかな隙ができた。

趙雲「劉備殿・・・あなたの思い、無駄にはしません」

部屋から趙雲はすばやくでて行つた。

ポンッ      劉備確保      残り15人

劉備「はあっ・・・頼んだぞ、趙雲」

そして建物からでた趙雲はふれあいひろばの辺りに隠れた。

次回 師匠と弟子の想い

第29話 主の想いそして（後書き）

逃走中の放送は10月9日らしいですよー

### 第30話 師の言葉その時弟子は（前書き）

月村「なぜ君が・・・」

月村サトシは前に立っている望月ミレイに向かって言った。

望月「幹部からの命令よ・・・」

英雄たちの逃走中が行われていた同じころ。

クロノス社ではある事態がおきていた。

月村サトシの助手をしていた望月ミレイが月村サトシを裏ぎったのである。

月村「私をモデルにして造られた奴の事を一緒に調べてくれるんじゃないかったのか？」

望月「ええ、その事については興味はあったわ」

月村「じゃ・・・なぜ？」

望月「なぜ？　なんだか面倒だなあって思っちゃったの」

髪を手でかきあげながら望月ミレイは言った。

望月「それに幹部は私を上の方に上げてくれるって言うてくれたわ」

月村「そんな・・・幹部が・・・君は何を吹き込まれたんだ？」

望月「そんなのあなたには関係ないでしょ」

望月ミレイは月村サトシを見た。

望月「つまらないのよ、あなたは」

そう一言月村サトシに言いはなった。

その時だった。

望月「なっ、何!？」

扉があいて複数の男が望月ミレイに向かって走った。

男「望月ミレイだな、月村サトシが監視している逃走中をいろいろと妨害し、助手でありながら月村サトシを裏ぎったとの報告があった!」

望月「ちよっ！何のことよ・・・いやぁ！はなしてえっ！」

男たちが望月ミレイをとり押さえた。

男「幹部からの報告だ、ばれてないと思ったのかも知れないが幹部にはおみとおしだ！クロノス社はそんなに甘くはない」

望月「幹部が！？何を言ってるのよ！私は幹部から月村サトシを裏切るように・・・」

男「訳のわからん事を言うな！こいつを連行しろ！」

望月「いやああー！はなしてえ・・・ぐっあ!？」

騒ぐ望月ミレイの腹を男が殴りそのまま望月ミレイをひきづりつれていった。

月村「何だったんだ・・・」

月村のなかに様々な思いが過ぎる。

望月ミレイは私を裏ぎる様に言われたー？

幹部にー？

何がなんだかさっぱりだー

そんな事を思いながら月村サトシは画面へと向き直った。



### 第30話 師の言葉その時弟子は

孫策「ハアッ、こいつ重えよ・・・」

ラピスラズリの部下をひきづりながら警察の所についた孫策。

男「ん？お前は」

孫策「あんだ、けいさつ・・・？だっけ、ほら！こいつじゃねえの

か  
」

警察の前にラピスラズリの部下を置いた。

孫策「うおっ、時間ギリギリ」

ここでゲーム残り15分になった。

男「おおっ！これで全員つかまえたぞ、協力ありがとな！これはお礼だ」

孫策「何だ？これ」

男は網鉄砲の使い方を孫策に教えた。

孫策「おっ！すげえな、ありがとよ」

そう言つと孫策は走って行った。

孫策  
網鉄砲獲得

雜賀孫市・夏侯惇・孫策ミッシェンクリアー

ピリリ

希羅「何だ・・・？ミッションの結果だ」

月英「雑賀孫市・夏侯惇・孫策の活躍により逃げだしたラピスラズ  
リの部下を捕まえ、網鉄砲を手に入れた」

諸葛亮「もう少しで逃げきりますね・・・」

しかし・・・ハンター・・・

姜維「あっ！」

諸葛亮「これは姜維、そちらにハンターはいましたか」

月英「孔明様！後ろ」

叫ぶ月英、諸葛亮が後ろを向いた。

諸葛亮「っ！私としたことが・・・」

月英「そんな・・・ここまできて、孔明様ー！」

しかしハンターは1人ではなかった。

姜維「月英様！前からハンターが・・・」

前と後ろ両方からハンターが走ってきた。

月英「はさみうち・・・ですか」

その時、諸葛亮が姜維と月英の前にでた。

姜維「ちよっ・・・何してるんですか」

月英「孔明様！」

諸葛亮「何をしてるんですか！逃げなさい」

姜維「でも！私にはできません・・・」

諸葛亮「では何のためにここまで逃げてきたんですか！姜維！！」

諸葛亮がさげんだ。

姜維「それは、あなたに立派な弟子と認めてもらうためです・・・  
このゲームを逃げきって」

諸葛亮「あなたは立派な弟子です・・・月英をつれて逃げなさい！  
ここで捕まるあなたではないでしょう！」

姜維「ぐっ、は、はい・・・」

月英「孔明様・・・ちょ！姜維！！」

姜維は月英の手をひき走りだした。

ポンツ 諸葛亮 確保 残り14人

姜維と月英は建物の陰に隠れた。

月英「姜維！あなたって人は！！」

姜維「しっ！そんなに大声だとハンターに見つかりますよ」

しかし・・・

ハンター・・・

月英「見つかるも何も・・・はぁ・・・孔明様」

姜維「月英様・・・あっ！」

ハンターが姜維と月英に向かって走る。

月英「ハンター！？」

姜維「げっ、月英様！！」

月英「くっ・・・逃げなさい！姜維・・・」

姜維「そんな！？月英様ー！」

姜維が月英に向かい手をのばした時にはハンターは月英にふれようとしていた。

次回      新たなミッション！

### 第30話 師の言葉その時弟子は（後書き）

英雄たちの逃走中と同時進行するクロノスの世界での月村サトシの話と月村サトシのモデルの者の話は第2弾でも続くと思います！

第31話 ラピスラズリ究極の秘策（前書き）

これからよろしくお願いします！あはっ

第31話 ラピスラズリ究極の秘策

姜維「月英様あー！」

ポンッ 月英確保 残り13人

月英「何してるの！逃げなさい！！姜維・・・」

姜維「何で・・・月英様まで」

姜維は月英の言葉におされ走りだした。

清盛「うむ・・・捕まるペースが速いな」

孫策「まだ10人以上いるんだ・・・オレたちが勝つみこみはあるさ」

濃姫「私がつかまっただとしても・・・だれかが逃げきるわ」

しかし逃走者たちは―

ラピスラズリ「はぁっ・・・この辺りか」

あの男のー

ラピスラズリ「へっ、見てろよ！部下が捕まったとしてもオレは諦めるかよ」

おそろしさを知らなかったー

ラピスラズリは人通りの少ない場所にいた。

そして部屋から本を持ってきてその本を握りしめていた。

ラピスラズリ「もうこれしか・・・ねえんだよ」

本を見ながら地面に何やら書きはじめた。

それは魔法陣だった。

ラピスラズリ「まずは時間を調節できるやつからと・・・」

そして意味しんな言葉を唱えるラピスラズリ。

その言葉の後に魔法陣がひかりだした。

ラピスラズリ「ふっ、はっあはははははっ  
」

笑いだしたラピスラズリ。

このラピスラズリの魔法によりー

再び逃走者が追い込まれるー

ほう徳「さて・・・あと10分か」

濃姫「そうね、逃げきつたも同然ね」

しかし・・・近くにハンター・・・

ほう徳「むっ、濃姫殿！ハンターが」

濃姫「ちよっ・・・冗談でしょ!？」

走りだす濃姫とほう徳。

ほう徳「ぬっ!しまっ・・・」

ハンターは視界にほう徳をとらえた。

濃姫「ちよっ！何なの、あれ・・・」

ハンターの速さに驚く濃姫

ほう徳「逃げて下され！濃姫殿・・・」

ポンッ      ほう徳確保      残り12人

濃姫「はあっ・・・！」

建物のなかに逃げ込む濃姫

濃姫「もう！何なのよ・・・あのハンター」

部屋のなかで座り込んだ濃姫。

濃姫「私をかばってくれた人たちのためにも捕まりたくない！」

それは何よりも固い決意だった。

左茲「はあっ、もう少しで逃げきるな」

これまで一度もハンターに追われた事のない左茲。

左茲「せめてもう一つミッションでれば活躍できるのに……ん？」

腕に付けている時間表を見た。

左茲「時間が・・・もどつてる・・・？」

この事に気づいたのは左茲だけではなかった。

希羅「おい！時間がまたもどつてるぞ！なんでだよ！」

孫市「どうなってんだ・・・!?!」

濃姫「ちよっ・・・何よ!これ」

時間は1秒ずつもどり賞金も減っていった。

そして・・・

ゲーム残り時間30分のところまでもどり、そこから1秒ずつすすんでいった。

ピリリリリリリ

龍義「また30分からかよ・・・ふざけんなよ、って、メールだ、  
何々・・・」

慶次「ラピスラズリが魔法の力でゲーム時間を残り30分までもど  
した」

姜維「魔法の力でさらに力をつけて一番になろうとしている」

武蔵「この事態を乗りきるには逃走者全員が持っているポーチの中にある小型のレーザー銃でラピスラズリをたおせばこの街を救う事ができる」

清盛「全員か、しかしこのミッション」

趙雲「ハンターが増えるとか、エリアがせまくなるとかそういうんじゃないのか」

逃走者はこの状況にどう動くのか！

MISSION クリスタルタウンを救え！

ラピスラズリが魔法を使いこの街の一番になろうとしている。

逃走者全員が持っている小型のレーザー銃でラピスラズリに向かつてはなてばラピスラズリに勝ちこの街を救うことができる。

ただしゲームは残り30分から再スタートする。

清盛「ふっ、どうしたことが」

ミッションを見ながら清盛がつぶやいた。

しかし・・・近くにハンター・・・

清盛「とりあえずラピスラズリという奴を探すか・・・うむっ!？」

ハンターが清盛を見つけ走りだした。

ポンツ      平清盛確保      残り11人

清盛「我輩としたことが・・・」

そして清盛を確保したハンターは別の逃走者を見つけた。

趙雲「くそっ・・・見つかった！」

武蔵「やべっ！逃げようぜ」

趙雲と武蔵だ。

武蔵「趙雲！オレはこっちに行くからな」

趙雲「それじゃ私はこちらに！」

別々の道に走る趙雲と武蔵

ハンターが追ったのは・・・

武蔵「げっ！？マジかよー！」

ポンッ 宮本武蔵確保 残り10人

武蔵「ちくしょー！ミッションしたかったのによー！」

動けばハンターに見つかるリスクがたかい。

しかしそれでも逃走者はミッションへと向かうのだった。

次回  
のか  
ミッションに向かう逃走者たち！はたしてクリアできる

第31話 ラピスラズリ究極の秘策（後書き）

更新遅くなった・・・

### 第32話 走れ！ひたすらに（前書き）

???「何？クロノス社で問題があった？」

幹部「はっ、クロノス社でゲームマスター月村サトシの助手の望月ミレイが裏ぎりをおこしたと」

幹部がモニター越しにいる人物に向かって言った。

???「そうか・・・」

その人物はニヤリと笑った

「????」では引き続きゲームマスターの監視をたのんだぞ」

幹部「はい、ご主人様」

### 第32話 走れ！ひたすらに

孫策「やべっ・・・後10人だ」

走りながら確保情報を見た孫策。

孫策「ん・・・？あれは」

ラピスラズリ「一番はオレだぁー！あはぁー！！」

笑いながら魔法陣の所でおどっているラピスラズリを見た孫策。

孫策「あいつだな・・・よし居場所を知らせるか」

メールでラピスラズリの場所を他の逃走者に一斉送信した孫策。

孫策「これで・・・はあっ」

他の逃走者がくるまでラピスラズリの周りの建物に隠れた孫策。

希羅「この場所・・・オレ通ったな、行くか」

龍義「このミッションはみんな行くだろ」

孫市「よし・・・行くっきゃねえだろ」

濃姫「行かなきゃ・・・もうだれも捕まってほしくない」

慶次「ミッションクリアさせて逃げきろうかねえ！」

姜維「ここで行けなかったら後悔するかもしれない」

趙雲「ここからじゃ遠いな、でも行かないよりましか」

左慈「やれやれ、行くかの」

夏侯惇「ここまできたら行かん訳にもいかないだろうな」

こうして全員がラピスラズリの場所へと向かった。

慶次「え〜と、こっちな」

そう言いながらまがり角をまがった時だった。

夏侯惇「わっ！びっくりした」

慶次「うおっ！それはこっちのセリフだ、ミッション行くんだろ？」

夏侯惇「全員そうだとおもつがな、さてどこから行くのか・・・」

慶次は夏侯惇と合流して一緒に向かった。

孫市「うわっ！あれハンターか？」

いちはやくハンターに気づいた孫市。

孫市「あつぶねえ、別の道から行くか」

そう言って前へ走った。

慶次「おっ、孫市じゃないかい」

夏侯惇「オレたちミッションに行くが、お前も一緒にいくか？」

孫市「おっ！頼もしいぜ」

3人は一緒にミッションへ向かうが・・・

近くにハンター・・・

孫市「えっと・・・たしかこっちからだ、わっ！」

慶次「どうした孫市！うわっ、ハンターかよ」

夏侯惇「ちっ！逃げるしかないな」

孫市と夏侯惇と慶次は走った。

孫市と夏侯惇は左へまがり

右に慶次が走った。

ハンターが視界にとらえたのは

慶次「ちきしょーっ！うわ〜！」

ポンッ 前田慶次確保 残り9人

慶次「くそっ悔しい！みんな頑張れよ」

慶次を確保したハンターが別の逃走者を見つけ走りだした。

姜維と左茲だ。

左茲「ぬっ……ハンターか」

姜維「そんな！逃げ場がない」

左茲と姜維のいた所は壁に囲まれていて逃げ場がなかった。

左茲「ここはわかい者に托そう」

姜維「左茲殿！？何を」

左茲「小生が隙をつくる、その間におぬしは逃げよ」

そう言つと左茲はハンターに向かつて走りだした。

姜維「あつ！？左茲殿！」

左茲「何をしておる！捕まつた者たちの思いをむだにするつもりか？」

姜維「っ！」

そう言われ姜維は隙を見て走りだした。

ポンッ 左茲確保 残り8人

左茲「頼んだぞ・・・若き者たちよ」

次々と捕まる逃走者たち。

はたしてミッション成功なるか!?

次回 もつ負けたくない！その気持ちで逃走者のささえに

第32話 走れ！ひたすらに（後書き）

ゲームマスター「はあっ・・・」

ゲームマスターは監視カメラに背を向けあのペンダントの中の写真を見ていた。

幹部「ちょっといいかしら？」

ゲームマスター「はっ！」

幹部によばれペンダントをポケットのなかに隠した。

幹部「あんなね、ボーツとしてないでしっかりしなさいよ」

ゲームマスター「す、すいません・・・」

幹部「まあ、いいわ！それより・・・」

ゲームマスター「なっ、何ですか？」

幹部「あんた自分の名前知りたくないの？」

ゲームマスター「ーっ！」

確かにずっと月村サトシのモデルと言われ続け名前でよばれたことはない。

ゲームマスター「しっ、知りたいです！教えてください」

幹部「私の言うことちゃんときく？」

ゲームマスター「っ！は、はいつ・・・」

幹部「いい子ねー！それじゃ教えてあげるわ」

ゲームマスター「はいつ・・・！」

幹部「私とご主人様が考えて付けた名前なんだけどね！あんたは・・・  
・星村サトルっていうのよ」

ゲームマスター「星村サトル……!？」

それが……

私の名前！

幹部「そんじゃ頑張っ  
てね、星村サトルさん！」

そう言った幹部の言葉がゲームマスター・・・いや、星村サトルの  
なかにひびいた。

### 第33話 その先には（前書き）

このペースで更新して大丈夫かなあ・・・

### 第33話 その先には

そしてそのころ・・・

孫市「よーっ！孫策」

夏侯惇「まったく、手にかかるミッションだ」

孫市のもとに孫市と夏侯惇がとつちやく。

一方・・・

趙雲「はあっ・・・遠いなーと、いまはどの辺りだ」

孫策のもとへ向かう趙雲。

濃姫「あら、あなたは・・・」

そこに濃姫が合流。

趙雲「これは濃姫殿！一緒にミッションへ向かいますかっ？」

濃姫「うふっ・・・できればね？」

趙雲「では行きましょうか」

趙雲は濃姫と共に孫策のもとへ向かった。

そして孫策たちのもとへ2人の逃走者が着いた。

希羅「はあっ・・・ハンターに見つからずにすんだな」

龍義「だな・・・あとは誰がきてねえんだ？」

孫策「後は・・・濃姫と趙雲と姜維だな」

そう話をしていると1人の逃走者がきた。

姜維「はあっ、なんとかまいた」

孫策「おっ！姜維お前ハンターに追われてきたな」

孫策が姜維の肩を叩いた。

姜維「はい、あとは・・・」

孫策「あとは趙雲と濃姫か」

そしてそのころ趙雲と濃姫は

趙雲「うおおー!？」

濃姫「いやあー!！」

2体のハンターに追われていた。

趙雲「はっ！何だ？」

携帯がなりひびく。

濃姫「ちよっ・・・こっちに行きましょうよ」

濃姫に建物の陰に隠ようと促された趙雲。

建物の陰に隠れ電話にでた趙雲。

趙雲「もしもし？」

姜維「もしもし趙雲殿いまどこにいますか？」

趙雲「姜維か・・・はあっ」

濃姫「ちよつと貸しなさい」

趙雲から携帯をかりた濃姫

濃姫「もしもどうしたの」

姜維「えっと・・・いま、どこにいます?」

濃姫「趙雲って人と建物の辺りにいるわ」

姜維「そうですか・・・あなたたちだけなんですよ、きてないの」

濃姫「えっ・・・他の人たちはそっちにいるの?」

姜維「えっ!はあっ、そうですけど」

濃姫「そう・・・じゃあ」

そう言って電話をきり携帯を趙雲にわたした。

趙雲「姜維は何とおっしゃってましたか？」

濃姫「私たちだけよ、ミッションの場所にきてないの」

趙雲「そんな・・・どうすれば」

濃姫「ねえ私から提案があるんだけど」

趙雲「えっ？何ですか」

濃姫「ハンターにつかまりに行かない？」

趙雲「えっ・・・」

趙雲は驚いた。

趙雲「何言ってるんですか！濃姫殿」

濃姫「私たちがハンターにつかまれば他の逃走者たちはミッションできるんですよ？」

趙雲「それはそうですが・・・」

戸惑う趙雲。

たしかに濃姫と趙雲が捕まれば残りの集まった逃走者たちがミッシェンをする事ができる。

趙雲「だが、劉備殿のためにも捕まる訳には・・・」

濃姫「私だって捕まるのは御免よ！でも・・・ミッション成功させなかつたら街が」

更なるちんもく。

捕まりたくないのはみんな同じ。

仲間のために逃げきる。

趙雲「濃姫殿」

濃姫「ん？何」

趙雲「ハンターを・・・探しに行きましょう」

濃姫「そうね・・・」

2人のちかくにハンター・・・

趙雲「では・・・行ってきます」

濃姫「えっ・・・あっ！」

趙雲はハンターに向かって走りだした。

ハンターも趙雲に気づき走りだす。

趙雲「すいません！劉備殿・・・そしてみんな、この街を救ってくれ・・・」

ポンッ      趙雲確保      残り7人

濃姫「・・・・・・・・っ！」

ハンターは濃姫に気づき走った。

濃姫「後悔なんか、しないんだから・・・」

ポンッ 濃姫確保 残り6人

濃姫「私らしくないわね・・・こんな」

そしてー

逃走劇はさらなる物語を遂げる！

次回 ミッションはできるのか！？

勝つのはラピススズリかー

それとも逃走者たちかー

まさかのハンターかー

そして網鉄砲はつかうのかー！

### 第33話 その先には（後書き）

幹部と？？？は無双OROCHIを知っていたらわかるかもしれ  
ません！

### 第34話 思いは一つに（前書き）

畳み掛けの更新だ！

### 第34話 思いは一つに

ピリリリリリリ

逃走者のもとに2人の確保情報がとどいた。

希羅「おい・・・あの2人捕まったぞ」

姜維「そんな・・・ん？待てよ」

孫策「オレたち・・・ただだよな」

孫市「これで・・・」

龍義「ミッションが・・・」

夏侯惇「できる・・・」

逃走者たちは小型のレーザー銃をこしに付けているポーチからとりだした。

希羅「よし・・・行くぜ」

建物から逃走者たちはラピスラズリの方に走った。

孫市「おい！ラピスラズリー！！」

ラピスラズリのもとに着いた逃走者たち。

ラピスラズリは振り向く。

ラピスラズリ「何だ・・・お前らかよ、なんでそんなにじやまする訳？」

そう言われて黙る逃走者ではなかった。

希羅「よくそんな事が言えるな！」

孫策「お前らのせいで街がボロボロになっちまったんだぞ！」

姜維「しかも罪のない住民を傷つけて最低だ！」

孫市「一番になんかせねえからな！」

龍義「覚悟しろよ！」

夏侯惇「オレたちがお仕置きをしてやるからな！」

逃走者たちはレーザー銃をラピススズリに向けた。

ラピスラズリ「はっ？何だそんなおもちゃみてえな銃でオレをたおそうってのかよ」

ゲラゲラと笑うラピスラズリ。

希羅「ふざけんな・・・お前のせい・・・」

引き金に力をいれる。

希羅「どれだけの人間が傷ついていると思っ  
てやがるーっ!!」

逃走者たちはそれぞれ大声をだした。

孫策「みんなー!行くぜえっ!!」

全員「うおおおおーっ!!」

そして逃走者たちはラピスラズリに向かってレーザー銃を向けてはなった。

はなったレーザー銃は光のかたまりになった。

ラピスラズリ「くっ……くそがあっ!!」

ラピスラズリは魔法でガードした。

全員「いっけえーーーーっ!!」

ラピスラズリ「ぐっ・・・何だよ!あんな銃がこんなに力が強えなんて・・・」

ガードがだんだんと弱くなっていく。

ラピスラズリ「まだ・・・オレは負けねえ・・・うぐあああああ  
っ!!」

ガードがやぶられレーザーはラピスラズリにあたった

壁にたたきつけられ地面にたおれ込むラピスラズリ。

希羅「やつ……たのか？」

ポカーンとする逃走者たち

ピリリリリリ

メールだ。

孫策「ん？メールか」

姜維「希羅・龍義・孫市・孫策・姜維・夏侯惇の活躍によりラピスラズリをたおすことができた」

孫策「ってことは・・・ミッションクリアってことだよな！」

逃走者たちの歓声がひびいた。

ラピスラズリ「はあっ……ぜえっ……何で……」

地面を何度も殴るラピスラズリ。

そして警察と機動隊が駆け付けた。

男「いたぞ！ラピスラズリだ、捕らえる！！」

機動隊はラピスラズリを捕らえ警察のもとへつれて行った。

男「おとなしくするんだな！」

ラピスラズリ「ふさけんじゃねえ！オレは・・・くそっ！うああっ  
！」

叫ぶラピスラズリを男は思いっきり殴った。

男「まだわからんか！このガキが！お前のせいだな、たくさんの人間がケガをして傷ついたんだぞ！」

ラピスラズリ「うぐっ・・・」

ラピスラズリは機動隊と警察と共に連行されていった

希羅「さて・・・あとは逃げきるだけだな」

孫市「だな！さあ、それぞれ逃げようか！このままじゃ全員でいたところを見つかっちまうかもしんねえしな」

全員「おーっ！」

そしてそれぞれ走りだしていった。

次回 逃げきりはもう目の前！そしてクリスタルとラピスラズリ  
が互いに思いを伝えるー

### 第34話 思いは一つに（後書き）

星村サトルは画面を見ていた。

星村「さてと、逃走者もすくなくなってきたな」

そして星村サトルはポケットのなかのペンダントを握りしめた。



第35話 この気持ちは変わらない（前書き）

もつすぐテスト！更新おそくなるかも・・・

### 第35話 この気持ちは変わらない

孫策「うおっ!？」

いきなりハンターにでくわした孫策。

孫策「うわぁあっ!ふざけんなよっ!てこれ使えば・・・くらえ!  
!」

孫策は網鉄砲をハンターに向かってはなつた。

網はハンターに被さりハンターは網からでようとごいた。

その隙に逃げる孫策。

孫策「へー！すげえ・・・あんな仕組みになってんだ・・・ってわ  
ああ！！」

前から2体のハンターが走ってきた。

孫策「ちきしょうっ!!」

ポンッ 孫策確保 残り5人

孫策「くやしい!!逃げきると思ったのによ!!」

残り時間14分

クリスタル「あっ！ラピスラズリ・・・」

警察と機動隊に連れられたラピスラズリを見つけたクリスタル。

クリスタル「ラピスラズリ！」

ラピスラズリ「クリスタル・・・何だよ」

クリスタル「少し話したいんだ・・・！ちょっとだけできないか？」

男「何だ！こいつを警察署までつれていかなければ・・・」

クリスタル「頼む！話したいんだ」

男「くっ・・・そう言われてもな」

クリスタルは何度も話がしたいと警察に言った。

男「わかったよ、そこまで言うなら・・・少しだけだぞ」

クリスタル「ありがとう！ラピスラズリ、警察の所でも暴れちゃだめだぞ？」

ラピスラズリ「うるせえ！」

クリスタル「まったく・・・！ラピスラズリ、まってるからな！私は」

ラピスラズリ「はあっ？」

クリスタルを見ながらラピスラズリが言った。

クリスタル「私の秘書はお前しかない、そうだろう？」

ラピスラズリ「オレ・・・」

ラピスラズリは思った。

街をボロボロにし、人を傷つけてクリスタルを利用したというのに。

ラピスラズリ「お前バカじゃねえの？オレは・・・一番になるために利用したのによ・・・」

ラピスラズリはそう言った

たくさんの涙をながしながら。

クリスタル「ラピスラズリ」

ラピスラズリ「クリスタル……オレ言わなきゃいけないことがあるんだ」

クリスタル「ん？何だ」

ラピスラズリ「前にオレが住民が税金がたかいつて言つてたつてお前に言つたよな」

クリスタル「ああ、そうだな・・・」

ラピスラズリ「でも、うそなんだ・・・あれ」

クリスタル「えっ？」

ラピスラズリ「住民は税金がたかいなんて言つてなかった」

クリスタル「だが、ラピスラズリ！何でそんな・・・うそを・・・」

ラピスラズリ「お前がうらやましかったんだよ・・・みんなから慕われてさ」

クリスタル「そうか・・・では、住民は何か言ってたか？」

ラピスラズリは涙をふいた

ラピスラズリ「この街は・・・」

クリスタルをまっすぐ見るラピスラズリ。

ラピスラズリ「最高だ・・・ってな」

この言葉をきいた時に涙をクリスタルは流した。

この街を建設して間違ってた。

クリスタルはそう思った。

ラピスラズリ「じゃ・・・な」

クリスタル「お前が帰ってくるのまってるからな・・・ラピスラズリ！」

ラピスラズリは警察のパトカーにのせられて行った。

クリスタル「さて、私も住民にあやまらなければ」

住民たちのもとへクリスタルは走っていった。

次回 逃げなきゃつかまる！だけど負ける訳にもいかない

第35話 この気持ちは変わらない（後書き）

クロノス社ってどういう所なんだろうなー

### 第36話 意外な珍客（前書き）

星村「さて、どうする逃走者たちよ」

画面を見ながら星村は言った。

そしてペンダントをとりだしてなかの写真を見た。

星村「ミキ・・・」

その写真の女性を見ながら星村はつぶやいた。

星村「君と私はいつになったらここから解放されるんだろうな・・・」

幹部「ちよつと何言ってるのよ」

モニター越しの幹部の声に星村はおどろいた。

星村「すいません・・・」

幹部「そんなに愛しい人が気になるの？」

幹部がくすりと笑った。

星村「ミキは・・・」

幹部「ミキさんは私がちゃんとして監禁してるから大丈夫よ？」

星村「そうですか・・・」

幹部「ミキさんが大事なら言うことちゃんときいてねー！それじゃ」

幹部からの連絡のあとに星村は画面へと向き直った。

星村「ミキ、君は私が助ける・・・それまでまっけていてくれ」

幹部にきこえないように星村はつぶやいた。

### 第36話 意外な珍客

龍義「あと10分・・・」

希羅「オレ、まさかここまで逃げ延びるとは思わなかった・・・」

建物の陰に隠れる希羅と龍義。

希羅「やべっ、ハンター・・・」

龍義「マジかよ・・・」

ハンターを見つけた希羅。

龍義もハンターが通り過ぎるのをまつた。

希羅「いやだ、捕まりたくねえ・・・」

ふるえる希羅を龍義が見た

龍義「大丈夫だ、希羅・・・もうハンターは行ったしん？」

希羅の足元に一羽のニワトリがいた。

希羅「何だよ、コイツ！」

龍義「どこからか逃げだしてきたのか？」

そしてニワトリが大声で鳴いた。

希羅「うわっ！でけー声だすなよ！！」

龍義「希羅！お前も声がでけえ！って・・・えっ？」

希羅と龍義にハンターが走ってくる。

2人は猛ダッシュで走った

希羅「ちくしょっ！なんでニワトリがああタイミングでなくんだよ」

龍義「このままじゃ2人とも捕まっちゃう、別々に逃げようぜ！」

希羅は建物の中に入り龍義は左にまがった。

希羅「うああ！」

希羅は建物のなかのハンターと鉢合わせ。

希羅「いやだ〜！くそっ！」

ポンッ 希羅確保 残り4人

龍義「ちきしょー！」

一方、龍義もハンターに追われていた。

龍義「捕まるかよ、ひっ！あ！？」

だが石につまずきこけてしまった。

地面にたおれている龍義に向かってあるいていくハンター。

ポンッ      龍義確保      残り3人

龍義「うわぁゝマジかよ！」

これで残る逃走者は姜維・雑賀孫市・夏侯惇の3人。

この3人はどのような逃走劇をみせるのか！

次回 どう動いてどう逃げるのか！それは逃走者次第だ

### 第36話 意外な珍客（後書き）

逃走者はハンターに勝てるのか!？

### 第37話 受け継いだ思い（前書き）

更新のペースはこのくらいかな・・・

### 第37話 受け継いだ思い

姜維「もう少しで逃げきるな・・・」

孫市「けっ！捕まってたまるかってんだ」

夏侯惇「これがあるから逃げきるのも容易だな」

夏侯惇と孫市は網鉄砲を持っているため逃げやすい。

そしてハンターはある逃走者をみつけた。

姜維「へっ!？」

姜維だ・・・

夏侯惇「あれは・・・姜維!？」

夏侯惇は姜維を見つけた。

姜維「はあっ・・・しんどい！あっ」

足がふらつき地面にたおれる姜維。

夏侯惇「姜維ー！？」

姜維「くっ！逃げてください」

ポンッ 姜維確保 残り2人

姜維「くやしい・・・」

これで残る逃走者は・・・

孫市「はあっ・・・捕まるのは御免たぜ」

自分をせめながらもつかまった者のために逃げつづけた雑賀孫市。

夏侯惇「あともう少しで逃げきるぞ」

ハンターの追跡をかわし、ミッションに挑み状況を有利に持ち込んだ夏侯惇。

夏侯惇はパーティー会場のなかに隠れる。

夏侯惇「ちっ！こんなときに・・・」

パーティー会場のなかにハンターがはいってきた。

夏侯惇はテーブルの下へといそいでかくれた。

しかし・・・

ハンターはそれを見のがさなかった。

ハンターは夏侯惇が隠れたところをのぞいた。

夏侯惇「うおっ!？」

ハンターに気づいた夏侯惇はパーティー会場からでて一気にはしる。

夏侯惇「くっ・・・勢いででてきてしまったが、どこかに隠れなければ・・・」

孫市は辺りを確認しながら走っていた。

孫市「あれは、夏侯惇か・・・あいつも焦ってんだな」

孫市は隠れ場所を探す夏侯惇をみて言った。

残り時間はあと3分。

夏侯惇「あれは、ハンターか？」

遠くにハンターを見つけた夏侯惇。

夏侯惇は建物の陰に隠れ近くにあったダンボールで壁をつくった。

夏侯惇「これで見つかりにくいだろうな・・・ん？」

そのときメールがきた。

孫市「通達・・・残り1分になるとハンターが4体追加され合計10体となる・・・つてはあ！？体力もげんかいだつてのに」

夏侯惇「なんてこった・・・ハンター増えるわ、へりにまだ監視されてるわ・・・でどう逃げろというのだ」

一方牢獄では―

夏侯淵「おい！ふざけんなよ！！へたすりゃ―逃走者みんな捕まっちまうだろ！―」

秀吉「なんでこんな状況にするんじゃよー！―」

この2人が騒いでいた。

孫市「なんか・・・試されてんのかな、オレたち・・・」

孫市は肩をすくめて言った

夏侯惇「もうすぐ1分になるな・・・」

ダンボールで身を隠しながら夏侯惇は言った。

そしてー

残り1分になった。

エリアには4体のハンターが召喚された。

孫市「残り55秒、やべっ・・・何か・・・はあっ、へんな感じしてきた」

建物の陰に隠れる孫市。

だが・・・追加されたハンターに見つかった。

そしてダンボールから様子をみていた夏侯惇。

夏侯惇「あっ・・・」

ハンターとめが合った。

2人は全速力で逃げる。

孫市「雑賀孫市の力・・・あなどんじゃねえーぜ！」

スピードを上げてハンターから逃げる。

夏侯惇「オレの実力・・・思い知れ！」

スピード全力でハンターから逃げる。

そして残り30秒。

牢獄の者たちがカウントダウンをはじめた。

孫市「はあっ・・・まだ追ってきやがる」

夏侯惇「くそっ・・・どこまで追ってくるんだ、うあっ!？」

前から別のハンターが走ってきた。

孫市「これでも、くらいな!」

孫市は前から走ってくるハンターに網鉄砲をはなった

ハンターは網にからまりじたばたしている。

夏侯惇「すまん、孫市……」

孫市「別にいいぜ！それよりも……」

後ろを向いたらハンターたちが走ってきた。

夏侯惇「おりゃ！」

夏侯惇が網鉄砲をはなった

1体のハンターが網にからまるが残りのハンターは、夏侯惇に向かって走る。

孫市「夏侯惇！！」

夏侯惇「あとは頼んだぞ・・・負けるなよ・・・孫市」

ポンッ 夏侯惇確保 残り1人

孫市「くっ……！その思い無駄にはしねえぜ」

そう言って追ってくるハンターから孫市は走って逃げていった。

次回 ついに完結！孫市VSハンター、はたしてこの逃走劇を制するのは！？



第37話 受け継いだ思い（後書き）

いよいよ次回は完結！

**最終話 乗り越えてこれたのは仲間がいたから（前書き）**

ここまで見てくださってありがとうございます！

**最終話 乗り越えてこれたのは仲間がいたから**

孫市「くっ……しつげえぞ！ハンターのやつ……」

ハンターはまだ孫市を追っていた。

秀吉「あと10秒！」

そして勝敗を分けるカウントダウンー！

10、9、8、7、6・・・

孫市「はあっ・・・ぜえっ」

走り続ける孫市。

5、4、3、・・・

ハンターが孫市にふれようとする。

ガラシャ「孫・・・逃げて」

秀吉「孫市・・・負けるなよ」

2、  
1、  
0

雑賀孫市 逃走成功 賞金獲得

孫市「はあっ・・・オレ」

ハンターが追ってこない事に孫市は気づいた。

孫市「オレ・・・逃げきったんだ・・・」

孫市はあふれる涙を手で覆った。

そしてそのころ牢獄で孫市の逃走成功のメールを見ていた逃走者たち。

夏侯淵「くそっ！惇兄捕まっちまったか……でもあの孫市って奴  
すげえな……！」

カウントダウンの後の逃走者の歓声はさらに増していった。

ねね「あっ！孫ちゃんだよ」

孫市が牢獄の所まできた。

秀吉「孫市い！お前すげえなあ〜！！」

ねね「孫ちゃん・・・すごいよ」

孫市「うん、オレ諦めないでよかった・・・ひっく、うぐっ・・・」

ガラシャ「孫・・・」

ガラシャが孫市に向かって言った。

ガラシャ「孫！おっおめでとうなのじゃ・・・あと三ヶ月の時  
言い過ぎたのじゃ、御免！」

孫市「ああ・・・結構前のことだな・・・オレだってあの時ミッシ  
ョン行かなくて悪かったな」

スタッフ「孫市さん！これを」

スタッフは孫市に鍵を渡した。

そして孫市は賞金を手にとる。

孫市「おうよ！賞金ゲットしたぜー！！」

全員「イエーイ！」

一人ひとりが仲間を思いあきらめないで頑張った逃走中。

それは新しい歴史の1ページのはじまりだった。

彼らはまた逃走劇を見せてくれるかもしれない。

それはまた次の話で。

次回 クリスタルタウンそのあとの物語。

**最終話 乗り越えてこれたのは仲間がいたから（後書き）**

更新をして数ヶ月・・・

走る英雄たち完結をしました！

次回作や新しいシリーズをよろしくおねがいします！

番外編 クリスタルタウンの奇跡（前書き）

更新おそくなっちゃった

番外編 クリスタルタウンの奇跡

クリスタル「すまなかった」

英雄たちの逃走劇が行われている時。

クリスタルは住民たちに土下座をして謝っていた。

クリスタル「私のせいであなた方に迷惑をかけてしまった・・・街がボロボロになったのも」

住民「クリスタルさん」

住民がクリスタルの言葉をさえぎった。

住民「一度あなたは道を選んだ・・・だけどそれは間違いだった」

クリスタル「ああ！そうだよ、だからこうやって謝って」

住民「また頑張りますか？」

クリスタル「はっ？」

クリスタルはポカンとした

住民「またこの街の一番になるために頑張りますか？街をまた美しくして私たちも手伝いますから街のために・・・」

クリスタル「そんな！私はあなたは方に・・・」

住民「クリスタルさんは街をでていかないで！またこの街を美しくするにはあなたの力があるんです」

住民「そうだよ！間違っただけならまた新しい道を築けばきっと大丈夫だから」

住民「あなたのやった事は間違いだけど！クリスタルタウンを建設してくれ時のようにこの街を美しくしましょうよ」

クリスタルは意外だと思った。

住民たちはクリスタルをまた一番でないといけないうってくれた。

クリスタル「なんだ、近くにこんな素晴らしい住民たちがいたなんてな・・・」

クリスタルは泣いた。

住民たちはクリスタルを慰めてまた街を綺麗にするための作業がはじまった。

あれから時はながれー

クリスタルタウンは活気があふれていた。

クリスタル「ラピスラズリ！」

クリスタルはハッとした。

クリスタル「ラピスラズリはどうしてるだろうか・・・」

クリスタルは部屋をでて街をあるいきはじめた。

クリスタル「あの時はばかなまねをしたな・・・でも乗り越えてこ  
こまでき・・・」

ラピスラズリ「クリスタル！」

後ろからよばれクリスタルは振り返った。

クリスタル「ラピスラズリ!？」

ラピスラズリはクリスタルのもとに走ってきて一言つぶやいた。

ラピスラズリ「ただいま・・・」

クリスタル「お帰り・・・」

その光景を見ていた住民たちが一斉に駆け寄ってきた

住民「久しぶりだな！ラピスラズリ」

ラピスラズリ「あつ、ああ」

住民「もうあんな事すんなよ！道を間違えるな」

ラピスラズリ「おっ、うん」

住民「街がきれいになったんだからもうボロボロにしないでね」

ラピスラズリ「あっ・・・」

ラピスラズリは涙をながしていた。

ラピスラズリ「うっあ、ひっく・・・こんな、オレをゆる、っ・・・  
あっ、うっく」

クリスタルはラピスラズリをやさしく抱き寄せた。

ラピスラズリ「クリスタルっ・・・」

クリスタル「また・・・秘書になってくれないか？ラピスラズリ」

クリスタルがラピスラズリリに言った。

ラピスラズリ「んっ、うんっ！オレもう間違えないように頑張る・・・」

住民「うおおー！」

住民たちの歓声。

クリスタル「そうか、ありがとうな・・・ラピスラズリ」

この日のクリスタルタウンはいつもより賑やかだった

次回 月村サトシの思惑と次の舞台の予告編！

番外編 クリスタルタウンの奇跡（後書き）

漫画の様な話でしたね・・・クリスタルタウン！なんちゃって！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2732q/>

---

逃走中×無双×現代人    ~ 走る英雄たち ~

2011年11月17日16時53分発行